

西台畠遺跡第1・2次調査

—仙台市あすと長町土地区画整理事業関係遺跡発掘調査報告書V—

2010年3月

仙台市教育委員会

独立行政法人 都市再生機構

仙台市文化財調査報告書第 359 集

西台畠遺跡第 1・2 次調査

—仙台市あすと長町土地区画整理事業関係遺跡発掘調査報告書 V —

2010 年 3 月

仙 台 市 教 育 委 員 会

独立行政法人 都市再生機構



II区北側全景(南から)



IV区SD31溝跡(郡山II期宮衙外溝)全景(南西から)



I区SI2竪穴住居跡カマド(南から)



IV区SI29竪穴住居跡カマド(西から)



I 区下層調査区SK22土器埋設遺構(西から)



I 区下層調査区SK2土壤墓(西から)



第1・2次調査出土土師器



第1・2次調査出土須恵器



II区SI22竪穴住居跡出土土器



IV区SI29竪穴住居跡出土土器



I区SD17A溝跡出土高环(上:左侧土器断面)



第1・2次調査出土弥生土器

序 文

仙台市の文化財保護行政に対しまして、日ごろからご理解、ご協力を賜り感謝申し上げます。市内には、旧石器時代から近世にいたるまで数多くの埋蔵文化財が遺っております。当教育委員会では、先人たちの遺した貴重な文化遺産を保護し、保存・活用を図りながら次の世代に継承していくよう努めているところであります。

本報告書は、国史跡指定を受けた多賀城造営以前の陸奥国府と考えられる郡山遺跡官衙の西側で、平成10年から進められている「仙台市あすと長町土地区画整理事業」に伴う、西台畠遺跡の第1・2次調査の成果をまとめたものです。

西台畠遺跡は、昭和32年、当時操業していた煉瓦工場地内で原料となる粘土の採掘中に弥生土器が発見され、東北大学の伊東信雄先生により出土状況の調査が行われております。この時の資料は、弥生時代中期の仙台平野における葬制を考える上で貴重な資料となっており、学史的にも注目される遺跡であります。

また、区画整理事業に伴うこれまでの調査では、140軒以上の堅穴住居跡が見つかっており、隣接する長町駅東遺跡とともに飛鳥～奈良時代の集落としては、東北地方でも最大級の集落がこの事業地内にあったことが明らかになってきました。しかもこの二つの集落は、郡山遺跡の官衙の造営や運営に携わった人々の計画的に造られた集落と考えられるなど、調査の開始から10年を経て、これまで未解明であった郡山遺跡官衙の周辺での人々の生活が、我々の目の前に姿を現してきております。

当教育委員会では、発掘調査状況の公開・活用を進めるため、調査の概要を紹介する広報板の掲示や遺跡見学会の開催など、今後もより多くの市民の皆様に興味を持っていただけるような活動を行っていきたいと考えております。そのためにも、今回の調査成果が、地域の歴史を解き明かしていくための貴重な資料となり、多くの方々に活用されれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から本報告書の刊行に際しまして、ご指導、ご協力くださいました皆様に深く感謝申し上げる次第です。

平成22年3月

仙台市教育委員会

教育長 荒井 崇

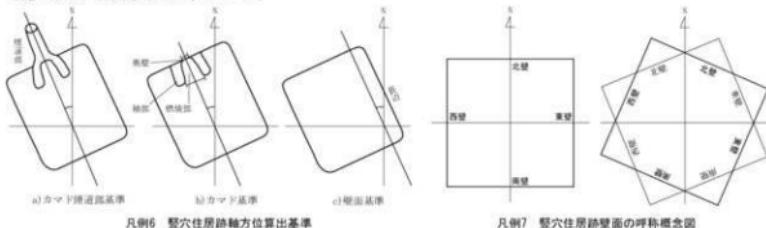
例　　言

1. 本書は、「仙台市あすと長町土地区画整理事業」に伴い仙台市教育委員会が実施した西台畠遺跡における発掘調査のうち、1998年度～2000年度に実施した、第1・2次調査（確認調査、調査I・II・IV・VI・VII区発掘調査）および第3次調査の一部（調査I区北側・IV区東側）の成果を収録したものである。
2. 本書の作成は、仙台市教育委員会生涯学習部文化財課工藤 信一郎、荒井 格の監理の下、遺構図トレース、出土遺物の登録・実測およびトレース・写真撮影、執筆、編集に至るまでの作業を国際文化財株式会社が担当した。
3. 本書の執筆・図版作成は、第1章・第2章第3節・第3章を工藤 信一郎、第2章第1-2節を鶴久森 彰（国際文化財株式会社、以下同じ）が担当した。第4章は佐藤 洋が担当し、工藤 司が協力した。第5章は、遺構事実記載を佐藤、石器を除く遺物事実記載を工藤 司、石器事実記載を鶴久森が担当し、遺構事実記載には工藤 司が協力した。第7章は、第1節(1)・(2)を佐藤、第1節(3)を工藤 信一郎、第2節・第3節(1)を工藤 司、第3節(2)を鶴久森が執筆した。遺物写真撮影は利屋 勉が担当した。編集は工藤 司が担当し、鶴久森・佐藤がこれに協力した。
4. 第6章における自然科学分析については、下記の諸氏、機関に分析・執筆を依頼した。
 - 第2節 西台畠遺跡より出土した木製品の樹種・・・・・・・・・・・・古代の森研究室 吉川 純子
 - 第3節 仙台市西台畠遺跡のプラントオパール分析 ・・・・・・・・・・・・株式会社 古環境研究所
5. 石器・石製品の石材については、蟹澤 聰史東北大名誉教授（理学博士）に鑑定していただいた。
6. 陶磁器の鑑定は、佐藤 洋（仙台市教育委員会生涯学習部文化財課）が行った。
7. 発掘調査および整理作業に際し、以下の方々から多くの御指導・御協力を賜った。ここに記して感謝の意を表する次第である。
今泉 隆雄、岡田 茂弘、（故）工藤 雅樹、桑原 淳郎、進藤 秋輝、須藤 隆、早坂 春一、松本 秀明（五十音順・敬称略）
8. 本書に掲載した写真の一部には、本遺跡発見の契機となった和泉（旧姓伊勢）和歌子氏から借用した写真を複写したものを使用している。また、本遺跡の発見当時、（故）伊東信雄東北大名誉教授と共に発掘調査を実施された伊藤玄三法政大学名誉教授からは、本遺跡に関する御自身の論考を提供頂いた。ここに記して改めて感謝の意を表する次第である。
9. 本書の調査成果については、これまでに現地説明会資料や古代城柵官衙遺跡検討会などにおいて、その内容の一部が紹介されているが、本書の記載内容がそれらに優先する。
10. 調査・整理に関する全ての資料は仙台市教育委員会が保管している。

凡　　例

1. 第1図・第4図の地形図は、それぞれ国土地理院発行「長町」1:10,000、「仙台」1:50,000を使用した。
2. 遺構図中の座標値は、「平面直角座標第X系」を基準としている。図中および本文記載の方位北は、全て座標北を基準としている。
3. 本書中の土色の記載には、「新版 標準土色帖」2000年版（農林水産省農林水産技術会議事務局監修）を使用した。
4. 断面図中の数値は、海拔高度（T.P.）を示す。
5. 調査において検出された遺構については以下の遺構記号を使用し、遺構ごとに番号を付した。
SB：掘立柱建物跡 SD：溝跡 SI：竪穴住居跡・竪穴遺構 SK：土坑 SX：性格不明遺構 Pit：ピット
6. 竪穴住居跡の軸方位は以下の基準にて算出し、これに該当しないものは報文中にて個別に基準を記載した（次頁参照）。
 - a) カマド煙道部が残存するもの：煙道部の長軸（カマド煙道部基準）。
 - b) カマド煙道部が搅乱等により失われ、カマド袖部ないし燃焼部のみ残存するもの：奥壁の中心とカマド両袖部の幅の中心ないし燃焼部の中心を結んだ線（カマド基準）。

- c) カマド全体が壊乱等により失われているもの:壁面の長辺に並行する線(壁基準)。
7. 穴住跡壁面の呼称については、下図のように真北から東西45°以内の方向に對して交わり、北側に位置する辺を「北壁」とした。他邊もそれに準じている。



8. 道構図版に使用したスクリーントーンは以下の通りである。



9. 出土遺物の登録には以下の遺物記号を使用し、種別毎にアラビア数字を付した。ただし、石器については分類にあたり遺物記号Kの後に小文字アルファベットを付し、その分類種別を使用している。

A : 繩文土器 B : 弥生土器 C : 土師器(非ロクロ調整) D : ロクロ土師器 E : 須恵器 F : 丸瓦 G : 平瓦
I : 陶器・土師質土器 J : 磁器 Ka : 打製石器 Kc : 碽石器 Kd : 石製品 L : 木製品類 N : 金属製品
P : 土製品 Q : 骨角器

10. 遺物実測図の縮尺については、原則として、打製石器は $2/3$ (石蹴のみ $1/1$)、古銭は $1/2$ 、これ以外は $1/3$ とした。ただし、その縮尺での掲載が困難なものについては適宜縮尺を変更し、個別にスケールを付した。
11. 石器・石製品、木製品類、骨角器の遺物実測図において、展開した面に小文字アルファベットを付したものがある。報文中における「a面、b面、c面…」の記載は、該当する遺物実測図に付された各面に対応する。
12. 土師器の実測図に使用したスクリーントーンは以下の通りである。これ以外のものについては、その都度図中に示した。



13. 弥生土器、土師器、須恵器における、器種および部位呼称、計測位置は、右図の通りである。

14. 石器・石製品の実測図に使用したスクリーントーンは以下の通りである。



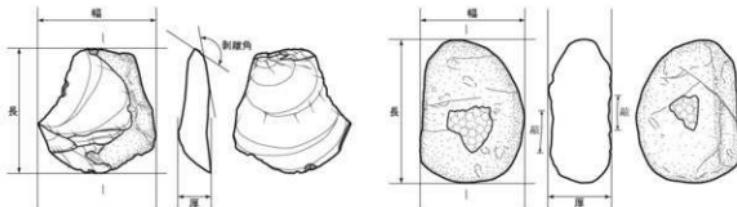
15. 土師器・石製品を除く遺物実測図に使用したスクリーントーンについては、その都度図中に示した。

16. 石器観察表の表記については、以下の基準を設けた。

- ・打製石器 a) 母岩: 同一母岩と考えられる石器が一定量出土しており、それらについて母岩番号(1 ~ 52)を付した。
母岩別の対応表は、第7章第3節第2項に掲載した。
- b) 打面形状: 平坦打面:「平坦」、切子打面:「切子」、点打面:「点」、線打面:「線」、自然面打面:「自然」、
節理面打面:「節理」、打面部が欠損しているものや二次加工が施されて打面形状が分からぬるもの:「-」
- c) 自然面の有無: 自然面の有るもの:「有」、自然面の無いもの:「無」

- ・縛 石 器
 - a) 磨痕面数：面数と磨痕の形状を示した。形状は凹面、凸面、平坦面を、それぞれ「凹」・「凸」・「平」で示した。
 - b) 凹痕面数：凹痕のみられる面数を示した。
 - c) 凹痕形態：各面に一つのまとまりをもった凹痕が単独で存在するものを「単」、複数存在するものを「複」とし、2面以上にみられる場合は「+」で連結した。
 - d) 凹痕深さ：凹痕の深さを「深」・「浅」で表し、2面以上にみられる場合は「+」で連結した。
 - e) 敲打痕箇所：縛の平面形状で長軸側の端縁を「端」、短軸側の側縁を「側」で表し、数字は箇所数を示した。
 - f) 敲打痕程度：全体を通してみた敲打による破損の程度を「強」・「弱」で示した。

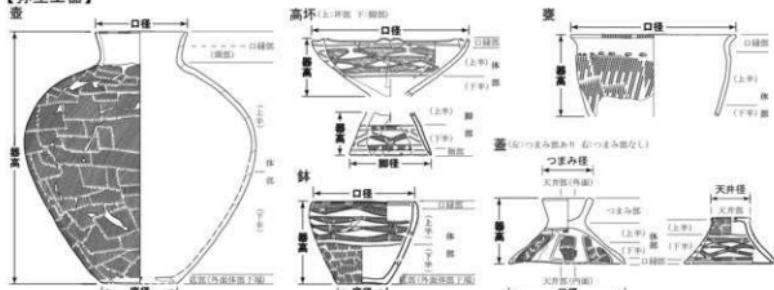
17. 石器・石製品の実測図における計測位置は、下図の通りである。



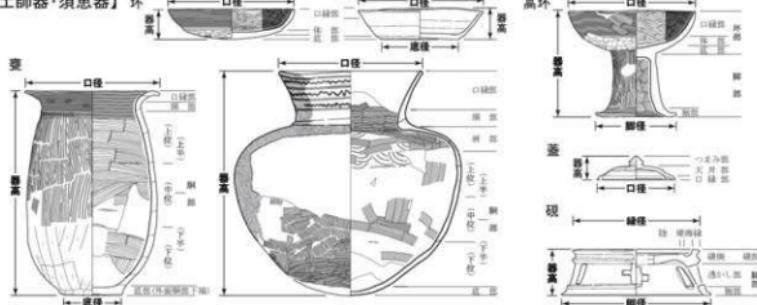
18. 遺構・遺物の観察表内における括弧付の計測値は、土器類の各径については推定、その他については残存値を示す。

19. 掲載した遺物写真の縮尺は原則として遺物実測図に準じた。但し、その縮尺での掲載が困難な場合は、適宜縮尺を変更した。

【弥生土器】



【土師器・須恵器】



目 次

卷頭カラー写真

序文

例言

凡例

第1章 調査にいたる経過	1
第1節 調査事由	1
第2節 調査要項	1
(1) 第1次調査(平成10年度)調査体制	1
(2) 第2次調査(平成11年度)調査体制	2
(3) 調査報告書作成体制(平成21年度)	2
第3節 第1次調査(平成10年度)遺構確認調査	3
(1) 遺構確認調査にいたる経過	3
(2) 調査区の設定と調査の方法	3
(3) 確認調査の概要	3
(4) 確認調査所見	4
第4節 第2次調査(平成11年度)遺構確認調査	4
(1) 宅地造成予定地を対象とした確認調査	4
(2) 確認調査所見	4
(3) 区画道路を対象とした確認調査	5
第2章 遺跡の立地と環境	6
第1節 西台畠遺跡の立地と地形	6
第2節 周辺の遺跡と歴史的環境	6
第3節 これまでの西台畠遺跡の調査について	9
第3章 調査の方法と概要	10
第1節 調査の方法	10
(1) 調査区の設定	10
第2節 調査概要	11
(1) 調査経過	11
(2) 測量基準・図面の作成	12
(3) 遺物の取り上げ・調査記録の作成	12
(4) 遺構登録番号	12
(5) 調査報告書作成作業	12

第4章 基本層序	13
----------	----

第5章 検出遺構と出土遺物	22
第1節 確認調査で検出された遺構と遺物	22
(1) 第2次調査に伴う確認調査	22
(2) 確認調査出土遺物	24
第2節 中世の遺構と遺物	29
(1) 掘立柱建物跡	30
(2) 溝跡	31
(3) 井戸跡	38
(4) 土坑	42
(5) ピット	45
第3節 古代～中世の遺構と遺物	46
(1) 溝跡	46
(2) 土坑	53
(3) ピット	54
第4節 古代の遺構と遺物	62
(1) 壁穴住居跡	64
(2) 掘立柱建物跡	152
(3) 溝跡	157
(4) 区画施設	164
(5) 土坑	180
(6) ピット	182
(7) 性格不明遺構	183
(8) 遺構外出土遺物	188
第5節 弥生時代以前の遺構と遺物(下層調査)	196
(1) V層上面検出遺構	199
a. 土器埋設遺構	199
b. 土壙幕	200
c. 土坑	203
(2) VI層上面検出遺構	204
a. 土坑	204
b. ピット	204
(3) IV層出土遺物	205
(4) V層出土遺物	232
(5) VI層出土遺物	240
(6) VII層出土遺物	242
(7) X層出土遺物	244
(8) XI層出土遺物	245

(9) 出土地・層位不明出土遺物	246
(10) 接合資料	255
第6章 自然科学分析	273
第1節 分析の目的	273
第2節 西台畠遺跡より出土した木製品の樹種	274
第3節 仙台市西台畠遺跡のプラント・オパール分析	276
第7章 まとめ	281
第1節 古代の遺構について	281
(1) 積穴住居跡について	281
(2) 遺構重複状況	285
(3) 西台畠遺跡の集落について	287
第2節 古代の遺構出土土器について	291
第3節 弥生時代の遺物について	303
(1) 土器	303
(2) 石器	311
第4節 まとめ	322
引用参考文献	324
写真図版	327
報告書抄録	

挿図目次

第1図 遺跡位置図	2	第13図 第1次確認調査出土遺物(3)	28
第2図 第1・2次確認調査トレチ配置図	5	第14図 第2次確認調査出土遺物	28
第3図 西台畠遺跡と周辺の遺跡	7	第15図 I区遺構配置図(中世)	29
第4図 調査区・グリッド配置図	11	第16図 IV区遺構配置図(中世)	30
第5図 基本層序 4トレチ	14	第17図 SB3掘立柱建物跡	31
第6図 基本層序 I区	15・16	第18図 I区溝跡(中世)	32
第7図 基本層序 II区	18	第19図 IV区溝跡(中世)	33・34
第8図 基本層序 IV区・VI区	19・20	第20図 SD26溝跡出土遺物	36
第9図 基本層序 VII区	21	第21図 SD27溝跡出土遺物(1)	36
第10図 宅地部分確認調査(第2次調査)		第22図 SD27溝跡出土遺物(2)	37
トレチ平面・断面図	23	第23図 SD32溝跡出土遺物	38
第11図 第1次確認調査出土遺物(1)	26	第24図 SE1戸井跡	39
第12図 第1次確認調査出土遺物(2)	27	第25図 SE1戸井跡出土遺物	39

第26図	SE2井戸跡	40	第65図	SI7竪穴住居跡	83
第27図	SE2井戸跡出土遺物(1)	40	第66図	SI7竪穴住居跡出土遺物	84
第28図	SE2井戸跡出土遺物(2)	41	第67図	SI11竪穴住居跡	84
第29図	SE3井戸跡	41	第68図	SI12竪穴住居跡	86
第30図	土坑(中世)	42	第69図	SI12竪穴住居跡出土遺物	87
第31図	I区ピット(中世)	43・44	第70図	SI13竪穴住居跡(1)	88
第32図	IV区ピット(中世)	45	第71図	SI13竪穴住居跡(2)	89
第33図	ピット(中世)出土遺物	45	第72図	SI13竪穴住居跡出土遺物(1)	90
第34図	I区遺構配置図(古代～中世)	47	第73図	SI13竪穴住居跡出土遺物(2)	91
第35図	II区遺構配置図(古代～中世)	48	第74図	SI13竪穴住居跡出土遺物(3)	92
第36図	IV区遺構配置図(古代～中世)	49	第75図	SI14竪穴住居跡	94
第37図	I区溝跡(古代～中世)	50	第76図	SI14竪穴住居跡出土遺物	94
第38図	II区溝跡(古代～中世)	51	第77図	SI15竪穴遺構	95
第39図	IV区溝跡(古代～中世)	52	第78図	SI16竪穴住居跡	96
第40図	土坑(古代～中世)	53	第79図	SI16竪穴住居跡出土遺物	96
第41図	土坑(古代～中世)出土遺物	54	第80図	SI17竪穴住居跡	97
第42図	ピット(古代～中世)出土遺物	54	第81図	SI17竪穴住居跡出土遺物	97
第43図	I区ピット(古代～中世)	55・56	第82図	SI18竪穴住居跡(1)	99
第44図	II区ピット(古代～中世)	57・58	第83図	SI18竪穴住居跡(2)	100
第45図	IV区ピット(古代～中世)	59・60	第84図	SI18竪穴住居跡出土遺物(1)	101
第46図	VII区ピット(古代～中世)	61	第85図	SI18竪穴住居跡出土遺物(2)	102
第47図	I区遺構配置図(古代)	62	第86図	SI19竪穴住居跡	104
第48図	II区遺構配置図(古代)	63	第87図	SI20竪穴住居跡	105
第49図	IV区遺構配置図(古代)	64	第88図	SI20竪穴住居跡出土遺物	105
第50図	VII区遺構配置図(古代)	65	第89図	SI21竪穴住居跡	106
第51図	SI1竪穴住居跡	66	第90図	SI22竪穴住居跡(1)	108
第52図	SI2竪穴住居跡	67	第91図	SI22竪穴住居跡(2)	109
第53図	SI2竪穴住居跡出土遺物(1)	69	第92図	SI22竪穴住居跡出土遺物(1)	110
第54図	SI2竪穴住居跡出土遺物(2)	70	第93図	SI22竪穴住居跡出土遺物(2)	111
第55図	SI2竪穴住居跡出土遺物(3)	71	第94図	SI22竪穴住居跡出土遺物(3)	112
第56図	SI3竪穴住居跡(1)	73	第95図	SI22竪穴住居跡出土遺物(4)	113
第57図	SI3竪穴住居跡(2)	74	第96図	SI23竪穴住居跡	115
第58図	SI3竪穴住居跡出土遺物(1)	75	第97図	SI23竪穴住居跡出土遺物(1)	115
第59図	SI3竪穴住居跡出土遺物(2)	76	第98図	SI23竪穴住居跡出土遺物(2)	116
第60図	SI4竪穴住居跡	77	第99図	SI24竪穴住居跡(1)	117
第61図	SI4竪穴住居跡出土遺物	78	第100図	SI24竪穴住居跡(2)	118
第62図	SI5竪穴住居跡・出土遺物	79	第101図	SI24竪穴住居跡出土遺物	120
第63図	SI6A・6B竪穴住居跡	81	第102図	SI25A竪穴住居跡	121
第64図	SI6A竪穴住居跡出土遺物	82	第103図	SI25A竪穴住居跡出土遺物	122

第104図	SI25B堅穴住居跡	123	第143図	V区溝跡(古代)出土遺物	164
第105図	SI26堅穴住居跡	124	第144図	SD17A・B溝跡	165・166
第106図	SI26堅穴住居跡出土遺物	125	第145図	SD17A溝跡出土遺物(1)	168
第107図	SI27堅穴住居跡	126	第146図	SD17A溝跡出土遺物(2)	169
第108図	SI27堅穴住居跡出土遺物	127	第147図	SD17A溝跡出土遺物(3)	170
第109図	SI28堅穴住居跡	129	第148図	SD17A溝跡出土遺物(4)	171
第110図	SI28堅穴住居跡出土遺物	129	第149図	SD17A溝跡出土遺物(5)	172
第111図	SI29堅穴住居跡(1)	130	第150図	SD17B溝跡出土遺物	174
第112図	SI29堅穴住居跡(2)	131	第151図	SD31溝跡(郡山Ⅱ期官衙外溝)	175・176
第113図	SI29堅穴住居跡出土遺物(1)	132	第152図	SD31溝跡(郡山Ⅱ期官衙外溝) 出土遺物(1)	178
第114図	SI29堅穴住居跡出土遺物(2)	133	第153図	SD31溝跡(郡山Ⅱ期官衙外溝) 出土遺物(2)	179
第115図	SI30堅穴住居跡	135	第154図	SD31溝跡(郡山Ⅱ期官衙外溝) 出土遺物(3)	180
第116図	SI31堅穴住居跡	136	第155図	土坑(古代)	181
第117図	SI31堅穴住居跡出土遺物	137	第156図	I区ピット(古代)	182
第118図	SI32堅穴住居跡	138	第157図	II区ピット(古代)	183
第119図	SI32堅穴住居跡出土遺物	139	第158図	IV区ピット(古代)	184
第120図	SI33堅穴住居跡	140	第159図	VII区ピット(古代)	184
第121図	SI33堅穴住居跡出土遺物	141	第160図	SX2性格不明遺構	185
第122図	SI35堅穴住居跡	142	第161図	SX3性格不明遺構	186
第123図	SI36堅穴遺構	143	第162図	SX3性格不明遺構出土遺物(1)	186
第124図	SI36堅穴遺構出土遺物	143	第163図	SX3性格不明遺構出土遺物(2)	187
第125図	SI37堅穴遺構	144	第164図	I区遺構外出土遺物(1)	189
第126図	SI37堅穴遺構出土遺物	145	第165図	I区遺構外出土遺物(2)	190
第127図	SI38堅穴住居跡	146	第166図	I区遺構外出土遺物(3)	191
第128図	SI38堅穴住居跡出土遺物(1)	147	第167図	II区遺構外出土遺物	193
第129図	SI38堅穴住居跡出土遺物(2)	148	第168図	IV区遺構外出土遺物	194
第130図	SI39堅穴住居跡	149	第169図	VII区遺構外出土遺物・表採遺物	195
第131図	SI39堅穴住居跡出土遺物	150	第170図	下層調査区配置図	196
第132図	SI69堅穴住居跡	151	第171図	V層上面遺構配置図	198
第133図	SI69堅穴住居跡出土遺物	152	第172図	SK22土器埋設遺構	199
第134図	SB1掘立柱建物跡	153	第173図	SK22土器埋設遺構出土遺物	200
第135図	SB2掘立柱建物跡	155	第174図	SK2土壤墓	201
第136図	SB4掘立柱建物跡	156	第175図	SK2土壤墓出土遺物	201
第137図	I区溝跡(古代)	158	第176図	土坑(V層上面)	202
第138図	I区溝跡(古代)出土遺物	159	第177図	土坑(V層上面)出土遺物	203
第139図	II区溝跡(古代)	160	第178図	V層上面遺構配置図	204
第140図	II区溝跡(古代)出土遺物	160			
第141図	IV区溝跡(古代)	161			
第142図	VII区溝跡(古代)	162			

第179図	土坑(Ⅶ層上面)	205	第218図	接合資料(1)	256
第180図	ピット(Ⅶ層上面)	205	第219図	接合資料(2)	257
第181図	IV層出土遺物(1)	207	第220図	接合資料(3)	258
第182図	IV層出土遺物(2)	208	第221図	接合資料(4)	259
第183図	IV層出土遺物(3)	209	第222図	接合資料(5)	260
第184図	IV層出土遺物(4)	210	第223図	接合資料(6)	261
第185図	IV層出土遺物(5)	211	第224図	接合資料(7)	262
第186図	IV層出土遺物(6)	212	第225図	接合資料(8)	263
第187図	IV層出土遺物(7)	213	第226図	接合資料(9)	264
第188図	IV層出土遺物(8)	214	第227図	接合資料(10)	265
第189図	IV層出土遺物(9)	215	第228図	接合資料(11)	266
第190図	IV層出土遺物(10)	217	第229図	接合資料(12)	267
第191図	IV層出土遺物(11)	218	第230図	接合資料(13)	268
第192図	IV層出土遺物(12)	220	第231図	接合資料(14)	269
第193図	IV層出土遺物(13)	223	第232図	接合資料(15)	270
第194図	IV層出土遺物(14)	224	第233図	接合資料(16)	271
第195図	IV層出土遺物(15)	225	第234図	接合資料(17)	272
第196図	IV層出土遺物(16)	226	第235図	西台畠遺跡出土木製品の顕微鏡写真	275
第197図	IV層出土遺物(17)	227	第236図	西台畠VI区東壁のプラント・オパール 分析結果	278
第198図	IV層出土遺物(18)	228	第237図	西台畠VII区西壁のプラント・オパール 分析結果	279
第199図	IV層出土遺物(19)	229	第238図	西台畠VIII区北壁のプラント・オパール 分析結果	279
第200図	IV層出土遺物(20)	230	第239図	植物珪酸体(プラント・オパール)の 顕微鏡写真	280
第201図	IV層出土遺物(21)	231	第240図	堅穴住居跡の規模(左)と床面標高(右)	283
第202図	V層出土遺物(1)	233	第241図	堅穴住居跡の軸方位	283
第203図	V層出土遺物(2)	234	第242図	カマドの構造	284
第204図	V層出土遺物(3)	235	第243図	遺構重複関係図	265
第205図	V層出土遺物(4)	237	第244図	各期堅穴住居跡の規模(左)と 床面標高(右)	287
第206図	V層出土遺物(5)	238	第245図	各期堅穴住居跡の軸方位(左)と 郡山二期官衙区画施設との位置関係(右)	287
第207図	V層出土遺物(6)	239	第246図	郡山官衙西辺と西台畠遺跡	289-290
第208図	VII層出土遺物(1)	241	第247図	各期遺構内出土土器(1)	294
第209図	VII層出土遺物(2)	242	第248図	各期遺構内出土土器(2)	295
第210図	VII層出土遺物	243	第249図	各期遺構内出土土器(3)	296
第211図	X層出土遺物	244	第250図	各期遺構内出土土器(4)	297
第212図	XI層出土遺物	246			
第213図	出土地・層位不明遺物(1)	247			
第214図	出土地・層位不明遺物(2)	249			
第215図	出土地・層位不明遺物(3)	251			
第216図	出土地・層位不明遺物(4)	252			
第217図	出土地・層位不明遺物(5)	254			

第251図	各期遺構内出土土器(5) ······	298
第252図	各期遺構内出土土器(6) ······	299
第253図	各期遺構内出土土器(7) ······	300
第254図	各期遺構内出土土器(8) ······	301
第255図	弥生土器集成(1) 壺 ······	305
第256図	弥生土器集成(2) 高环 ······	306
第257図	弥生土器集成(3)鉢 ······	307
第258図	弥生土器集成(4) 深鉢 ······	308
第259図	弥生土器集成(5) 壺 ······	309
第260図	弥生土器集成(6) 盖 ······	310
第261図	IV層・V層出土石器の用途別組成 ······	312
第262図	IV層・V層出土石器の石材組成 ······	313
第263図	IV層・V層出土完形剥片の打面形状 ······	313
第264図	IV層・V層出土完形剥片の自然面の有無 ······	313
第265図	IV層・V層出土完形剥片の 長幅相間図(左)と幅厚相間図(右) ······	314
第266図	IV層・V層出土石器の 長幅相間図(左)と幅厚相間図(右) ······	314
第267図	長町駅東遺跡出土の接合資料(1) ······	317
第268図	長町駅東遺跡出土の接合資料(2) ······	318
第269図	長町駅東遺跡出土の接合資料(3) ······	319
第270図	西台畠遺跡と長町駅東遺跡出土の 接合資料 ······	320

写真図版目次

写真図版1	調査区全景 ······	
	昭和32(1957)年伊勢煉瓦工場地内 ······	329
写真図版2	基本層序(1) ······	330
写真図版3	基本層序(2) ······	331
写真図版4	基本層序(3) ······	332
写真図版5	第2次確認調査トレチ ······	333
写真図版6	I区中世面全景 ······	334
写真図版7	IV区全中世面全景 ······	335
写真図版8	溝跡(中世) ······	336
写真図版9	井戸跡・土坑(中世) ······	337
写真図版10	溝跡・土坑(古代～中世) ······	338
写真図版11	I区古代面全景 ······	339
写真図版12	II区古代面全景 ······	340
写真図版13	IV・VII区古代面全景 ······	341
写真図版14	竪穴住居跡(1) ······	342
写真図版15	竪穴住居跡(2) ······	343
写真図版16	竪穴住居跡(3) ······	344
写真図版17	竪穴住居跡(4) ······	345
写真図版18	竪穴住居跡(5) ······	346
写真図版19	竪穴住居跡(6)・竪穴遺構(1) ······	347
写真図版20	竪穴住居跡(7) ······	348
写真図版21	竪穴住居跡(8) ······	349
写真図版22	竪穴住居跡(9) ······	350
写真図版23	竪穴住居跡(10) ······	351
写真図版24	竪穴住居跡(11) ······	352
写真図版25	竪穴住居跡(12) ······	353
写真図版26	竪穴住居跡(13)・竪穴遺構(2) ······	354
写真図版27	竪穴住居跡(14) ······	355
写真図版28	掘立柱建物跡(古代) ······	356
写真図版29	溝跡(古代) ······	357
写真図版30	区画施設(1) ······	358
写真図版31	区画施設(2) ······	359
写真図版32	区画施設(3) ······	360
写真図版33	区画施設(4)・性格不明遺構 ······	361
写真図版34	下層調査区全景 ······	362
写真図版35	土器埋設遺構・土壤墓・土坑(1) ······	363
写真図版36	土坑(2) ······	364
写真図版37	遺物出土状況・埋没河川検出状況 ······	365
写真図版38	第1次確認調査出土遺物 ······	366
写真図版39	第2次確認調査 ······ 溝跡(中世)出土遺物 ······	367
写真図版40	溝跡・井戸跡・ピット(中世) ······ 土坑・ピット(古代～中世)出土遺物 ······	368
写真図版41	竪穴住居跡出土遺物(1) ······	369
写真図版42	竪穴住居跡出土遺物(2) ······	370
写真図版43	竪穴住居跡出土遺物(3) ······	371

写真図版44	竖穴住居跡出土遺物(4) ······	372	写真図版66	IV層出土遺物(1) ······	394
写真図版45	竖穴住居跡出土遺物(5) ······	373	写真図版67	IV層出土遺物(2) ······	395
写真図版46	竖穴住居跡出土遺物(6) ······	374	写真図版68	IV層出土遺物(3) ······	396
写真図版47	竖穴住居跡出土遺物(7) ······	375	写真図版69	IV層出土遺物(4) ······	397
写真図版48	竖穴住居跡出土遺物(8) ······	376	写真図版70	IV層出土遺物(5) ······	398
写真図版49	竖穴住居跡出土遺物(9) ······	377	写真図版71	IV層出土遺物(6) ······	399
写真図版50	竖穴住居跡出土遺物(10) ······	378	写真図版72	IV層出土遺物(7) ······	400
写真図版51	竖穴住居跡出土遺物(11) ······	379	写真図版73	IV層出土遺物(8) ······	401
写真図版52	竖穴住居跡出土遺物(12) ······	380	写真図版74	IV層出土遺物(9) ······	402
写真図版53	竖穴住居跡出土遺物(13) ······		写真図版75	V層出土遺物(1) ······	403
	竖穴造構出土遺物 ······	381	写真図版76	V層出土遺物(2) ······	404
写真図版54	竖穴住居跡出土遺物(14)・溝跡(古代) ······		写真図版77	V層出土遺物(3) ······	405
	区画施設出土遺物(1) ······	382	写真図版78	VI・VII・X層出土遺物 ······	406
写真図版55	区画施設出土遺物(2) ······	383	写真図版79	XI層出土遺物 ······	
写真図版56	区画施設出土遺物(3) ······	384		出土地・層位不明遺物(1) ······	407
写真図版57	区画施設出土遺物(4) ······	385	写真図版80	出土地・層位不明遺物(2) ······	408
写真図版58	区画施設出土遺物(5) ······	386	写真図版81	接合資料(1) ······	409
写真図版59	区画施設出土遺物(6) ······	387	写真図版82	接合資料(2) ······	410
写真図版60	区画施設出土遺物(7) ······	388	写真図版83	接合資料(3) ······	411
写真図版61	性格不明造構出土遺物 ······	389	写真図版84	接合資料(4) ······	412
写真図版62	遺構外出土遺物(1) ······	390	写真図版85	接合資料(5) ······	413
写真図版63	遺構外出土遺物(2) ······	391	写真図版86	接合資料(6) ······	414
写真図版64	遺構外出土遺物(3) ······	392			
写真図版65	土器埋設造構・土壤幕 ······				
	土坑出土遺物 ······	393			

第1章 調査にいたる経過

第1節 調査事由(第1図)

「仙台市あすと長町土地区画整理事業」は、仙台市太白区長町に計画された「長町地区新都市整備計画」に伴い実施されることになった事業である。事業計画地内には、周知の遺跡として西台畠遺跡・郡山遺跡が所在していたが、長町駅東遺跡は、計画区域の大半を占める旧国鉄貨物ヤード跡地における遺跡の存在の有無、範囲等を把握するために平成3・4(1991・1992)年に実施された試掘調査(仙台市教委1992b:1993)によって新たに発見された遺跡である(第1図)。

その後、仙台市教育委員会と事業主体者である住宅・都市整備公團(現独立行政法人都市再生機構)は、本事業の施行に伴う埋蔵文化財の取り扱いについて協議を行い、事業地内の計画路線にかかる西台畠遺跡・長町駅東遺跡および郡山遺跡の一部について発掘調査を実施することとなった。

発掘調査は事業計画の進行に合わせて実施することとし、平成10(1998)年に西台畠遺跡の調査から開始した。

西台畠遺跡 年度別調査成果一覧

調査年度	調査次数	調査区	調査成果
昭和57年 (1982)	-	遺跡北西部	病院建設に伴う調査、河川路(仙台市文化財調査報告書第57集所収)
平成10年 (1998)	第1次調査 (本書所収)	I・II・VI・VII区 遺構範囲確認調査	竪穴住居跡31軒、掘立柱建物跡4棟、溝跡、土坑 中世屋敷区画溝、井戸跡、弥生時代遺物包含層
平成11年 (1999)	第2次調査 (本書所収)	II区南・IV区西 II区・III区南・IV区下層調査 遺構範囲確認調査	竪穴住居跡3軒、溝跡、土坑 弥生時代遺物包含層、土器埋設構造、土壙墓 竪穴住居跡、溝跡、ビット
平成12年 (2000)	第3次調査 (一部本書所収)	II区北・III区・IV区東・V区東 II区北下層調査	竪穴住居跡42軒、掘立柱建物跡、溝跡、土坑 弥生時代遺物包含層
平成13年 (2001)	第4次調査	V区西 個人住宅建設	竪穴住居跡18軒、掘立柱建物跡1棟、溝跡 竪穴住居跡、溝跡
平成17年 (2005)	第5次調査	V区下層調査 17街区遺構範囲確認調査	溝跡、弥生時代水田跡 竪穴住居跡、溝跡
平成19年 (2007)	第6次調査 第7次調査	個人住宅建設 17街区・区画道路	竪穴住居跡2軒、溝跡2条、土坑(仙台市文化財調査報告書第326集所収) 竪穴住居跡26軒、掘立柱建物跡3棟、材木列跡1条、溝跡、土坑 弥生時代水田跡、遺物包含層

第2節 調査要項

遺跡名:西台畠遺跡(仙台市文化財登録番号 C-317)

所在地:仙台市太白区郡山二丁目

(1) 第1次調査(平成10年度)調査体制

調査期間:平成10(1998)年6月1日~12月18日

調査主体:仙台市教育委員会

調査担当:仙台市教育委員会文化財課調査係 工藤 信一郎 小川 淳一 五十嵐 康洋 農村 幸宏

調査対象面積:6,226m²(都市計画道路および区画道路部分)

本調査面積:1,220m²

I区:300m² II区:240m² IV区:320m² VI区:90m²

VII区:180m² 4トレンチ下層:90m²

(2) 第2次調査(平成11年度)調査体制

調査期間: 平成11(1999)年11月1日～12月17日

調査主体: 仙台市教育委員会

調査担当: 仙台市教育委員会文化財課調査係 工藤 信一郎 農村 幸宏

本調査面積: 1,110m²

I区下層: 210m² II区: 240m² IV区下層: 190m² IV区: 310m²

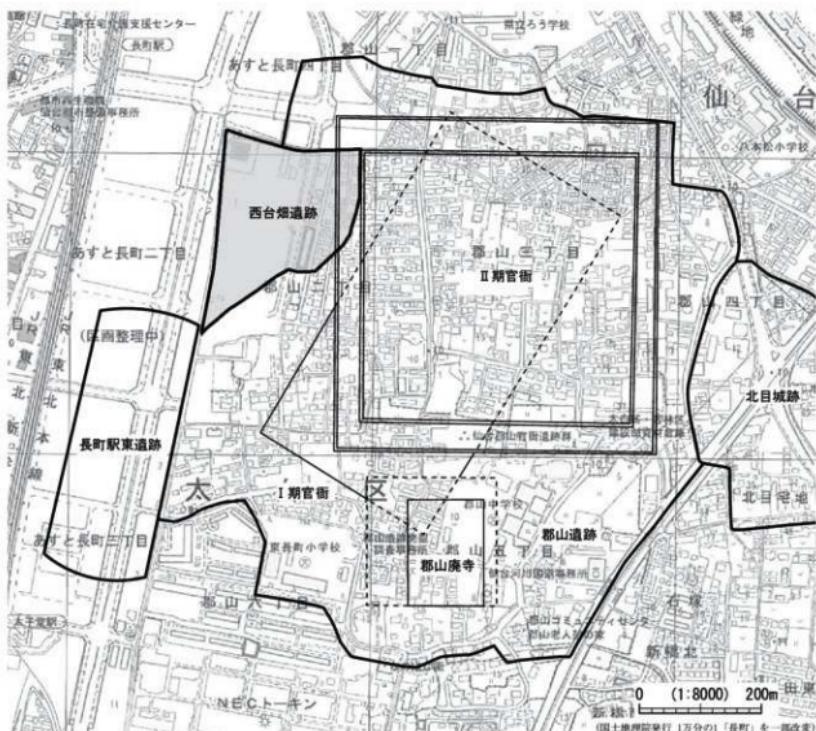
8トレンチ: 40m² 9トレンチ: 120m²

(3) 調査報告書作成体制(平成21年度)

整理担当: 仙台市教育委員会文化財課調査係 工藤 信一郎 荒井 格

整理体制: 国際文化財株式会社 東北支店

統括責任者: 前川 雅夫 主任調査員: 工藤 司 調査員: 鶴久森 彰 調査補助員: 佐藤 洋



第1図 遺跡位置図

第3節 第1次調査(平成10年度)遺構確認調査(第1・2・4・11~13図)

(1) 遺構確認調査にいたる経過(第1~4図)

西台畠遺跡は、昭和32(1957)年、当時ここにあった煉瓦工場の粘土採掘中に弥生土器が発見され、伊東信雄氏、伊藤玄三氏によって出土状況の緊急調査が行われたことを契機として登録された遺跡である(第2章第3節参照)。出土した土器は、弥生時代中期の大型壺を用いた土器棺とその副葬土器であり、土壙墓も1基確認されている。この時期の仙台平野における葬制を考える上で貴重な資料となっている。この調査の際に、上層に古代の遺構面が存在することが確認されていた。

今回の調査地点は、郡山遺跡方四町Ⅱ期官衙の外郭大溝西辺に隣接し(第1図)、西側が昭和32年の調査地点であったことが想定されることから(第4図)、官衙に関係する遺構や弥生時代の遺構が存在する可能性が考えられた。

しかしながら、昭和30年代から長く国鉄長町貨物ヤードに隣接する国鉄仙台資材センターとして利用されており、貨物ヤード造成に伴う影響を受けていることが考えられた。また、昭和57(1982)年度に今次調査地点の西側で実施された調査では、広瀬川と考えられる大規模な河川の浸食により遺構面が削平されている状況が確認されていた。そこで、発掘調査の開始にあたり、調査対象となる都市計画道路環状線と街区内外区画道路部分で遺構確認調査を実施し、道路範囲の拡がりや遺構の密度・遺存状況を確認し、今後の発掘調査計画を策定することとした。

前述の通り、西台畠遺跡内には国鉄仙台資材センターや民間の煉瓦工場が位置していたことから、住宅・都市整備公団による事前のボーリング調査の結果では、レンガの原料となる粘土の採掘坑に廃棄された石炭ガラやレンガにより、遺構面が影響を受けていることも想定された。

(2) 調査区の設定と調査の方法(第2図)

確認調査は、計画路線内のセンターラインを基準とし、調査対象地内での国鉄仙台資材センターの建物配置などを参考に 6×20 mの調査区を合計13箇所設定した(第2図)。各トレンチの位置については、調査終了後に基準点測量を実施し、「平面直角座標第X系」に位置付けている。

調査は、重機により遺構確認面まで掘り下げを行い、その後人力により遺構検出作業を行った。古代の遺構面が残存しないと判断された地点については、トレンチの拡張を行い安全を確保した上で下層調査を行い、弥生～绳文時代の遺構面、遺物包含層の確認を行った。調査記録としては、遺構検出状況の写真撮影、調査区平面図の作成、標高値の記入を行った。

(3) 確認調査の概要(第2・11~13図)

5トレンチでは建物の基礎パイルなどの影響から、8・13トレンチでは廃棄レンガや石炭ガラにより、古代までの遺構面は失われていると判断された。また、3・6トレンチでは建物の基礎パイル等があるものの、古代の遺構面が確認された。10・11トレンチでは廃棄レンガと石炭ガラにより古代までの遺構面は失われていると判断されたが、下層に弥生時代の遺物包含層が確認された。各トレンチから出土した遺物については、第5章第1節に記載している(第11~13図)。

第1次調査(平成10年度)確認調査成果一覧

調査区	遺構検出状況	本調査区	備考	調査区	遺構検出状況	本調査区	備考
1 前六代遺跡・廃柱建物跡・溝跡・土坑	H区 一部石炭ガラに20cm古代の遺構面消失			7 前六代遺跡・溝跡・土坑	Ⅴ区 一部石炭ガラに20cm古代の遺構面消失		
2 聖穴遺跡・廃柱建物跡・溝跡・土坑	Ⅳ区北			8 古代の遺構確認面消失	Ⅳ区		
3 聖穴遺跡・廃柱建物跡・溝跡・土坑	Ⅳ区			9 前六代遺跡・廃柱建物跡・溝跡・土坑	Ⅳ区 一部石炭ガラに20cm古代の遺構面消失		
4 第6代代遺物包含層	4号坑 石炭ガラに20cm古代の遺構面消失			10 古代の遺構確認面消失	Ⅲ区		
5 溝跡・土坑	Ⅳ区南			11 古代の遺構確認面消失	Ⅲ区		
6 聖穴遺跡・廃柱建物跡・溝跡・土坑	Ⅳ区			12 溝跡・土坑	Ⅳ区 一部石炭ガラに20cm古代の遺構面消失		
				13 古代の遺構確認面消失	Ⅳ区南		

(4) 確認調査所見(第4図)

- a. I・II・III・IV・V区については、部分的に擾乱の影響を受けた箇所があるものの、良好な中世～古代の遺構面が残存していると判断され、郡山遺跡官衙期の堅穴住居跡・掘立柱建物跡が濃密な状態で検出されることが想定される。また、I区については、中世と古代の遺構確認面が層位的に分離される状況が確認された。
- b. VI区については、石炭ガラによる擾乱と河川跡に伴う堆積土が確認されたことから、古代の遺構面は削平されていると判断され、下層調査を実施し遺物包含層の有無を確認することにした。
- c. VII区については、石炭ガラによる擾乱と河川跡に伴う堆積土が確認されたが、西側の一部に中世～古代の遺構が残存していることが確認された。古代の遺構面の消失している東側については、下層調査を実施し、遺物包含層の有無を確認することにした。
- d. 古代の遺構面が削平されていると判断された調査区でも、下層には良好な弥生時代の遺物包含層が残存していることが確認された。

第4節 第2次調査(平成11年度)遺構確認調査(第2・4・10・14図)

(1) 宅地造成予定地を対象とした確認調査(第2・10・14図)

第1次調査の成果をうけ、粘土採掘やレンガ・石炭ガラの廃棄等による影響は受けているものの、調査対象区域内に広範囲に遺構面が残存していることが確認された。区画整理事業に伴う発掘調査については、道路計画部分を対象としているが、宅地部分の造成工事により遺構面が削平されないよう、事業者である住宅・都市整備公団と協議を行い、宅地部分を対象に遺構確認調査を実施し、遺構面の状況や確認標高値を確認し、その成果を造成計画に反映させることになった。

確認調査にあたり、測量基準点をもとに 6×10 mの調査区を7箇所設定した(第2図)。調査は重機により遺構確認面まで掘り下げを行い、その後人力により遺構検出作業を行った。

調査記録としては、遺構検出状況写真の撮影、調査区平面図の作成、標高値の記入を行った。なお、宅地造成予定地内に設定した各トレーンにおける遺構検出状況、出土遺物については、第5章第1節に記載している(第10・14図)。

平成11(1999)年度 確認調査成果一覧

調査 区	遺構検出状況	備考	調査 区	遺構検出状況	備考
1	掘立柱建物跡・溝跡		5	古代の遺構確認面消失	
2	堅穴住居跡		6	堅穴住居跡・溝跡・土坑	一部石炭ガラによる古代の遺構面消失
3	弥生時代遺物包含層(4ヶ所断面観察)	石炭ガラによる古代の遺構面消失	7	小柱穴	一部石炭ガラによる古代の遺構面消失
4	溝跡・土坑	一部石炭ガラによる古代の遺構面消失			

(2) 確認調査所見(第4図)

- a. I区からIII区の間およびV区については、密集した状態での堅穴住居跡の検出が想定される。
 - b. I区よりも東側の宅地については、確認調査とボーリング調査の結果から、広範囲の土取りを受け、その後大量の石炭ガラが投棄され整地されている状況が確認されたことから、遺構面が存在しないと判断され、現時点では調査対象から除外できると判断できる。
 - c. VI区周辺の宅地については、石炭ガラ層以外に確認された河川堆積の状況や範囲などから、遺構面が存在しないと判断され、現時点では調査対象から除外できると判断できる。
 - d. VII区周辺の宅地については、広範囲の土取りを受け、その後、大量のレンガが投棄され整地されている状況が確認されたことから遺構面が存在しないと判断され、現時点では調査対象から除外できると判断できる。
- また、今回の遺構確認調査により現時点では調査の必要が無いと判断された区域についても、今後調査が進み

新たな知見が得られ、調査対象範囲の見直しが必要となることも想定されることから、工事施工時に改めて協議を行い、必要に応じて試掘調査の実施や工事立会いなどにより対応していくことにした。

(3) 区画道路を対象とした確認調査(第2回)

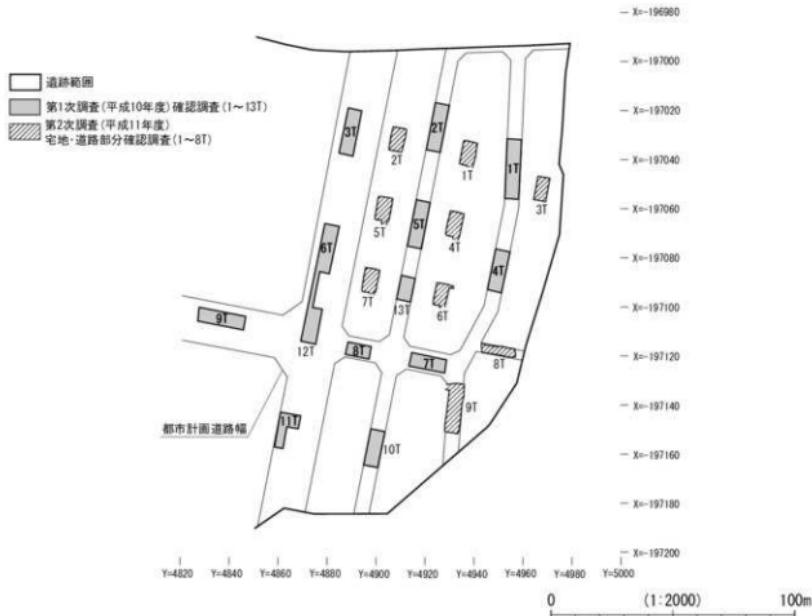
第1次調査で未調査であった区画道路部分を対象に調査を実施した。住宅・都市整備公団による事前のボーリング調査や周辺の調査から、廃棄された石炭ガラにより影響を受けていることが想定されていたが、両地点共に古代の遺構確認面は消失しており、トレーンチ壁面の観察で弥生時代の遺物包含層と同じ土層を確認したが、遺物等は出土しなかった。安全面も考慮し、この地点における調査は今回のトレーンチ調査で終了することにした。

8 トレーンチの調査

3×14mの調査区を設定し調査に入ったが、表土下1.5mまで石炭ガラによる搅乱があり、古代の遺構面は消失していることを確認した。その後、下層調査区を設定し、地表下2.5mの深さまで掘り下げを行い、調査区の壁面観察により隣接するIV区の弥生時代の遺物包含層が延びていることを確認したが、遺物等は出土しなかった。

9 トレーンチの調査

6×20mの調査区を設定し調査に入ったが、石炭ガラによる搅乱があり、古代の遺構面は消失していることを確認した。その後、下層調査区を設定し、地表下3mの深さまで掘り下げを行った結果、調査区の壁面観察により隣接するIV区の弥生時代の遺物包含層が延びていることを確認したが、遺物等は出土しなかった。しかし、トレーンチ南側では遺物包含層よりさらに下層まで石炭ガラが続く状況を確認している。



第2回 第1・2次確認調査トレーンチ配置図

第2章 遺跡の立地と環境

第1節 西台畠遺跡の立地と地形

西台畠遺跡は宮城県のほぼ中央に位置する仙台市南東部、太白区郡山二丁目に拡がる遺跡で面積は6,226m²におよぶ。遺跡の南東約2.5kmの地点で合流する広瀬川と名取川の間に拡がる自然堤防と後背湿地が入り組む地域(郡山低地)に位置し、標高約11mの自然堤防上に立地する。また、東には郡山遺跡、南西には長町駅東遺跡が隣接している。

第2節 周辺の遺跡と歴史的環境(第3図)

名取川および広瀬川周辺地域には、旧石器時代から近代に至るまでの遺跡が数多く分布している。当該地域の遺跡や歴史的環境の詳細については、「富沢遺跡 第30次調査報告書I(縄文～近世編)」(仙台市教委1991)や「郡山遺跡発掘調査報告書 総括編」(同2005)など多くの報告書で詳述されているため、ここでは両河川の合流点付近に位置する代表的な遺跡を概観するに留める。

旧石器時代

寒冷な氷期の繰り返しに伴い海面は低下し、現在の郡山低地付近では微高地が形成され、標高の低い所に湿地が拡がっていたと推測される。

富沢遺跡では、地下5mの地点で約2万年前の後期旧石器時代後半期の焚き火跡と考えられる炭化物集中箇所が検出され、その周囲からは、接合資料や欠損したナイフ形石器を含む100点以上の石器が出土している。また、樹木や葉・種子などの植物遺体、昆虫遺体、鹿の糞など当時の自然環境を伝えるものが確認されている。これらの調査成果から、狩猟と共に石器の製作・修理が行われていたものと推測されている。また、植物遺体の分析による環境復元では、針葉樹林を中心とした湿地林が拡がっていたと考えられている。

縄文時代

気候の温暖化により縄文海進が始まると、名取川上・中流域の河岸段丘上に立地する遺跡が多くなり、郡山低地周辺でも集落が早い段階から営まれる。

下ノ内浦遺跡からは、早期前葉(日計式期)の堅穴住居跡2軒が検出されており、仙台市内の集落として最も古い時期の検出例となっている。前期になると丘陵部の三神峯遺跡から、前期前葉(大木1・2式期)の堅穴住居跡8軒が検出されている。中期になると丘陵から低地まで広く土地利用が行われるようになり、郡山低地では、下ノ内遺跡から中期末葉(大木10式期)の敷石住居跡2軒を含む堅穴住居跡3軒が検出されている。後期になると低地の遺跡が増加していく。大野田遺跡からは後期前半の新旧2時期にわたる墓域が重複して検出されており、上位の面と下位の面でそれぞれ配石造構、埋設土器が検出されたほか、祭祀に関する遺物が多くみられることから、墓域と祭祀の場が一体となった場所と考えられている。晩期については調査事例が少なく遺構は検出されていないものの、後期から継続して土地利用がなされていたと推測される。

弥生時代

海面上昇により低湿地が拡大していったと考えられており、名取川下流域の低湿地では中期になると水田が営まれるようになる。

富沢遺跡では中期前半から後期にかけての8期にわたる水田跡や、中期中葉に位置付けられる、いわゆる樹形開式期の水路が検出されている。そのほか、この時期の生産遺跡としては、高田B遺跡から水田跡と水路が検出されている。

また、長町駅東遺跡からは、水田跡や水路、土器埋設遺構や土壙墓のほか、いわゆる樹形開式期のものとしては宮城県内初例となる堅穴住居跡1軒が検出されている。同一遺跡内において居住域・墓域・生産域のセット関係が

認められたことは、当該期の仙台平野における集落の在り方を考える上で重要である。このほか、当該期の墓域が確認された遺跡としては、広瀬川の北側に位置する南小泉、広瀬川と名取川の合流地点の東側に位置する高田Bの両遺跡から、それぞれ土器棺墓が確認されている。

後期になると丘陵部に集落が営まれるようになる。丘陵部の集落遺跡としては、八木山緑町・土手内・原の各遺跡から後期(天王式期)の堅穴住居跡が検出されている。八木山緑町遺跡では堅穴住居跡のほか、土壙墓が12基検出されており、そのうち2基の土壙墓からは碧玉製の管玉が出土している。この時期の墓域が確認された遺跡としては、八木山緑町遺跡の他に旧荒川北岸に位置する下ノ内浦遺跡から土壙墓1基と土器棺墓3基が検出されており、土壙墓からは石庵丁2点と太形蛤刃石斧1点が出土している。



No.	遺跡名	立地	種別	時代
1	西台通溝跡	自然緩傾	官衙遺跡・集落跡	鐵文・弥生(中)・飛鳥・奈良・平安・中世
2	郡山道跡	自然緩傾	官衙跡・寺社跡	鐵文(後)・晚・飛生(中)・飛鳥・奈良・平安・中世
3	長町駅東遺跡	自然緩傾	官衙遺跡・集落跡・墓地	鐵文(後)・飛生(中)・飛鳥・奈良・平安・中世
4	北村城跡	自然緩傾	城跡・集落跡・木田跡	鐵文(後)・飛生・古墳・奈良・平安・中世・近世
5	八木山緑町遺跡	丘陵	集落跡・墓地・敷布地	鐵文・佛作(後)・奈良・平安
6	向山横穴墓群	丘陵斜面	第六墓群	古墳(後)・奈良
7	若林城跡	自然緩傾	城跡・古墳・集落	古墳・平安・中世・近世
8	南小泉遺跡	自然緩傾	堅穴散跡・集落跡	佛生・古墳・飛鳥・奈良・平安・中世・近世
9	南尾塚古墳	自然緩傾	前方後円墳	佛生・古墳(前・中)
10	三神峯遺跡	丘陵	集落跡	鐵文(前)・中・平安
11	土手内遺跡	丘陵	集落跡	鐵文・佛生・古墳・奈良・平安
12	雷池里跡	丘陵斜面	空跡	古墳・平安
13	道遺跡	丘陵麓	集落跡	佛生・古墳・平安

No.	遺跡名	立地	種別	時代
14	富沢遺跡	低音湿地	集落跡・水田跡・散布地	後飛羽石器・飛生・古墳・奈良・平安・中世
15	下ノ内浦遺跡	自然緩傾	集落跡	鐵文(後)・飛・奈良・平安
16	山口遺跡	自然緩傾・沖積平原	集落跡・水田跡	鐵文・佛生・古墳・奈良・平安
17	平ノ内浦跡	自然緩傾	集落跡	鐵文(後)・飛生・古墳・奈良・平安・中世
18	大野田官街遺跡	自然緩傾	官街遺跡	飛鳥・奈良
19	六反田遺跡	自然緩傾	集落跡	鐵文(後)・飛生・古墳・奈良・平安・中世
20	袋遺跡	自然緩傾	集落跡	鐵文・奈良・平安
21	大野田遺跡	自然緩傾	祭祀跡・集落跡	鐵文(後)・飛生・古墳・奈良・平安
22	大野田古墳群	自然緩傾	集落跡・円墳群	鐵文・佛生・古墳・奈良・平安・中世
23	春日古墳	自然緩傾	円墳	古墳(中)
24	喜屋敷古墳	自然緩傾	前方後円墳	古墳(中)
25	王ノ進跡	自然緩傾	集落跡・堅穴跡	鐵文(後)・佛生・古墳・奈良・平安
26	高田田遺跡	自然緩傾・後背高地	集落跡・水田跡・堅穴跡	鐵文(後)・佛生・古墳・奈良・平安・中世・近世

第3図 西台畠遺跡と周辺の遺跡

古墳時代

古墳時代になると、郡山低地を含む仙台平野で大規模な古墳築造が始まる。郡山低地周辺に築造される古墳は、前期が広瀬川の北側に築造されるのに対し、中期から後期にかけては広瀬川の南側にも築造される。広瀬川の北側に位置する遠見塚古墳は前期末から中期初頭に築造されたと考えられており、全長約110mの前方後円墳で仙台市内最大規模である。埋葬施設として削竹形木棺が2基確認され、内1基から管玉・小玉・豊橈が出土している。

広瀬川の南側に位置する大野田古墳群は中期後半から後期にかけて築造されたと考えられており、円墳が大半を占め、この中に前方後円墳(鳥居塚古墳)が1基含まれている。また、多くの古墳の中でも最大規模を持つ春日社古墳は墳丘裾部にテラスを有するもので、2基の埋葬施設が確認されており、内1基から革盾、鉄製の矛・鎌などが出土している。

これら中期後半の古墳へ供給された埴輪が生産されたと考えられる富沢窯跡は、東北地方で発見されている唯一の埴輪窯跡である。三神峯丘陵の南側に位置しており、出土した埴輪は仙台市域の埴輪編年の基準とされている。このほか、三神峯丘陵の北側に位置する土手内遺跡では前期から中期の集落跡が確認されているほか、広瀬川の北側に位置する南小泉遺跡では前期から終末期にかけての大規模な集落跡が確認されている。

飛鳥・奈良・平安時代

陸奥国支配における最初の拠点として郡山遺跡に官衙が造営される。郡山遺跡の官衙遺構は2時期にわたり、7世紀半ば頃から末葉にかけて存続したと考えられるⅠ期官衙は、陸奥国の建国に関わった重要な構跡と考えられる。建物群の方位は真北に対して50°～60°西傾し、材木列・板塀で長方形に区画した内部に中枢区、倉庫区、雑舎区などの区域が設けられており、北雑舎区南側には鍛冶工房が近接している。

7世紀末葉から8世紀前葉にかけて存続したと考えられるⅡ期官衙は、多賀城以前の陸奥国府と考えられ、付属寺院(郡山庵寺)を伴っている。建物群の方位は真北を基準に構築され、中枢部からは正殿や石組池等が検出されている。平成10(1998)年には本遺跡でⅡ期官衙外溝が初めて検出され(本書所取SD31)、その後、平成20年(2008)年度に実施された郡山遺跡第188次発掘調査で良好な状態で外溝の東辺が確認されたことにより、外溝が一辺約530mの規模で方四町Ⅱ期官衙の周囲を巡っていることが確実になった。この数値は外溝が一辺1,500大尺で設計されている可能性を示唆しており、これは藤原京造営時の設計思想が関わっていたことが考えられている(仙台市教委2009b)。Ⅱ期官衙の南に位置する付属寺院(郡山庵寺)からは、基壇や僧房跡などが検出されている。

郡山遺跡の南西約1.5kmの地点からは、六反田・袋前の両遺跡および大野田古墳群に跨り、真北を軸とする掘立柱建物跡6棟および建物群を区画する大溝、この大溝で区画された内部を南北に分割すると推測される区画溝が検出されていたが、大野田官衙遺跡として今年度登録された。

大溝は南北約259m、東西約196mの範囲を方形に区画する考えられている。区画内部は建物東列と建物西列にそれぞれ同規模の建物が左右対称に配置され、総柱の倉庫風建物の配置と建物の方向が概ね真北であることと、出土遺物の年代等からは郡山Ⅱ期官衙と密接な関係が認められることから、陸奥国府の機能の一部を担っていた可能性が考えられている(仙台市教委前掲)。

郡山Ⅰ・Ⅱ期官衙に関連する集落跡としては、郡山遺跡の南西に隣接する長町駅東遺跡から豊穴住居跡が300軒以上検出されており、大規模な溝や材木列で区画されていたことが確認されている。また、郡山遺跡の北西側に隣接する本遺跡でも当該期の豊穴住居跡が140軒以上検出されている。両遺跡の集落は、郡山Ⅰ期官衙造営以前から形成され始め、Ⅰ・Ⅱ期の両官衙間に最盛期を迎えるものの、官衙の機能が多賀城に移行した後には衰退する。こうした変遷から郡山遺跡における官衙や寺院の造営・運営にいった人々の集落跡と考えられており、郡山官衙周辺の様相を理解する上で重要である。

このほか、広瀬川左岸の愛宕山から大年寺山にかけては東北地方でも有数の横穴墓群である向山横穴墓群がある。造営は6世紀末頃に始まるものの、多くは7世紀後半から8世紀前半に集中しており、副葬品の中には郡山I・II期官衙出土遺物と共通性が認められるものが出土していることから、郡山遺跡における官衙の造営・運営に関わった人々の墓と考えられている。

中世以降

中世になると、郡山低地では交通の要衝に屋敷が造られるようになる。王ノ塙遺跡では堀跡に囲まれた鎌倉時代の武士層の屋敷跡や火葬墓等の墓跡の他、信仰に関する遺構・遺物が検出されている。この他、同遺跡内からは中世の幹線道路である奥大道と推定される道路遺構も検出されている。富沢遺跡では13世紀から17世紀初頭の堀跡に囲まれた屋敷跡や水田跡、木簡や鳥帽子状の漆製品が確認されており、水田を経済基盤とした上層農民から領主クラスの屋敷跡の存在が考えられている。

南北朝時代以降は、郡山低地や霞ノ目低地の各所で城館跡が造られるようになる。郡山遺跡の東側に隣接する北口城は、戦国時代に仙台市東南部から名取市北部にかけて勢力を奮った名取郡旗頭栗野大膳の居城で、その後、伊達政宗が仙台城の完成まで居住していたと伝えられている。また、広瀬川の北側には政宗が晩年を過ごしたとされる若林城がある。城は堀と土塁を四方に巡らした平城で、周囲には城下町が形成されている。政宗没後は若林城の廃城と共に、城下町は廃止となるが、その一部は仙台城下町に組み入れられたと考えられている。

第3節 これまでの西台畠遺跡の調査について

西台畠遺跡は、広瀬川の北に位置する南小泉遺跡とともに、仙台平野における弥生時代中期の土器編年や葬制を考えるうえで学史的にも注目される遺跡であったが、区画整理事業に伴う今回の発掘調査が実施されるまで、遺跡の範囲や遺構の残存状況等については不明な点が多くかった。

昭和32(1957)年4月の西台畠遺跡からの弥生土器発見の経緯は、当時操業していた伊勢煉瓦工場敷地内で、レンガ原料となる粘土の採掘に伴い弥生土器が出土したことを端緒とする。当時、偶然にも東北大文学部史学科に在籍されていた伊藤和歌子氏(現和泉)が、その自宅敷地内から出土した土器を研究室に持参し、未発見の遺跡であることから、伊東信雄、伊藤玄三両氏が現地におもむき、遺物の出土状況の確認を行っている(写真図版1)。

土器の出土は、粘土の採掘に伴い昭和34(1959)年まで断続的にみられ、その都度両氏が出土状況の確認を行い、記録を作成されている。その内容については、昭和32(1957)年の東北史学会において「仙台市長町西台畠弥生式遺跡について」として報告されている。

その後、伊東信雄氏により弥生土器発見の経緯や調査内容について『宮城県史』に、遺物の出土状況写真や合口壺棺出土状態写真および土墳墓の実測図と、出土した弥生土器の写真が紹介された。また、上層からは土師器が、下層からは縄文土器が出土することが報告されている(伊東1957)。

さらに、伊藤玄三氏により詳細な報告が行われている(伊藤1958・1961)。伊藤氏は、その約35年後の平成5(1993)年、調査内容について再検討を行い、あらためて報告されている(伊藤1993)。

それによれば、弥生土器は当初50m²程度の範囲から15点出土していたが、その後の断続的な発見により、400m²まで遺物の出土範囲が



昭和32(1957)年弥生土器出土状況
(和泉和歌子氏提供)

拡がっている。弥生時代の遺物包含層は地下2.2mで確認されており、さらに地下4m近いレベルでは縄文時代後期墳之内I式併行の土器が出土し、そして地下50cmのところから栗圓式期の遺物と堅穴住居跡1軒が発見されたことが報告されている。

発見された土壙墓1基は、平面形は全長2m前後の長方形を呈し、土壙東部に成人上顎右の3歯が出土したことから、顔を西向きにした仰臥位で埋葬され、小型壺が副葬されていたようである。そのほかに出土状態が確認された大型壺2点は、80cm程離れて直立して出土し、肩部上半を欠いた小型壺と台付浅鉢が被せられていることから合口土器棺として埋設されていたとみられる。うち1点に剥片石器が副葬されていた可能性と、別の土器の周囲には丹が散布されていた可能性が報告されている。

昭和32年の調査から25年後の昭和57(1982)年に、今回報告する調査地点の西側で発掘調査が実施されている。この調査では弥生時代の遺構・遺物は出土せず、広瀬川と考えられる河川跡が確認されている。河川跡の堆積土は6層に大別され、3層が灰白色火山灰層であり、河川跡は火山灰降下前と降下後の2時期に分かれることが報告されている(仙台市教委1983)。

この河川跡については、平成16(2004)年の区画整理事業に伴う郡山遺跡第167次調査等でも確認されていることから、西台畠遺跡の北部から西部には広瀬川による浸食が拡がっている状況が想定されている。

伊藤玄三氏が、平成5年に行った再検討(伊藤 前掲)において、「西台畠遺跡自体は、粘土採掘工事に伴って完全に湮滅してしまったものとみている。」と書かれたほど、昭和32年当時、遺跡内では地下数mに及ぶ粘土採掘が広範囲にわたり行われていた。

弥生時代の墓域が確認された調査から約50年後、区画整理事業の施行に伴い平成10(1998)年から開始された発掘調査は、これまで7次にわたり実施され、遺跡のはば全域に調査がおよんでいる。今回報告する調査成果はその一部であるが、上層には郡山官衙に関連する集落が存在し、その下層からは縄文～弥生時代の遺構や遺物が発見されたことにより、調査を開始する際には想像もできなかつた西台畠遺跡の新たな様相が明らかになりつつある。



昭和32(1957)年年鑑瓦原料採掘の様子
(和泉和歌子氏提供)
人の位置で凡そその深さがわかる

第3章 調査の方法と概要

第1節 調査の方法(第4図)

(1) 調査区の設定(第4図)

遺構範囲確認調査により中世から古代の遺構面が確認された地点について、重機により道路予定範囲までの拡張を行い、I～VII区までの本調査区を設定した(第4図)。

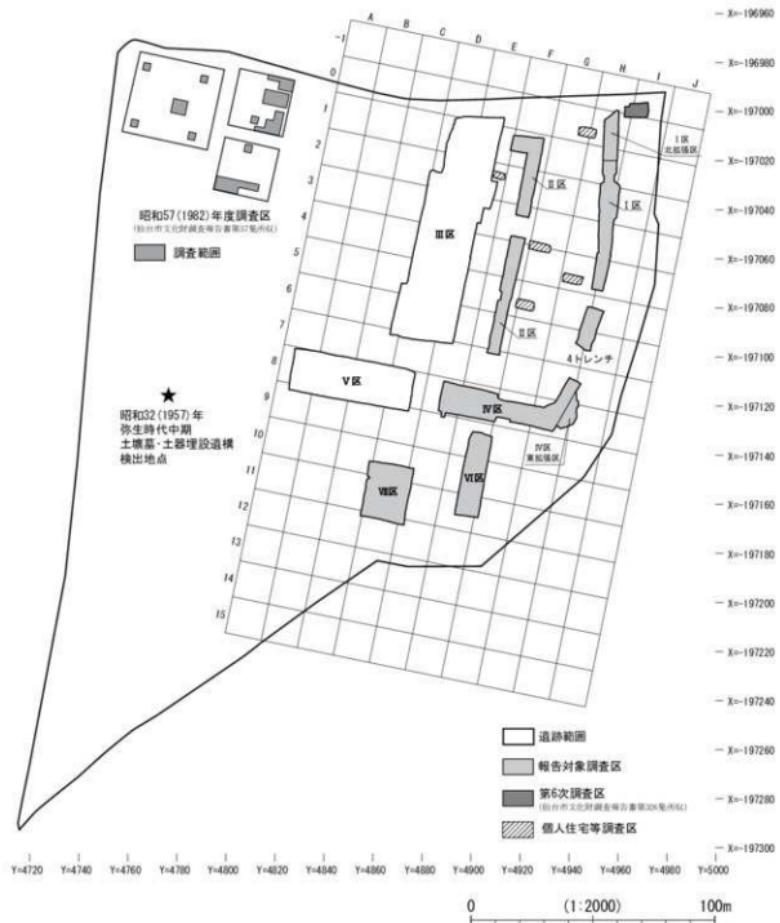
その後、遺構検出作業を実施し、遺構の分布と残存状況の確認を行った。また、4トレンチについては古代の遺構面が削平されていたが、弥生時代の遺構検出の可能性や遺物包含層の状況を確認することにした。

第2節 調査概要(第4図)

(1) 調査経過

本調査対象区域における古代～中世の遺構検出状況が明らかになり、下層に弥生時代の遺構面や遺物包含層が確認されたことから、今後の調査計画について住宅・都市整備公團と協議を行った。その結果、本調査については古代の遺構が良好に残る範囲のうち、東側の区画道路部分であるI区とII区の調査を先行させ、その後III・V区の調査を実施することとなった。

第1次調査は、I区およびII区北側とIV区東側の古代の遺構面までと、確認調査の結果から遺構の残存状況が悪



第4図 調査区・グリッド配置図

く遺構分布の希薄なVI・VII区を対象に行った。調査の結果、郡山遺跡の西側に官衙に関連する集落が存在していたことが明らかになった。また、Ⅱ期官衙の外郭大溝のさらに外側に溝跡(外溝)が存在する可能性が考えられ、調査の初年度ではあったが大きな成果が得られた。今後も事業地内での調査が継続されていくことから、第1次調査の成果について現地説明会を開催した。同時期に郡山遺跡で行われていたⅡ期官衙外郭南門東側での第121次調査と、外溝の南辺を初めて確認した第124次調査の調査成果を合わせて、平成10年11月19日に報道発表を行い、11月21日に3調査合同の現地説明会を行い、約150名の参加があった。

平成11(1999)年4月に調査対象地内に汚染土壌の存在が確認され、検査の結果、環境基準値を超えていることが明らかになり、汚染土壌のすきとり作業を実施することになった。そのため、第2次調査については10月まで実施を見合わせ、11月から開始した。Ⅱ区南側およびⅣ区西側を対象とした調査に加え、第1次調査で古代の遺構面までの調査となっていたI区およびⅣ区の下層調査を行った。

また、住宅・都市整備公団側と協議の上、すきとり作業により遺構面が露出した範囲については、道路計画地外であっても調査対象に加えることにした。なお、平成12(2000)年度に第3次調査として実施したI区北側拡張区および道路計画の設計変更に伴うⅣ区東側拡張区の調査成果についても、本書に併せて報告している。

(2) 測量基準・図面の作成(第4図)

測量については、計画道路幅18mとなる環状線(Ⅲ区)のセンターラインを基準として、調査対象区域全体に任意の基準点を方眼設定し、その後、基準点測量を実施し「平面直角座標第X系」に位置付けている。図面上のグリッドは15m方眼とし、調査区北西から東に向かってアルファベットで表示し、南に向かって算用数字で表示した(第4図)。所在位置を示す場合は、北西角の点をグリッド名として使用している。遺構図面の作成については、グリッド内を5×10m単位に分割し、図面番号を付し平面区配図(1/20)を作成した。

(3) 遺物の取り上げ・調査記録の作成

遺物の取り上げにあたっては、作図単位とした平面区配図の番号を利用し、5×10m単位で取り上げている。特に必要と認められた遺物については、詳細な出土状態図と標高値を記録している。

整理作業の段階で、主な遺構については遺構観察カードを作成し、事実記載および調査時の所見を記録している。

(4) 遺構登録番号

遺構登録番号については、野外調査時は調査年度毎に遺構番号を付していたことから、整理作業時に検出遺構の整理を行い、その後、通し番号に変更している。これまで各種の報告書等での資料では、調査時の遺構番号を使用していたが、今回の報告書では、その整理された遺構番号を使用している。

(5) 調査報告書作成作業

調査報告書作成に伴う整理作業について、出土遺物の基礎整理(水洗・注記・接合・修復)、弥生土器の拓本・断面実測、遺構図面基礎整理、記録写真整理までを仙台市が行った。

その後、国際文化財株式会社東北支店が、出土遺物の登録・実測図作成、遺構・遺物図版の作成および原稿執筆を行った。その間、必要に応じて仙台市と整理作業内容等の確認・協議を行っている。特に、縄文土器・弥生土器・土師器・石器・木製品類の実測図については、仙台市西台畠遺跡調査事務所において実測図の点検を行った。

第4章 基本層序(第5~9図)

西台畠遺跡の一部は、昭和30年代前半には煉瓦工場の粘土採掘地、その後は国鉄仙台資材センターとして利用されていた経緯があり、本書所収の各発掘調査区においても、当時の土取りや整地等による擾乱の影響が著しい箇所が少なくない(第1章・第3章第1節)。各調査区の現地表面の標高は、10.8~11.2mを測る。

各調査区が上記のような状況下にあることから、基本層序の図化は擾乱の影響が少ない残存状況の良好な壁面にて行ったものの、調査の工程上、同一地点の上半部(IV層上面;古代の遺構検出面)と下半部(IV層上面以下;下層調査対象層)の層序を別年度に記録したものが一部ある。それらについては、複数年度にわたって記録した図を合成して掲載した。

また、野外調査時に各調査区での基本層を記録した際には、同一調査区での発掘調査が複数年度にわたるということもあり、一部で個別に上位から下位に層序名を付したものがある。これらについては整理段階で対応関係を照合し、遺跡全体の基本層序として層名を振り直した。本書では、この振り直した層名を使用している。

このほか、VI区およびVII区では播種の有無の検討を目的として、土壤サンプルを採取している。この分析結果は第6章第2節に掲載しているが、分析結果の報文は調査時の層名で記載されていることを付記しておく。本書での各基本層名と土壤サンプル採取時における層名の対照については、第6章第1節を参照されたい。

各調査区の基本層序はI~IX層に大別分層され、土質や混入物等の差異により細別される。ただし、地点により層序や層厚等の状況は様々であるため、同一層位でも細別分層での記録が可能であった箇所とそうでない箇所が存在する。

今次調査区における基本層序を概観すると、I層は近・現代の整地層で、II層は中世から近世にかけての耕作土・水田土壤である。III層は中世の遺構検出面および古代の遺物包含層である。

IV層以下については、わずかに起伏がみられるものの、概ね水平な堆積状況を呈する。IV層は上面が古代の遺構検出面であるが、IVd層を主体としていわゆる樹形開式期の遺物が多く出土しており、V層は上面が弥生時代の遺構検出面で、弥生時代中期中頃に位置付けられる遺物が少量出土している。また、VII層からは縄文時代晚期後葉、X層からはそれ以前のものと思われる遺物がわずかに出土しているが、VII層以下から出土した遺物については詳細な時期は不明である。IX層以下は縄文時代以前の自然堆積層で、XI層は、今次調査において遺物が出土した最下層に相当する。

以下、各層と各調査区における層序の特徴について記載する。

I層： I・II・IV・VII区で確認された。層厚は10~70cmを測り、近・現代の整地層で、現表土である。

II層： I・II・VII区で確認された。概ね褐色ないしオリーブ黒色を呈するシルトで、a·bの2層に細分される。層厚は最大で50cmを測り、一部グライ化が認められる。中世以降の耕作土・水田土壤である。

III層： I・II・IV・VII区で確認された。層厚は10~40cmを測る。暗褐色ないし黒褐色を基調とし、炭化物や焼土粒を含むシルトである。中世の遺構検出面および古代の遺物包含層である。

IV層： 第1次確認調査4トレンチを除く全ての調査区で確認された。層厚はI・II区で70~150cm前後、IV・VI区で50~80cm前後を測る。a~gの7層に細分される。f·g層はI区でのみ部分的に確認される。色調は黄褐色ないしにぶい黄褐色を基調とし、マンガンや酸化鉄を多量に含む。IVd層を主体とし、弥生時代中期中葉に位置付けられる、いわゆる樹形開式期の遺物を多量に包含する。なお、IVd層が堆積する標高は8.70m(VI区)~9.70m(I区)の範囲内に収まるもので、今次調査区の現地表面下200cm前後に相当する。地点は異なるものの、昭和30年代前半に伊東信雄・伊藤玄三両氏が調査した際の所見(伊藤1958ほか)と概

ね一致する。

V層：II区を除く全ての調査区で確認された。炭化物やマンガン粒を含む暗褐色の粘土質シルトを基調とし、層厚は10~20cmを測る。上面を主体として弥生時代中期中頃に位置付けられる遺物が少量出土している。

VI層：I・IV区で部分的に確認され、層厚は10cm前後を測る。にぶい黄褐色ないし明黄褐色を呈する粘土である。

VII層：II区を除く全ての調査区で確認された。層厚は10~30cmを測る。炭化物やマンガン粒を含む黒褐色粘土を基調とし、一部グライ化が認められる。色調のわずかな違いにより、a・bの2層に細分される。縄文時代晚期後葉に位置付けられる大洞A₁式期の遺物が少量出土している。

VIII層：II区を除く全ての調査区で確認された。層厚は30~60cmを測り、黄褐色ないしにぶい黄橙色を基調とする粘質土シルトで一部グライ化が認められる。石器が少量出土している。

IX層：I・IV・VII区で確認され、層厚10~30cm前後を測る。にぶい黄褐色の粘質を基調とし、a・bの2層に細分される。IV区を除きグライ化が認められる。

X層：II・VI区を除く各調査区で確認され、黒褐色を基調とする粘質土シルトで一部ではグライ化が認められる。層厚は10~30cm前後を測り、I区のみa・bの2層に細分されるが、Xa層はIX層とXb層の混合土である。縄文時代晚期中葉以前の所産と考えられる遺物が少量出土している。

XI層：II・VI区を除く各調査区で確認された。黄灰色ないしにぶい黄褐色を基調とする粘質土シルトで、I区のみa・bの2層に細分される。層厚は10~30cm前後を測り、一部グライ化が認められる。縄文時代晚期中葉以前と思われる遺物が少量出土しており、今次調査において遺物が出土した最下層である。

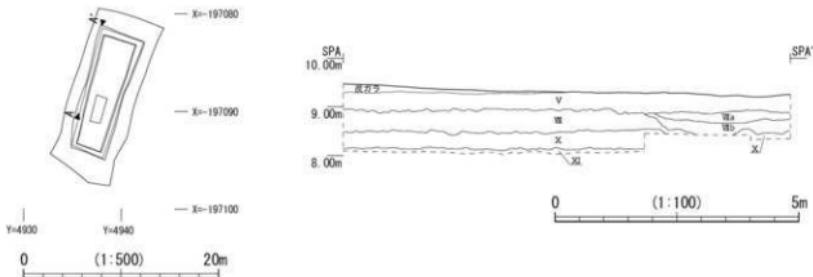
XII層：I・IV区で確認された。色黄灰色ないしオリーブ灰色を呈する粘質土シルトで、層厚10~25cm前後を測る。

XIII層：I・VII区で確認された。灰オリーブ色を呈する粘質土シルトを基調とし、層厚5~65cmを測る。

XIV層：I・VII区で確認された。緑灰色ないし灰色を呈する砂でグライ化が著しい。層厚は10~20cmを測る。

XV-XVI層：I・VII区で確認された。灰色ないし緑灰色を呈する砂でグライ化が著しい。層厚は15~65cmを測る。

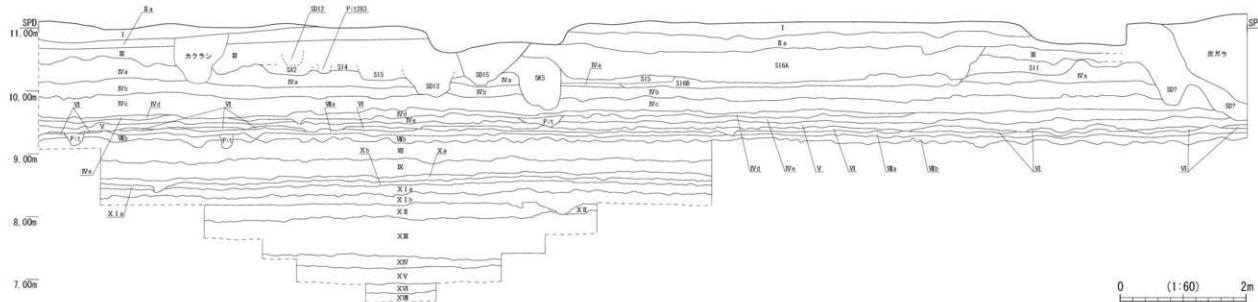
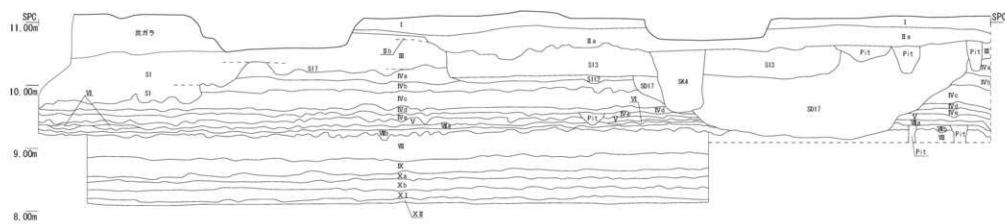
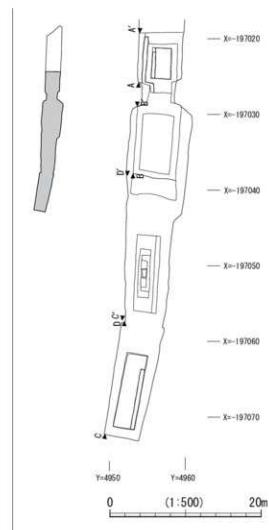
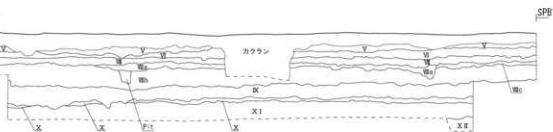
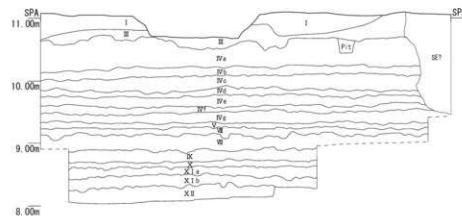
XVII層：I区でのみ確認された。オリーブ灰色を呈する粘土でグライ化が認められる。層厚は15cm前後を測る。



4トレンチ基本層序土層記載表 A-A'

層位	土色	土性	備考
V	2.5Y3/1 2.5Y5/2	黒褐色 褐灰褐色	粘土質シルト 中にマンガンを多量、酸化鉄を含む。層上部(厚さ10~15cm)は2.5Y4/1 黄灰褐色を呈す。一部グライ化。
VIa	-	-	グライ化。
Ⅶ	10YR6/1	褐灰色	粘土質シルト 酸化鉄を含む。層上部は2.5Y6/1 黄褐色を呈す。グライ化。
X	2.5Y4/1	褐灰色	粘土質シルト グライ化。
XI	5Y6/1	灰色	粘質シルト 酸化鉄を含む。層下部にかけて砂質が強くなる。グライ化。

第5図 基本層序 4トレンチ



第6図 基本層序 I区

I 区基本層序土層記録表 A-A'

層位	土色	土性	備考
I	-	-	整地層
Ⅱ	10YR5/2	黒褐色	シルト 炭化物粒を少量、幾枚土を含む。
B _a	10YR5/6	黄褐色	シルト 10YR7/1(風化)色粘土ブロック・マンガニ鉄、斑状に炭化鉄を含む。
B _b	10YR4/6	褐色	砂質シルト 10YR7/1(風化)色粘土ブロック・マンガニ鉄、斑状に炭化鉄を含む。
B _c	10YR5/4	にほ・黄褐色	砂質シルト 10YR7/1(風化)色粘土ブロック・マンガニ鉄、管状に10YR5/2(風化)色粘土・斑状に炭化鉄を含む。
B _d	10YR5/4	にほ・黄褐色	シルト質粘土 炭化物粒・マンガニ鉄を含む。
B _e	10YR5/6	黄褐色	シルト 10YR7/1(風化)色粘土ブロック・マンガニ鉄、斑状に炭化鉄を含む。
B _f	10YR5/4	にほ・黄褐色	粘土 局的に炭化物粒、マンガニ鉄、斑状に炭化鉄を含む。
B _g	10YR5/3	にほ・黄褐色	粘土 炭化物粒・多量のマンガニ鉄、斑状に炭化鉄を含む。
V	10YR3/3	暗褐色	粘土 炭化物粒・マンガニ鉄、斑状に炭化鉄を含む。
Ⅲ	10YR5/2	暗褐色	粘土 炭化物粒を所定の多量、マンガニ鉄、斑状に炭化鉄を含む。
Ⅳ	10YR5/2	黄褐色	粘土 炭化物粒を少量、留出層にマンガニ鉄を含む。管状に炭化鉄を含む。
Ⅴ	10YR5/3	にほ・黄褐色	粘土 10YR7/3(風化)色粘土・斑状の炭化物粒、少量のマンガニ鉄、管状に炭化鉄を含む。
X	10YR2/2	黒褐色	粘土 10YR7/3(風化)色粘土・斑状の炭化物粒、少量のマンガニ鉄、管状に炭化鉄を含む。
X _a	10YR2/1	黒褐色	シルト質粘土 炭化物粒、少量のマンガニ鉄、管状に炭化鉄を含む。留出層に炭化鉄集積あり。
X _b	10YR1/3	褐色	粘土質シルト 炭化物粒を少量、マンガニ鉄を含む。管状に炭化鉄を含む。
X _b	5Y4/2	風オーリーブ色	砂質シルト 炭化物粒を少量、局的にマンガニ鉄、斑状に炭化鉄を含む。

I 区基本層序土層記録表 B-B'

層位	土色	土性	備考
N	10YR6/4	にほ・黄褐色	シルト質粘土 10YR3/1(黒褐色)土ブロック・炭化物粒・マンガニ鉄、斑状に炭化鉄を含む。
V	10YR4/3	にほ・黄褐色	粘土 10YR3/1(風化)色シルト質粘土・炭化物粒・マンガニ鉄、斑状に炭化鉄を含む。
Ⅲ	10YR6/3	にほ・黄褐色	シルト質粘土 10YR3/1(黒褐色)土ブロック・炭化物粒・マンガニ鉄、斑状に炭化鉄を含む。
Ⅳ	10YR3/3	暗褐色	粘土 10YR3/1(風化)色シルト質粘土・炭化物粒・多量のマンガニ鉄、管状に炭化鉄を含む。
Ⅴ	10YR3/2	にほ・黄褐色	粘土 10YR3/1(黒褐色)土ブロック・炭化物粒・マンガニ鉄、斑状に炭化鉄を含む。
X _a	10YR2/1	黒褐色	シルト質粘土 炭化物粒、少量のマンガニ鉄、管状に炭化鉄を含む。留出層に炭化鉄集積あり。
X _b	10YR1/3	褐色	粘土質シルト 炭化物粒を少量、マンガニ鉄を含む。管状に炭化鉄を含む。
X _b	2.5Y3/3	風オーリーブ色	砂質シルト 炭化物粒を少量、局的にマンガニ鉄、斑状に炭化鉄を含む。

I 区基本層序土層記録表 C-C'

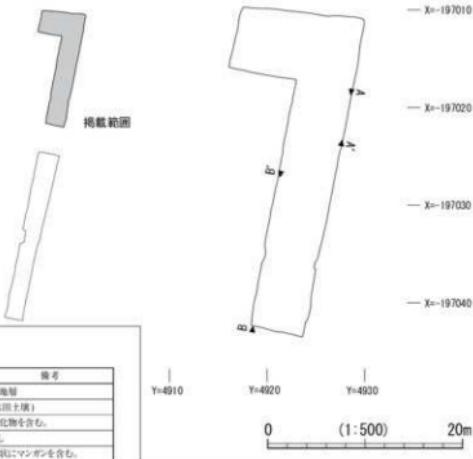
層位	土色	土性	備考
I	-	-	整地層
B _a	5Y3/1	オリーブ黒色	シルト 炭化物粒・マンガニ鉄、斑状に炭化鉄を含む。(本田土場)
B _b	2.5Y4/3	オリーブ黒色	シルト 「マンガニ鉄」を含む。(本田土場)
Ⅲ	10YR3/3	暗褐色	シルト 炭化物粒・マンガニ鉄を含む。
B _a	10YR5/6	黄褐色	シルト 炭化物粒・健土粒・マンガニ鉄、斑状に炭化鉄を含む。
B _b	10YR5/6	黄褐色	シルト 炭化物粒・健土粒・マンガニ鉄、斑状に炭化鉄を含む。B _a 層より鉄子が粗い。
B _c	10YR5/6	にほ・黄褐色	砂質シルト 斑状に炭化鉄を含む。
B _d	10YR5/6	にほ・黄褐色	炭化物粒多量・マンガニ鉄、斑状に炭化鉄を含む。
B _e	10YR6/6	明黄褐色	シルト質粘土 炭化物粒多量・マンガニ鉄を含む。炭化物粒・マンガニ鉄、斑状に炭化鉄を含む。
V	10YR4/2	黄褐色	粘土 10YR3/6(風化)色粘土ブロック・炭化物粒・マンガニ鉄、斑状に炭化鉄を含む。
X _a	10YR2/2	にほ・黄褐色	粘土 10YR3/4(風化)色粘土ブロック・炭化物粒・マンガニ鉄、斑状に炭化鉄を含む。
X _b	10YR3/2	暗褐色	粘土 10YR3/4(風化)色粘土ブロック・炭化物粒・マンガニ鉄、斑状に炭化鉄を含む。
Ⅳ	2.5Y3/3	暗オーリーブ褐色	粘土質シルト 斑状・マンガニ鉄を含む。留出層下部2.5Y5/1(黒褐色)。
Ⅴ	2.5Y5/2	暗灰褐色	粘土質シルト 「マンガニ鉄」を含む。
X _a	2.5Y5/1	黄褐色	粘土質シルト 10YR3/2(風化)土・斑状の土。
X _b	10YR1/2	暗褐色	粘土質シルト 炭化物粒を多く中央部を中心に含む。
X _b	2.5Y5/1	黄褐色	粘土質シルト X _b 層土を含む。
X _b	7.5Y6/2	風オーリーブ色	粘土質シルト 砂含む。

I 区基本層序土層記録表 D-D'

層位	土色	土性	備考
I	-	-	整地層
B _a	5Y3/1	オリーブ黒色	シルト 炭化物粒・マンガニ鉄、斑状に炭化鉄を含む。(本田土場)
Ⅲ	10YR3/3	暗褐色	シルト 炭化物粒・マンガニ鉄を含む。
B _a	10YR5/6	黄褐色	シルト 炭化物粒・健土粒・マンガニ鉄、斑状に炭化鉄を含む。
B _b	10YR5/6	黄褐色	シルト 炭化物粒・健土粒・マンガニ鉄、斑状に炭化鉄を含む。B _a 層より鉄子が粗い。
B _c	10YR5/6	にほ・黄褐色	砂質シルト 斑状に炭化鉄を含む。
B _d	10YR5/4	にほ・黄褐色	シルト質粘土 炭化物粒を多量・マンガニ鉄、斑状に炭化鉄を含む。
B _e	10YR6/6	明黄褐色	シルト 炭化物粒を多量・マンガニ鉄を含む。炭化物粒・マンガニ鉄、斑状に炭化鉄を含む。
V	10YR4/2	黄褐色	粘土 10YR3/6(風化)色粘土ブロック・炭化物粒・マンガニ鉄、斑状に炭化鉄を含む。
X _a	10YR4/4	にほ・黄褐色	粘土 10YR3/6(風化)色粘土ブロック・炭化物粒・マンガニ鉄、斑状に炭化鉄を含む。
X _b	10YR2/2	暗褐色	粘土 10YR3/6(風化)色粘土ブロック・炭化物粒・マンガニ鉄、斑状に炭化鉄を含む。
Ⅳ	10YR3/3	暗褐色	粘土 炭化物粒・マンガニ鉄を含む。
Ⅴ	10YR4/4	にほ・黄褐色	粘土 炭化物粒を多量・局的にマンガニ鉄、斑状に炭化鉄を含む。
B _a	10YR5/4	にほ・黄褐色	砂質シルト 「マンガニ鉄」を含む。

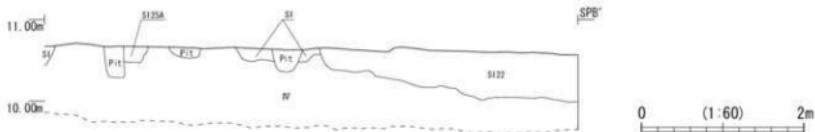
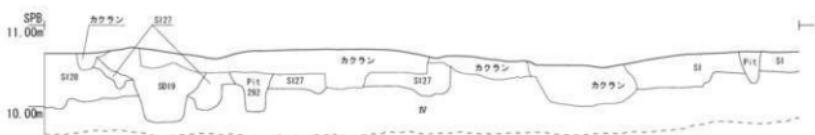
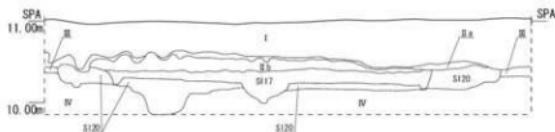
1区基本属性土壤登记表 DD (2)

層位	土色	土性	発育
Xa	10YR4/2	灰 黄褐色	粘土 10YR5-4に混じる黄褐色を呈する。炭化物粒・マンガン斑、斑塊に発化鉄を含む。
Xb	10YR4/3	灰 黄褐色	粘土 灰褐色斑、少量のマンガニ、斑塊に発化鉄を含む。
Xla	10YR4/2	灰 黄褐色	粘土 灰褐色斑、少量のマンガニ、斑塊に発化鉄を含む。
Xlb	10YR4/3	灰 黄褐色	砂質砂土 マンガニ、灰褐色を呈する。炭化物粒含む。壁面に風化土を認める。
XII	2.5Y5/2	暗灰褐色	砂 互層状、灰褐色を呈する。炭化物粒含む。
XIII	2.5Y5/4	灰 黄褐色	砂 炭化鉄を多少含む。炭酸カルシウムを含む。下部は2.5Y5-1緑灰色の層を形成する。一部グリナ。
XIV	7.5G5/1	綠灰色	砂 炭化鉄を含む。マンガニ斑、斑塊に発化鉄を含む。壁面は粘土質となる。グリナ。
XV	10GY5/1	綠灰色	砂 下部は2.5Y5-4黄褐色砂土。炭化物粒・マンガニを含む。グリナ。
XVI	10GY4/3	暗緑褐色	砂 炭化鉄斑、マンガニを含む。炭化物粒・発化鉄を含む。グリナ。
XVII	5GY5/1	オーバーリン	砂 炭化鉄斑、マンガニを含む。炭化物粒・微量含む。グリナ。

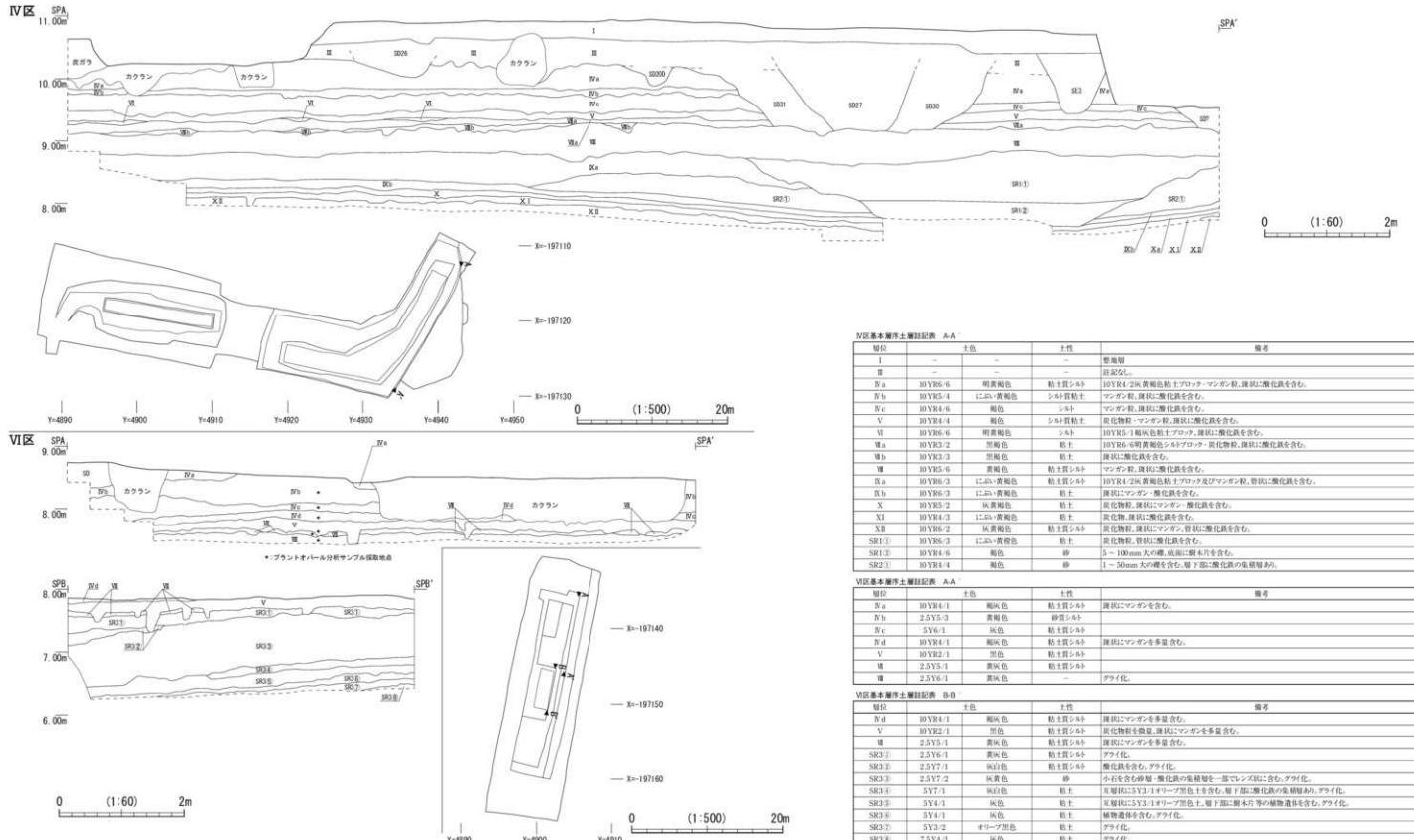


非区基本层序土壤剖面图 A-A' B-B'

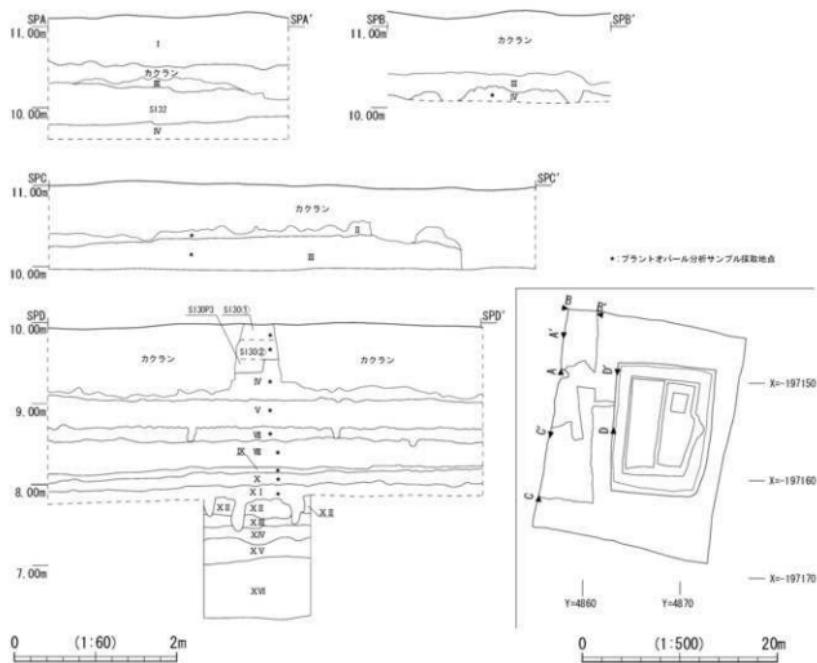
部位	土色	土性	発考
I	—	—	整地層
IIa	10 YR4/3 褐色	シルト (水田土壤)	
IIb	10 YR3/1 黒褐色	シルト 炭化物を含む。	
III	7.5YR3/2 黒褐色	シルト なし	
IV	10 YR5/3 にふく、黄褐色	シルト 表面にマンガンを含む。	



第7図 基本層序 II区



第8図 基本層序 IV区・VI区



VII区基本層序土層計記表：A-A'

層位	土色	土性	備考
I	-	-	砂質地盤、下層に瓦ガラ層あり。
II	10YR3/1	黒褐色	10YR4/3にひび黄色地塊を含む。
III	10YR5/4	に45°黄褐色	10YR3/6に粘化鉄・マンゴンを含む。一部グライ化。

VII区基本層序土層計記表：B-B'・C-C'

層位	土色	土性	備考
II	7.5Y4/2	稍灰黄色	砂質シルト
III	10YR3/1	黒褐色	シルト
IV	10YR4/2	灰黃褐色	砂質シルト

VII区基本層序土層計記表：D-D'

層位	土色	土性	備考
II	10YR5/4	に45°黄褐色	砂質シルト 10YR3/1黒褐色上を一部で互層的に、マンゴンを含む。グライ化。
V	10YR2/2	黒褐色	粘土質シルト 10YR3/6粘化鉄を含む。
III	7.5Y4/1	灰褐色	粘土質シルト マンゴン粘・粘化鉄を含む。グライ化。
IV	5Y5/3	灰オリーブ色	粘土質シルト 10YR3/1マンゴンを多量、粘化鉄を多量含む。グライ化。
V	5Y6/2	灰オリーブ色	砂質シルト 10YR3/1黒褐色上を一部で互層的に、マンゴンを含む。グライ化。
X	10YR3/1	黒褐色	粘土質シルト マンゴン粘・粘化鉄を含む。グライ化。
XI	5Y4/1	灰褐色	粘土質シルト マンゴン粘・粘化鉄を含む。グライ化。
XII	2.5Y4/1	灰灰色	粘土質シルト XII層上、5Y3-3灰オリーブ色地塊をブロック状に含む。グライ化。
XIII	5Y5/3	灰オリーブ色	砂質シルト 互層的に粘化鉄を含む。グライ化。
XIV	5Y4/1	灰褐色	粘土質シルト グライ化。
XV	2.5Y6/3	灰褐色	粘土質シルト グライ化。
XVI	10Y5/1	灰色	粘土質シルト ブロック状に10Y3/1灰褐色を含む。グライ化。

第9図 基本層序 VII区

第5章 検出遺構と出土遺物

前章でも触れたように、本遺跡は近・現代の搅乱による影響を受けている箇所が多く、調査区によって自然堆積層や遺構・遺物の残存状況は異なる。こうした状況と確認調査等の結果(第1章第3節、本章第1節)を踏まえ、本発掘調査に着手した。

遺構の検出状況を概観すると、各調査区共にIV層上面にてピットや溝跡等が検出され、さらにこれらの遺構に切られる状況で竪穴住居跡や溝跡等が検出される傾向がみられた。このため、IV層上面を古代から中世の遺構検出面とし、その内で重複関係から古代から中世の遺構を古代上面、それらに切られるかたちで検出された遺構を古代下面として区别し、平面区配図を分けて作成した。また、I区とIV区においては基本層II層およびIII層が比較的良好に残存しており、III層上面にて溝跡・井戸跡・ピット等の遺構が検出されたため、これらの遺構についてはIII層上面検出遺構として調査した。

調査の進展に伴い検出遺構数が増加した段階で、各調査区および層位における検出遺構の性格や出土遺物の検討を行い、III層上面で検出した遺構は中世、IV層上面の検出遺構については、古代上面としたものを古代～中世前半、古代下面としたものを郡山官衙が造営される7世紀半ばから8世紀前半に帰属するものと判断し、その後の調査を行った。また、遺構検出作業時や古代の遺構堆積土等からは弥生土器や縄文土器の出土が認められたため、IV層以下については弥生時代以前の遺構・遺物の残存状況確認とその記録保存を目的とし、各調査区内に下層調査区を設定して調査を実施した。

以下、本章では、第1・2次調査成果に加え、第2次調査に伴う宅地造成予定地を対象とした確認調査成果、第3次調査で実施した調査成果の一部(調査I区北側拡張部分および同IV区東側拡張部分)を含めて、時代別に報告する。

第1節 確認調査で検出された遺構と遺物(第2・10～14・182・187・193・196・209・210・213～217図)

本節では、第1次調査に伴う確認調査の出土遺物(第11～13図)、第2次調査に伴う確認調査で検出された遺構および出土遺物(第10・14図)について記載する。

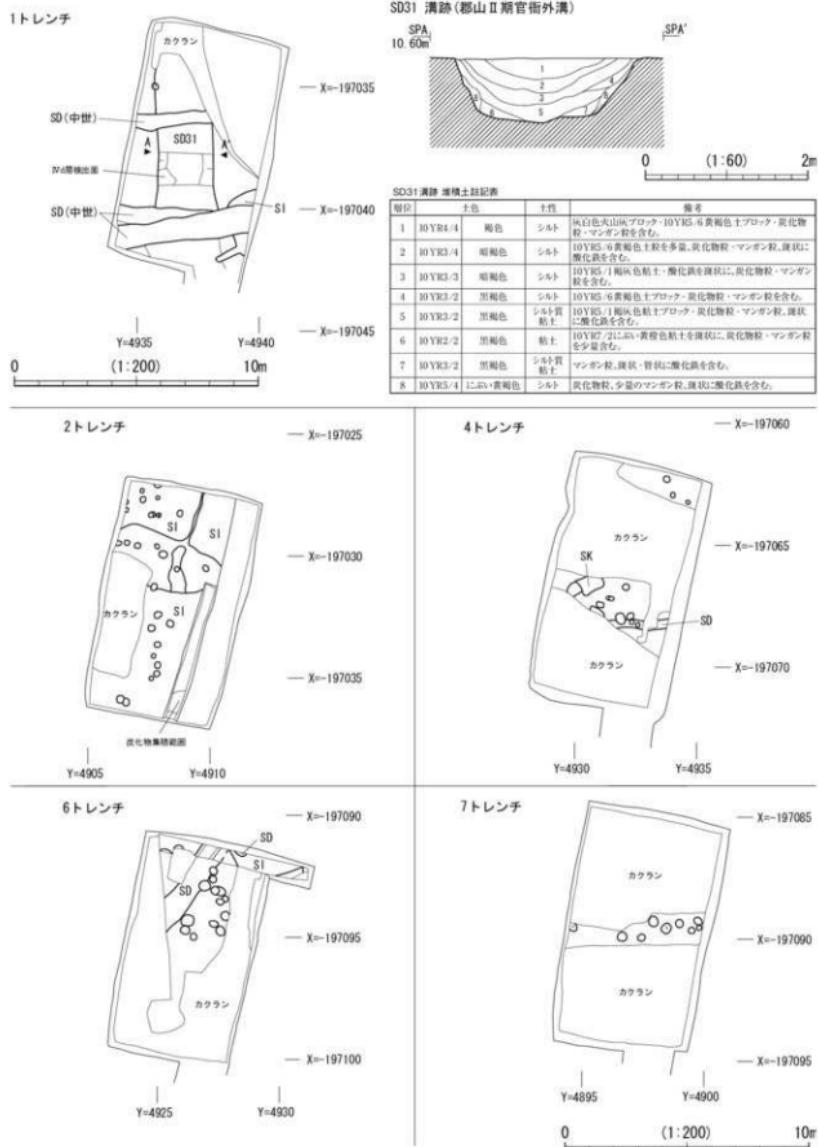
第1章第4節で既述しているように、第2次調査に伴う確認調査は、宅地造成部分を対象に7箇所(1～7トレンチ)、道路計画部分に2箇所(8・9トレンチ)、計9箇所のトレンチを設定した(第2図)。遺構が検出されたトレンチについては、土層の堆積状況を確認するためサブトレンチを設け掘り下げたものがあるが、基本的に遺構の掘削は行わず、その平面プランを記録するに留めた(第10図)。

以下、遺構が検出されたトレンチについては個別に、出土遺物については、第1・2次調査をまとめて記載する。ただし、弥生時代以前の遺物については、本章第5節にてまとめて掲載した(第182・187・193・196・209・210・213～217図)。これらの遺物の調査次数および出土トレンチについては、観察表を参照されたい。

(1) 第2次調査に伴う確認調査(第10・14図)

1トレンチ：竪穴住居跡1軒、溝跡4条が検出された。竪穴住居跡はトレンチ南東部から1/3程が検出され、南西壁から煙道が延びる。溝跡は南北方向に延びるもののが1条、それを切って東西方向に直線的に延びるもののが3条検出された。東西方向に延びる3条は、いずれも上端幅1～2m前後を測り、N-75°～80°-Eの方向に直線的に延びるもので、重複関係等から中世の所産と推測される。

この3条の溝跡に切られる南北方向に延びる溝は、規模や位置関係から、SD31(郡山二期官衙外溝、本章第4節)の一部であることが判明したため、土層観察を目的として検出プランの中央部に南北幅1.5mのサブトレンチを設定した。本トレンチ内で検出されたSD31の規模は、検出長約6.4m、上端幅2.3～2.5m、サブトレンチ内の下端幅150cm程



第10図 宅地部分確認調査(第2次調査)トレンチ平面・断面図

を測り、北側は擾乱の影響を受けている。堆積土は暗褐色ないしにぶい黄褐色シルトを主体とする8層に分層された。8層は壁崩落土と考えられるものの、1～7層はレンズ状に堆積し、1層の上位には10世紀第1四半期の降灰とされる十和田a火山灰(To-a)と目される灰白色火山灰がブロック状に含まれる。こうした堆積状況は、IV区から検出された部分(本章第4節、第151図)と概ね同様で、本トレンチの1～3層はIV区での1～3層、4・5層はIV区での4層、6～8層はIV区での5・6層に、それぞれ対応するものと考えられる。なお、サブトレンチの南東隅では、わずかに基本層序第IVd層が確認され、いわゆる樹形開式に比定される壺(第182図-1)が出土した(写真図版34)。

2トレンチ：竪穴住居跡3軒、ピット32基が検出された。竪穴住居跡は、北側に2軒が隣接するように位置し、残る1軒はトレンチ南半部に位置する。南側の竪穴住居跡には一部に南北110cm、東西50cm程のサブトレンチを設定し、土層や床面の確認を行った。堆積土は暗褐色を主体とする4層に分層された。床面は検出面から20～30cmの深さで検出され、トレンチ内南側から炭化物が集積する箇所が確認された。ピットの大部分は竪穴住居跡プラン内から検出されており、重複関係から古代～中世以降の所産と考えられる。

4トレンチ：ピット13基と、これに切られる溝跡1条、土坑1基が検出された。いずれも時期的なものは不明である。溝跡は、緩く蛇行して東西方向に延びる。

6トレンチ：擾乱の影響が大部分におよんでいたものの、トレンチ北半部から竪穴住居跡1軒、溝跡2条、ピット16基が検出された。竪穴住居跡と溝跡はいずれも北壁にかかるところから、北壁沿いに幅1mのサブトレンチを設定し、土層や床面の確認を行った。竪穴住居跡の堆積土は2層に分層され、検出面から約25cmの深さで焼土範囲を伴う床面が確認された。溝跡は竪穴住居跡に切られるものと切るものとの両者が認められた。前者は上端幅約1m、検出長約4mを測り、堆積土は4層に分層される。後者は壁面でのみ確認されたため、竪穴住居跡埋没以降に造られたことを除き、詳細は不明である。

7トレンチ：トレンチ内の殆どを擾乱が占めており、擾乱の影響がおよばないトレンチ中央部から時期不明のピットが9基検出された。このうち2基には柱痕跡が認められる。

(2) 確認調査出土遺物(第11～14図)

確認調査を実施した結果、第1次確認調査4・8・10トレンチ、第2次確認調査3～5トレンチを除く各トレンチから遺物が出土した。出土遺物は古墳時代後期～飛鳥・奈良時代に帰属すると考えられる土師器および須恵器の破片資料を主体とし、これに中世や弥生時代に帰属するものが少数認められる。土師器や須恵器については層位が特定できるものは総てⅢ層から出土しており、層位的・年代的にも本章第4節にて後述する遺構群や遺構外出土遺物と合致する。第1次確認調査の出土遺物として、1トレンチから出土した土師器壺、須恵器壺・蓋、石臼、石製模造品を各1点、2トレンチから出土した土師器壺3点・甕1点、須恵器壺1点・蓋3点・壺1点・鉢1点、3トレンチから出土した無文銭、丸瓦を各1点、5トレンチから出土した土師器壺、須恵器壺を各1点、6トレンチから出土した土鍤1点、7トレンチから出土した土師器ミニチュア・高环を各1点、9トレンチから出土した須恵器高台付杯・蓋、土鍤、不明鉄製品を各1点、11トレンチから出土した土師器壺・蓋、須恵器高台付盤・甕を各1点、12トレンチから出土した土師質土器壺を1点、計29点(第11～13図)。第2次確認調査の出土遺物として、1トレンチから出土した土師器壺2点・甕1点、2トレンチから出土した土師器壺2点、6トレンチから出土した須恵器提瓶1点、計6点を掲載した(第14図)。以下、確認調査で出土した遺物について、遺物の種別毎に一括して記載し、土師器および須恵器については、さらに器種別に一括する。なお、確認調査において出土した弥生時代以前に帰属すると考えられる遺物については、本章第5節にて一括記載している。

土師器：壺9点、高环1点、蓋1点、甕2点、ミニチュア1点の、計14点を掲載した。壺(第11図-1・6～8、第12図-3、第13図-1、第14図-2～5)は第14図-2を除き、すべて丸底で口縁部と体部の境界に段を持つ。このうち、外面口縁部に軋痕が認められる第14図-3は、直立気味の短い口縁部形態、体部内面の非黒色処理やヘラナデ調整、

内外面の黒色漆仕上げ等、いわゆる鬼高系土師器の特徴を有する。その他の土師器坏については、口縁部形態が直線的に外傾するもの(第11図-1・6、第12図-3、第13図-1、第14図-5)と、内湾するもの(第11図-8)が認められる。前者の口唇部はいずれも丸みを帯びるもの、全体の器厚が一定するもの(第12図-3・5、第13図-1)と、口縁部上半から口唇部にかけて薄くなるもの(第11図-1・6)に細分される。第11図-8は外面の段とほぼ同じ位置の内面に明確な稜を持ち、口縁部は内湾し、口唇部は平坦気味となる器形を呈する。第14図-2の器形は体部に段を持たず、平底状の丸底から緩く内湾して口縁部にいたる。第12図-7は、坏部のほぼ全体を欠損する高坏である。ラッパ状に強く外反する裾部から直線的にやや内傾しながら立ち上がる器形を呈し、脚部外面はハケメにて整形される。黒色処理は坏部内面にのみ認められる。第13図-2は、リング状のつまみを有する蓋である。外面共にヘラナデにて整形され、内面天井部は黒色処理される。つまみ端部および口縁部を欠損しており、全体の器形は不明である。

甕(第11図-9、第14図-1)は、いずれも口縁部から胴部上半の被片資料である。前者の器形は球状と推定される胴部と頸部の境界に段を有し、頸部は直線的にやや外傾する。口縁部上端は欠損しているが、強く外反するものと推定される。後者は最大径を胴部中位に持つ長胴形と推定され、胴部と口縁部の境界には段を持たず、口縁部は強く外反する器形を呈する。ミニチュア(第12図-6)は、口縁部と体部の境界に稜を持ち、口縁部は部分的に内側に屈曲する器形を呈する。内面口縁部以外は強いヘラナデにて整形されており、ヘラケズリに似た面が形成される。

須恵器：坏2点、高台付坏1点、蓋5点、盤1点、高台付盤、壺、鉢、甕、提瓶を各1点、計14点を掲載した。坏(第11図-2・10)は、いずれも外面の口縁部と体部の境界に段を持つ器形を呈する。前者の口縁部は直立気味で口唇部は尖り気味となり、内面に向かって低くなる面が形成される。後者の口縁部は僅かに内湾し、口唇部は丸みを帯びる。两者とも外面体部下半～底部は回転ヘラケズリにて整形される。高台付坏(第12図-8)は、外面底部に回転ヘラケズリが施された後に端部が尖り気味となる高台が貼り付けされる。蓋(第11図-3・11～13、第12図-9)は、いずれも破片資料である。外面の天井部と口縁部の境界に段を持つもの(第11図-11・12)と、稜を持つもの(同図-3・13、第12図-9)に大別され、後者はすべてカエリを有する。第11図-13は、つまみを有する。甕(第12図-4)は、外面の口縁部と体部の境界に段を持ち、口縁部は内湾する。口唇部はほぼ平坦に整形され、中央に浅く窪む。内面体部～底部にはロクロ調整前の青海波文が観察される。高台付盤(第13図-3)は、盤底部と体部の境界に稜を持つ。外面底部に回転ヘラケズリが施された後に、端部がほぼ平坦な高台が貼り付けされる。第11図-14は壺としたが、平瓶の可能性もある。外面肩部に2条の沈線が施される。同図-15は厚手の鉢で、外面底部は手持ちヘラケズリ後にヘラナデ(図示なし)が施される。第13図-4は大甕と推定される口縁部破片で、中程に括れを持つ。外面には括れる箇所と上端の2箇所に頸が付く。また、外面の下端部には横位の沈線が施される。提瓶(第14図-6)は、口縁部と頸部の境界がわずかに窪み、口唇部が尖り気味となる器形を呈する。

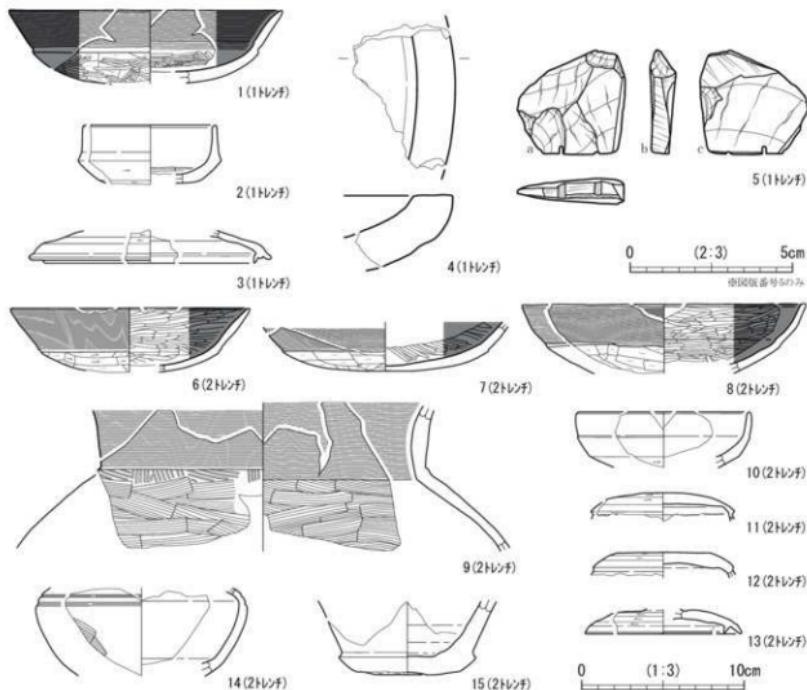
土師質土器：1点掲載した。第13図-5は口唇部に窪みを持ち、受け口状の器形を呈する壺の口縁部破片である。

瓦：1点掲載した。第12図-2は凸面に繩タタキ目、凹面に布目痕、凹面側縁にヘラケズリの整形痕が観察される丸瓦破片である。

土製品：土鍤を2点掲載した。第12図-5・10は法量が大きく異なり、とくに大型で管状を呈する第12図-5は鍤とするには疑問が残る。いずれも指頭調整のみが施される。

金属製品：2点掲載した。第12図-1は径2.2cmを測る無文鏡である。同図-11は用途不明の鉄製品で、鋸の付着が著しく不明な点が多いが、断面形状は末端が砲弾形に窄まる筒状を呈する。

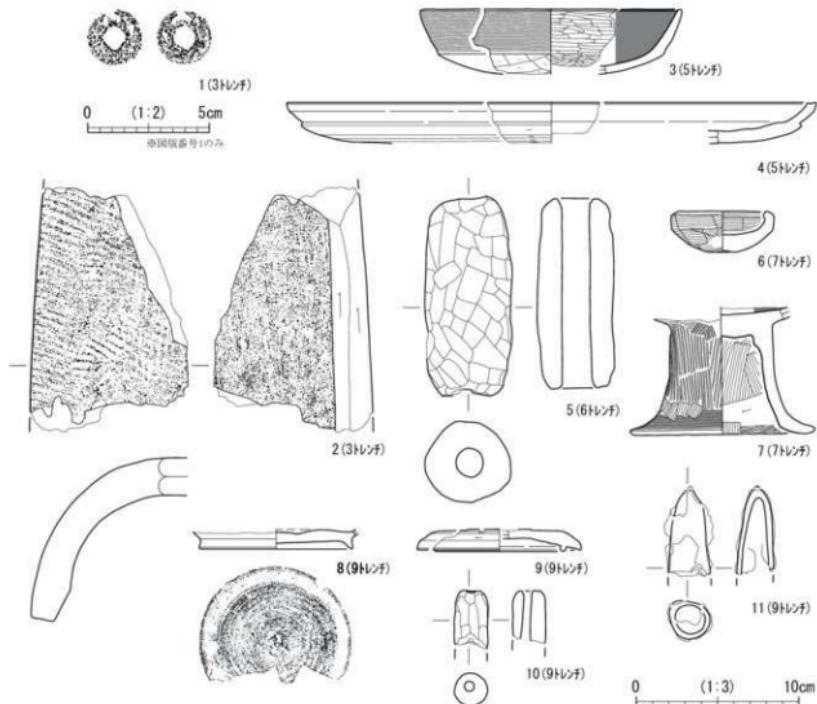
石製品：2点掲載した。石臼(第11図-4)は大部分を欠損する茶白の受け皿部で、残存する部分の上縁幅は2.6cm、推定される直径は41cmである。石材は石英安山岩である。石製模造品(同図-5)は、研磨が全面におよばず素材面が広く残存していることから製作途中の失敗品と考えられる。下端面の穿孔部分が研磨されていることから、砾石へ転用されたと考えられる。石材は頁岩である。



回収番号	登録番号	調査区	出土地	層位	種別	器種	部位	法面4cm			外面調整	内面調整	参考	写真回数
								上	中	下				
1	C-001	1号	-	検出面	土壌器	环	口縁～底	(6.8)	-	(4.5)	口縁:3.2°、底:1.5°、側:1.5°	口縁:3.2°、底:1.5°、側:1.5°	内面黒色処理	38
2	E-001	1号	-	裏層	土壌器	环	口縁～底	(8.3)	-	(3.6)	口縁調整、底:1.5°	口縁調整、底:1.5°	内面黒色処理	38
3	E-002	1号	-	裏層	土壌器	直	天井	(5.0)	-	(2.0)	口縁調整、天井:斜面<90°	口縁調整、天井:斜面<90°	内面黒色処理	38
6	G-002	2号	-	裏層	土壌器	环	口縁～底	(4.8)	-	(3.9)	口縁:3.2°、底:1.5°、側:1.5°	口縁:3.2°、底:1.5°、側:1.5°	内面黒色処理	38
7	G-003	2号	-	裏層	土壌器	直	天井	(5.0)	-	(3.0)	口縁:3.2°、底:1.5°、側:1.5°	口縁:3.2°、底:1.5°、側:1.5°	内面黒色処理	38
8	G-004	2号	-	裏層	土壌器	环	口縁～底	(7.4)	-	(4.3)	口縁:3.2°、底:1.5°、側:1.5°	口縁:3.2°、底:1.5°、側:1.5°	内面黒色処理	38
9	G-005	2号	-	裏層	土壌器	直	口縁～側	-	-	(9.1)	口縁:3.2°、側:1.5°、底:1.5°	口縁:3.2°、側:1.5°、底:1.5°	内面黒色処理	38
10	E-003	2号	-	不明	土壌器	环	口縁～底	(8.6)	-	(4.4)	口縁調整、底:斜板<90°	口縁調整、底:斜板<90°	内面自然転写着	38
11	E-004	2号	-	裏層	土壌器	直	天井	-	-	(1.8)	口縁調整、天井:斜板<90°	口縁調整、天井:斜板<90°	内面黒色処理	38
12	E-006	2号	-	裏層	土壌器	直	天井	-	-	(1.6)	口縁調整、天井:斜板<90°	口縁調整、天井:斜板<90°	内面自然転写着	38
13	E-005	2号	-	裏層	土壌器	直	天井	-	-	(1.5)	口縁調整、天井:斜板<90°	口縁調整、天井:斜板<90°	内面黒色処理	38
14	E-007	2号	-	裏層	土壌器	直?	口縁～側	-	-	(5.4)	口縁調整、沈没2条、側:1.5°	口縁調整、沈没2条、側:1.5°	平底の可能性有	38
15	E-008	2号	-	裏層	土壌器	直	底	-	(6.4)	(4.5)	口縁調整、側:1.5°、底:1.5°	口縁調整、側:1.5°、底:1.5°	内面自然転写着	38

回収番号	登録番号	調査区	出土地	層位	種別	器種	法面4cm			参考	写真回数	
							長さ	幅	厚さ			
4	Kd-001	1号	-	去探	石製品	石臼	(0.2)	(0.1)	(2.7)	172.12	石英安山岩 欠損品、茎(口下部)、直径(径3.0cm)、上締幅(2.6cm)	38
5	Kd-002	1号	根瓦	-	石製品	石製機械品	(0.2)	(0.2)	0.7	8.31	頁岩 直筒品、双孔。砾石に転用	38

第11図 第1次確認調査出土遺物(1)



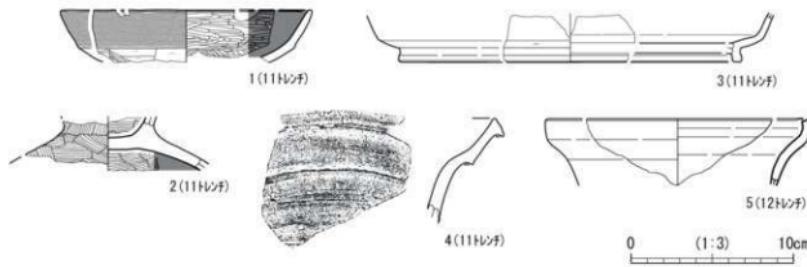
図版 番号	登録 番号	調査区	出土地	層位	種別	器種	部品	法量(cm)			外面調整	内面調整	備考	写真 回数
								長	幅	厚				
3	C-006	5号地	-	Ⅲ層	土器	环	口縁～底	(35.2)	-	(4.0)	口縁:3.0mm, 体～底:0.9mm	A918*3	内面黑色処理	38
4	E-009	5号地	-	Ⅲ層	土器	盤	口縁～底	(32.6)	-	(2.6)	口縁調整, 体～底:0.9mm	B-118～B-120調整	外表面糊付着	38
6	C-008	7号地	-	不明	土器	口縁	口縁～底	(5.4)	-	(2.5)	口縁:0.9mm	口縁:0.9mm, 体～底:0.9mm	内面黑色処理	38
7	C-007	7号地	-	表様	土器	高杯	高杯～脚	-	脚(1.1)	(7.8)	足底:~0.9mm, 脚上端:~0.9mm	足底:~0.9mm, 脚上端:~0.9mm	内面黑色処理	38
8	E-010	9号地	-	Ⅲ層	土器	高台环	底～高台	-	高台径(0.4)	(1.2)	口縁調整, 高台径:0.4mm	口縁:0.4mm, 高台径:0.4mm	内外面糊付着	38
9	E-011	9号地	-	Ⅲ層	土器	蓋	天井	(10.2)	-	(0.4)	口縁調整, 天井:脚板:~0.9mm	口縁:0.9mm	内面黑色処理	38

図版 番号	登録 番号	調査区	出土地	層位	種別	器種	部品	法量(cm)			凸面調整	凹面調整	備考	写真 回数
								長	幅	厚				
2	F-001	3号地	-	-	-	瓦	瓦片	(15.1)	(0.9)	(2.3)	周縁付:~0.9mm	布打痕, 瓦縫:~0.9mm		38

図版 番号	登録 番号	調査区	出土地	層位	種別	器種	部品	法量(cm)			重量(g)	特徴-備考	写真 回数
								長	幅	厚			
5	P-001	6号地	-	羽表土層	土製品	土總	12.3	5.3	4.7	(327.7)	指擦調整		38
10	P-002	9号地	-	不明	土製品	土總	(0.4)	2.1	2.1	(16.7)	指擦調整		38

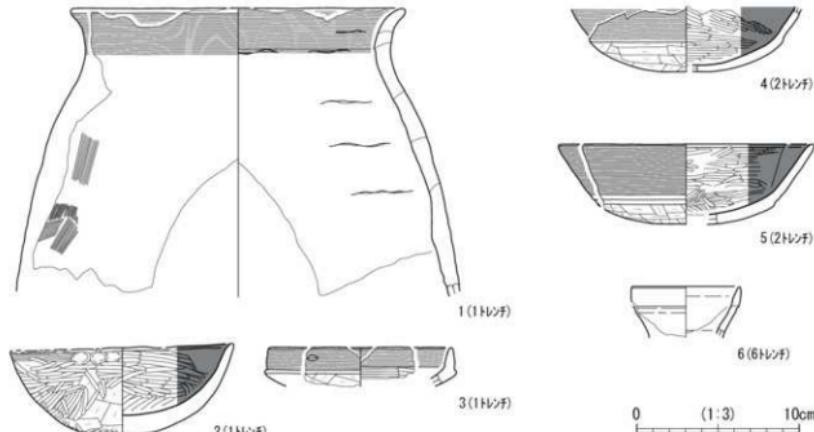
図版 番号	登録 番号	調査区	出土地	層位	種別	器種	部品	法量(cm)			重量(g)	特徴-備考	写真 回数
								長	幅	厚			
1	N-020	3号地	-	不明	金屬製品	鍔	鍔	2.2	-	-	(1.2)	無文鏡	38
11	N-001	9号地	-	不明	金屬製品	不明鉢形品	(0.3)	(2.5)	(2.5)	(0.6)			38

第12図 第1次確認調査出土遺物(2)



図版番号	登録番号	調査区	出土地	部位	種別	器種	基部	法量(cm)		外周調整	内面調整	備考	写真回数	
								口径	底径					
1	C-009	11号井	-	裏層	土器	环	口縁~底	(5.6)	-	0.3)	口縁:ヨコアリ、底:ホリ付→ヨリ付	ハリ付	内面黒色処理	38
2	C-010	11号井	-	不明	土器	直	つまみ~天井	-	-	0.3)	つまみ:ヨリ付、天井:ハリ付	内面天井部黒色処理、外周黒	38	
3	E-012	11号井	-	裏層	灰陶器	高台付盤	真~高台	-	高台付 (1.2)	0.0)	口縁調整、底:ローレ付→高台付	ローレ調整		38
4	E-013	11号井	-	裏層	灰陶器	束	口縁	-	-	(6.6)	ローレ調整→沈縫1条	ローレ調整	内面漆付	38
5	1001	12号井	-	不明	土器	直	口縁~底	(5.2)	-	(4.1)	ローレ調整	ローレ調整		38

第13図 第1次確認調査出土遺物(3)



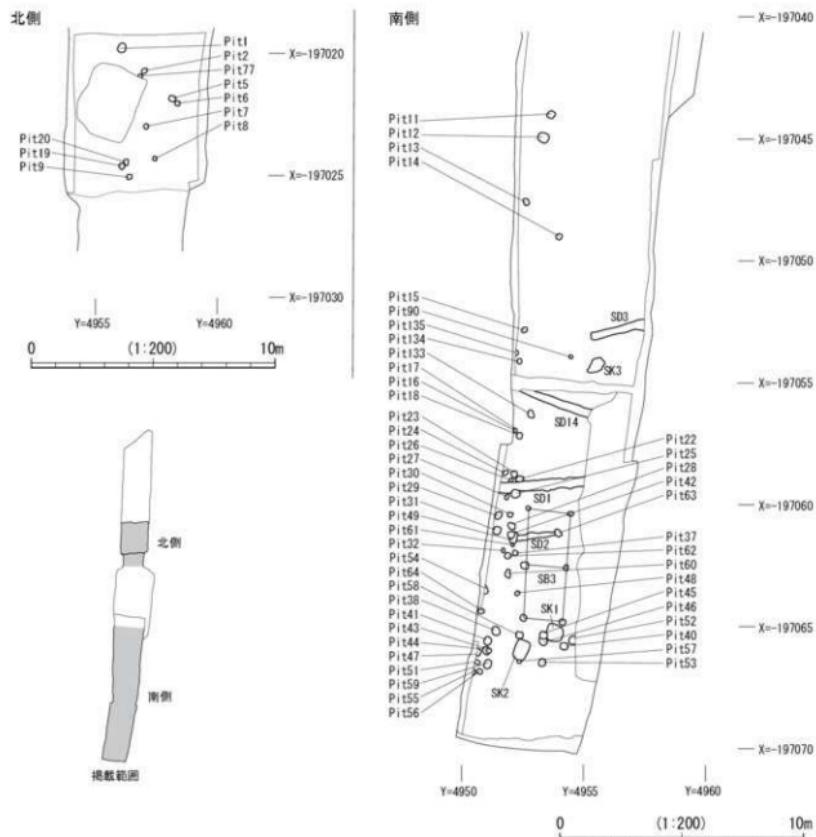
図版番号	登録番号	調査区	出土地	部位	種別	器種	部位	法量(cm)		外周調整	内面調整	備考	写真回数	
								口径	底径					
1	C-012	1号井	SII	検出面	土器	束	口縁~底	(20.8)	-	0.7)	口縁:ヨコアリ、底:ハリ付	口縁:ヨコアリ、底:ハリ付?	内面被熱	39
2	C-013	1号井	SII	検出面	土器	环	口縁~底	13.7	-	3.6	口縁:ヨコアリ→脚付→ハリ付、底:ハリ付	ハリ付	内面黒色処理	39
3	C-011	1号井	-	不明	土器	环	口縁~底	(11.2)	-	0.4)	口縁:ヨコアリ、底:ハリ付	口縁:ヨコアリ、底:ハリ付	内面黒色付在上F、外周口縁部:被熱	39
4	C-014	2号井	-	側溝	土器	环	口縁~底	-	-	(6.0)	口縁:ヨコアリ、底:ハリ付	ハリ付	内面黒色処理	39
5	C-015	2号井	-	裏層	土器	环	口縁~底	(5.8)	-	4.9	口縁:ヨコアリ、底:ハリ付	ハリ付	内面黒色処理	39
6	E-014	6号井	-	不明	灰陶器	從板	口縁~底	(6.8)	-	(0.1)	ローレ調整	ローレ調整		39

第14図 第2次確認調査出土遺物

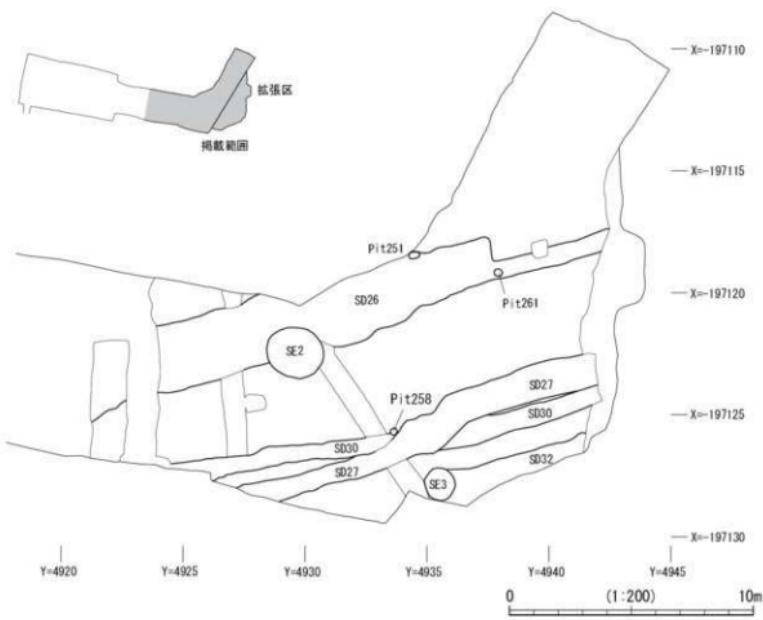
第2節 中世の遺構と遺物(第15・33・48・167・168図)

本節では、I区とIV区においてⅢ層上面から検出された遺構、重複関係や遺構の観察所見等から当該期に属すると考えられるII区から検出された井戸跡1基とそれらの遺構内出土遺物について報告する。検出された遺構は掘立柱建物跡1棟、溝跡7条、井戸跡3基、土坑3基、ピット62基である(第15・16・48図)。

遺構内からは土師器、須恵器、瓦、金属製品、木製品類、石製品等が出土しているが、いずれも堆積土から出土したもので、遺構に伴うと考えられず、土師器や須恵器等、古代に帰属する遺物については後世に流入したものと考えられる。遺構外からは、少数ではあるものの当該期の所産と考えられる陶器類や木製品類が出土しており、それらについては遺構外出土遺物としてまとめて掲載した(本章第4節(8)、第167・168図)。なお、II区から検出された当該期に属すると考えられる遺構は井戸跡1基(SE1)のみであるため、遺構配置図は作成していない。II区内



第15図 I区遺構配置図(中世)



第16図 IV区遺構配置図(中世)

における位置関係は、第48図(Ⅱ区遺構配置図(古代))を参照されたい。

今次調査の成果をみる限り、当該期における人的活動の痕跡については判然としない部分があるものの、掘立柱建物跡や井戸跡、規模や構造の特徴から区画的性格が想定される溝跡の存在など、道路内北東部において住居域が形成されていたことが確認された。

以下、当該期の所産と考えられる遺構および遺構内出土遺物について、遺構の種別毎に記載する。なお、報告にあたっては一部の遺構については個別に記載しているが、その他については諸属性を観察表にまとめて示している。

(1) 掘立柱建物跡(第17図)

今次調査で確認された中世の所産と考えられる掘立柱建物跡は、I区から検出された1棟のみである。

SB3 掘立柱建物跡(第17図)

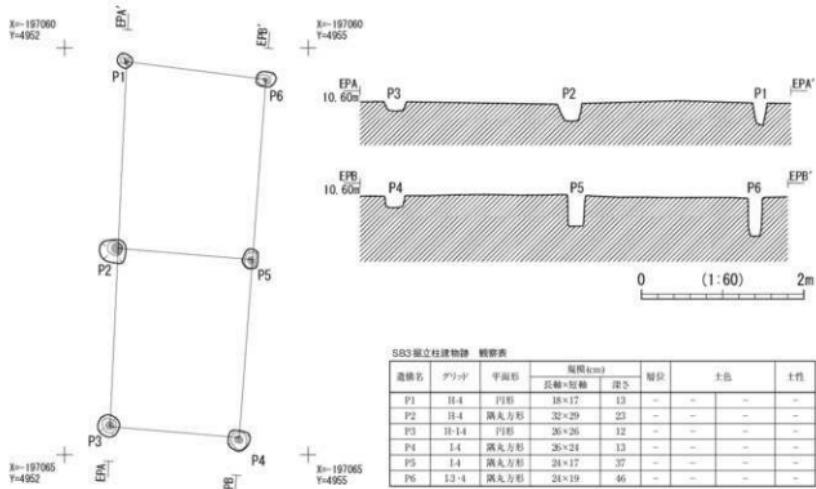
I区南端部、H-3、I-3・4グリッドに位置する。調査段階では各々単独のピットとして取り扱っていたが、整理段階において、規模や位置関係、柱痕跡の有無等について検討した結果、6基のピットが南北2間×東西1間の南北棟建物跡として組めることが確認された。

しかしながら、本掘立柱建物跡は東西に狭い調査区のほぼ中央に位置し、東側は搅乱、西側は調査区外に近接していること、周辺には当該期に属すると考えられるピットが多数検出されており、本遺構P3とP4の東側延長線上には本建物跡を構成する柱穴とはほぼ同規模で柱痕跡を有するPit64が位置すること、また、P3とPit64の柱穴間距離

離はP3・P4のそれとほぼ同一であること等を併せると、本来は2間×2間もしくはそれ以上の東西棟総柱建物跡で、今次調査ではその一部が検出された可能性もある。

本掘立柱建物跡の桁行を基準とした軸方位は、N-2°-Eである。各柱穴と他遺構の重複関係は認められないものの、建物跡北半部空間内には東西方向に延びるSD2が位置する。桁行は総長450cm、柱間寸法は、西側柱穴列が北から230cm、220cm、東側柱穴列が北から225cm、218cm、梁行は北側が175cm、南側が160cmを測る。柱穴の規模は長軸18~32cm×短軸17~29cm、検出面からの深さ12~46cmを測る。平面形状は円形ないし不整形、断面形状は筒形ないし逆台形を基調とする。

柱痕跡は全ての柱穴で確認された。東西の両桁行における底面の標高には対応関係が認められ、北側(P1・P6)から南側(P3・P4)に向かってそれぞれ約20cmずつ段階的に浅くなるが、これが何に起因するもののかは不明である。いずれの柱穴からも遺物は出土していない。



第17図 SB 3掘立柱建物跡

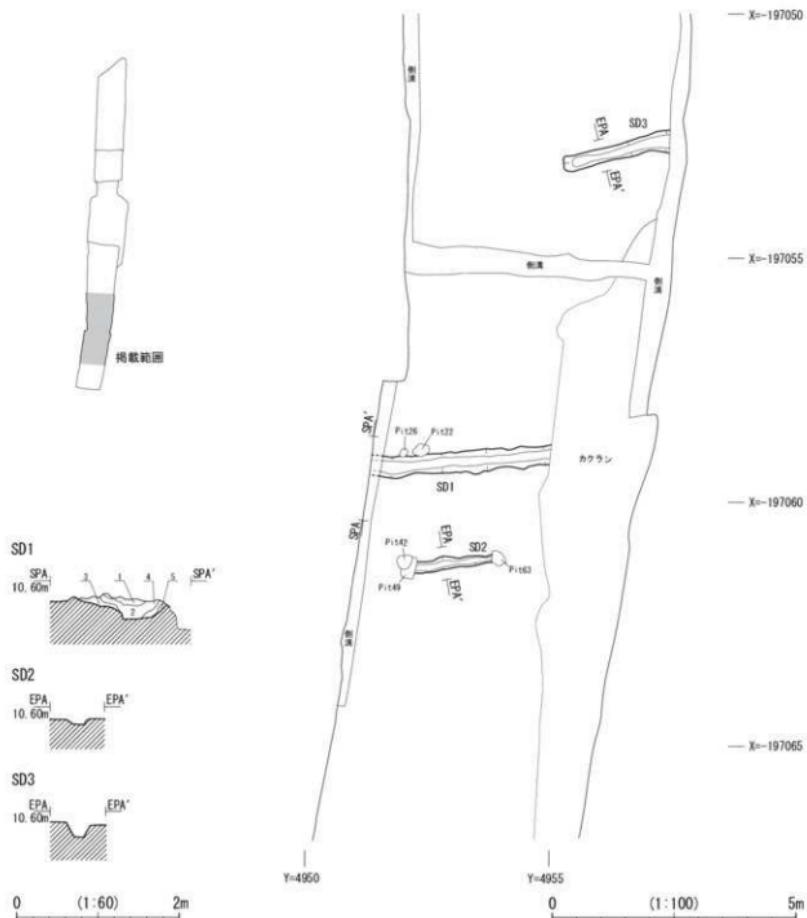
(2) 溝跡(第18~23図)

I区から3条、IV区から4条、計7条の溝跡が検出された。I区から検出されたものは全て部分的な検出で、不明な点が多い。IV区から検出されたものはI区の溝跡に比べて幅広で、いずれも南西から北東方向へ延びるもの、それらの関連性については不明な点が多い。また、規模や構造の特徴から区画的性格が想定されるものが存在するが、これについても局所的な検出であるため、判然としない。

以下、主な溝跡について詳述する。その他の溝跡については観察表にまとめて示した。

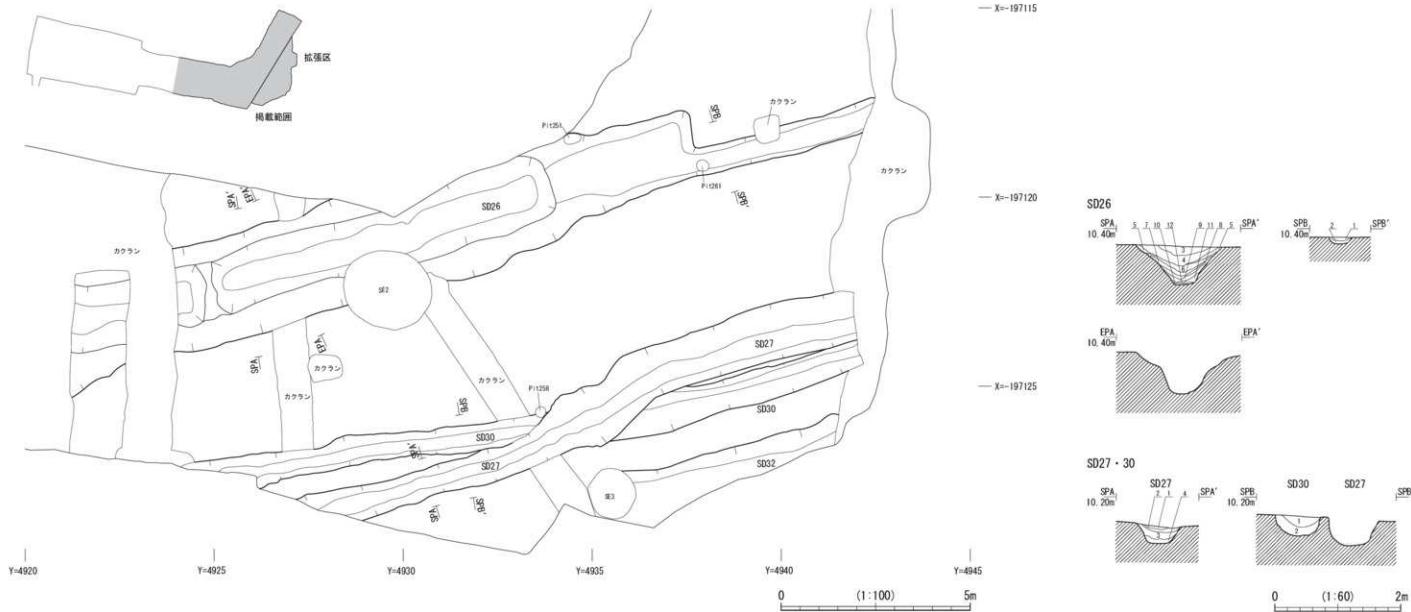
SD1 溝跡(第18図)

I区南半部、H-1-3グリッドに位置し、Pit22・26に切られる。検出された規模は、長さ3.38m、上端幅35~48cm、下端幅15~27cm、検出面からの深さ18cmを測り、断面形状は不整な逆台形を呈する。N-86°-Eの方向



遺跡名	調査区	グリッド	方向	規模(m)			層位	土色	土性	備考	重複	
				突出長	上堤幅	下堤幅						
SD1	I-18	H-13	N-86°-E	(338)	35 ~ 48	15 ~ 27	18	1	10YR3/2	黒褐色	シルト	Pit22・26に想られる。
								2	10YR2/2	黒褐色	シルト	
								3	10YR2/2	黒褐色	シルト	
								4	10YR3/3	暗褐色	シルト	
								5	10YR2/2	黒褐色	シルト	
SD2	I-18	H-14	N-82°-E	(155)	13 ~ 26	7 ~ 13	5	-	-	-	-	Pit42・49-63に切られる。
SD3	I-18	J-3	N-77°-E	(227)	30 ~ 44	10 ~ 23	17	-	-	-	-	[エレベーションのみ]

第18図 I区溝跡(中世)



遺構名	調査区	アリード	方向	範囲(km)			層位	土色	土性	備考	重複		
				検出点	上端幅	下端幅							
SD26	N区	H-17 G-H8	N27° E	G250	72 ~ 279	41 ~ 141	15 ~ 140	1	0/YR3-2	黒褐色	シルト	新化物質・マンゴー色を多含む。	SD26, SD27-31~45n, SD27, F251-261に重複。
								2	0/YR2-2	黒褐色	粘土質シルト	0/YR3-2と同構造シルトブロック・炭化物質を少含む。	
								3	0/YR3-2	黒褐色	シルト	0/YR3-2と同構造シルトブロックを多含む。	
								4	0/YR3-3	暗褐色	粘土質シルト	0/YR3-2と同構造シルトブロックを多含む。	
								5	0/YR4-2	灰褐色	粘土質シルト	0/YR3-3と同構造シルトブロックを多含む。	
								6	0/YR4-2	灰褐色	シルト質粘土	0/YR3-3と同構造シルトブロックを多含む。	
								7	0/YR5-2	灰褐色	シルト質粘土	0/YR3-3と同構造シルトブロックを多含む。	
								8	0/YR6-2	灰褐色	粘土	0/YR5-2と同構造粘土。	
								9	0/YR6-3	褐色	粘土	0/YR5-2と同構造粘土。	
								10	5/Y-2	灰褐色	砂質粘土	0/YR5-2と同構造粘土。	
								11	5/Y-2	灰褐色	砂質粘土	0/YR5-2と同構造粘土。	
								12	5/Y-2	灰褐色	粘土	0/YR5-2と同構造粘土。	

第19図 IV区溝跡(中世)

遺構名	調査区	アリード	方向	範囲(km)			層位	土色	土性	備考	重複	
				検出点	上端幅	下端幅						
SD27	N区	H-18	N-56 ~ -75° E (156)	75 ~ 148	36 ~ 52	30 ~ 47	1	10/YR3-3	暗褐色	シルト	10/YR3-6と同構造シルトブロック・炭化物質・マンゴー色、深くヒート化鉄を含む。	SD26, SD27-31を切る。
							2	10/YR2-2	黒褐色	シルト質粘土	10/YR3-6と同構造シルトブロック及びグリーンゼラフ。	
							3	10/YR2-2	黒褐色	シルト質粘土	10/YR3-6と同構造シルトブロックを多量、深くヒート化鉄を含む。	
							4	10/YR4-3	灰褐色	粘土	10/YR3-6と同構造シルトブロック及びグリーンゼラフ。	
SD30	N区	G-18	N-74 ~ -83° E (1800)	60 ~ 98	21 ~ 33	30 ~ 67	1	10/YR3-3	暗褐色	シルト	0/YR3-6と同構造シルトブロック、多量のマンゴー色を含む。	SD26, SD27-31に沿わる。
							2	10/YR3-2	黒褐色	粘土質シルト	10/YR3-6と同構造シルトブロックを多量、深くヒート化鉄を含む。	
SD32	N区	H-18	N-74 ~ E (560)	65 ~ (150)	(20) ~ (20)	(22)	—	—	—	—	表面凹凸。	SD26, SD27-31に沿わる。
							—	—	—	—	—	

に直線的に延び、東側は擾乱によって失われ、西側は調査区外にかかる。堆積土は黒褐色シルトを主体とする5層に分層された。堆積土中より土師器片が出土しているが、掲載した遺物はない。

SD26 溝跡(第19・20図)

IV区東半部、H-I-7、G-H-8グリッドに位置する。SI29、SD20A・20B・22・31を切り、SE2、Pit25I・26Iに切られる。また、本遺構の3~4m南には、ほぼ同一方向に延びるSD27・30・32が位置する。

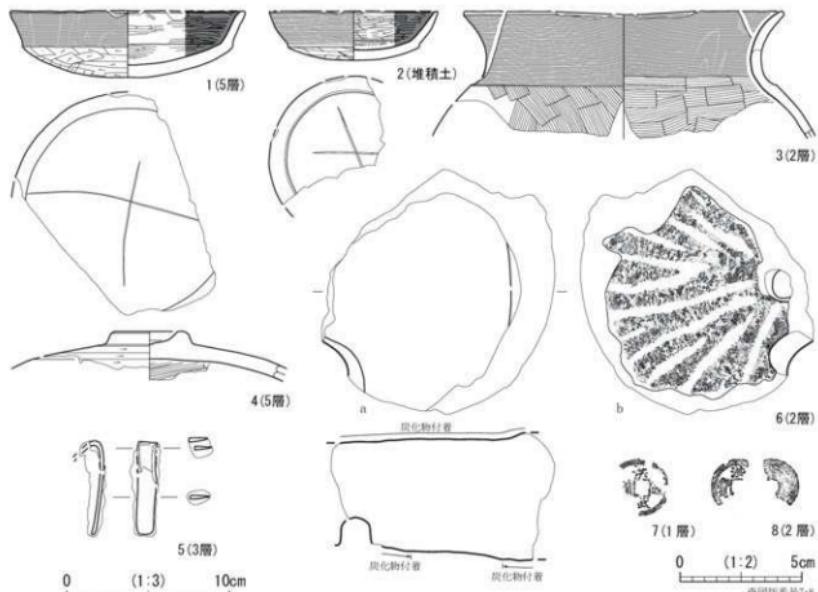
検出された長さは22.1mを測る。N-73°-Eの方向へ直線的に延び、南西・北東の両側は擾乱によって失われている。上端幅は南西側で270cm、北東側で72cmを測り、南西側が幅広く北東側が幅狭となる。下端幅は南西側で50~80cm、北東側で40~60cmを測り、上端幅とは対照的に、底面は南西側が幅狭で北東側は幅広となる。検出面からの深さは南西側で126cm、中央部付近で149cm、北東側で15cmを測る。断面形状は逆台形を基調とし、壁面の括れが部分的に認められる。縦断面の形状は、北東側の幅狭な箇所と幅広の箇所に約1mの高低差、南西側には台形状を呈する50cm程の高まりを有する。このような部分的に大きく変化する断面の形状や規模からは、建物跡等の主要な遺構は不明であるものの、中世の屋敷を区画する溝の可能性が考えられると共に、幅・深さと共に狭小となる北東部については通路部分に相当する可能性が想定される。

堆積土は12層に分層された。1・2層は北東側の堆積土でいずれも炭化物を含む黒褐色シルトないしシルト質粘土である。4~12層は南西側の堆積土で、灰黄褐色・灰オリーブ色粘土を主体とし、酸化鉄を多く含む。

本溝跡からの出土遺物として、土師器壺2点、甕1点、須恵器蓋1点、鉄製品1点、銭貨2点、石臼1点を掲載した(第20図)。土師器壺2点(1・2)の器形は共に丸底で、前者は内外面共に口縁部と体部の境界に棱を持ち、口縁部は直線的に外傾する。後者は外面の口縁部と体部の境界に段を、内面の境界には棱を持ち、口縁部はわずかに内湾する。口唇部はいずれも丸みを帯びる。2点共に外面は口縁部ヨコナデ、体部~底部はヘラケズリにて整形された後、外面底部に「×」状の刻画が施される。内面はヘラミガキが施され、黒色処理される。3は胴部中程に最大径を持つ球胴形と推定される土師器甕で、外面の頸部と胴部の境界に段を持ち、口縁部は外反する。4はリング状の低いつまみを有する須恵器蓋で、器厚等からみて大型品と推定される。外面には被熱の痕跡が認められる。5は用途不明の鉄製品である。形状が輥長のU字状と推定され、断面形状は二等辺三角形を呈する。銭貨(7・8)はいずれも堆積土上層から出土したもので、前者は洪武通宝(明銭・1368年初鑄)、後者は同じく洪武通宝と推定される。6は石臼の上臼で、大部分を欠損するものの供給口が一部残存し、a・b面共に炭化物の付着が認められる。推定される芯棒孔径は2.0cm、同じく供給孔径は4.2cmである。臼の目は6分割され、主溝と副溝共に放射状に中央に向かって延びる特徴から、粗縫きに用いられた粉挽臼と考えられる。石材は多孔質の安山岩である。このほか、3層および5層から、クルミ片がそれぞれ少量出土している。

SD27 溝跡(第19・21・22図)

IV区東半部南側、H-I-8グリッドに位置する。SD30・31を切り、重複関係にあるSD30と同一方向に延びていることから、本溝跡はSD30の造り替えである可能性が考えられる。また、本溝跡の3~4m北にはSD26、2m南にはSD32が、それぞれ並走するように位置する。検出された規模は、長さ15.61m、上端幅75~148cm、下端幅26~52cm、検出面からの深さは最大47cmを測る。N-56°~75°-Eの方向に概ね直線的に延び、北東側は擾乱によって失われ、南西側は調査区外にかかる。断面形状は逆台形を基調とし、壁面は北側が内湾し、南側が外反する。堆積土は黒褐色シルト質粘土を主体とする4層に分層された。本溝跡からの出土遺物として、須恵器甕2点、二次加工陶器片1点、金属製品3点、台石1点を掲載した(第21・22図)。第21図-1・2はいずれも須恵器甕の頸部~肩部破片で、肩部は外面に格子タタキ目、内面に當て具痕が観察される。器厚からみて、前者は肩が張る大型品、



圆数 登錄 番号	登録 番号	調査区	出土地	層位	種別	器種	部材	法量cm ³	外面調整	内面調整	備考	写真 回数
1	C176	N区	SD26	5層	土器	环	口縁～底	(4.3)	—	4.1	口縁:3.9°, 底:~底-5.5°, 端:~5.5°	39
2	C175	N区	SD26	堆积土	土器	环	口縁～底	(0.4)	—	3.0	口縁:3.9°, 底:~底-5.5°, 端:~5.5°	39
3	C177	N区	SD26	2層	土器	束	口縁～瓶	(0.6)	—	6.78	口縁:3.9°, 瓶:~5.5°	39
4	E051	N区	SD26	5層	土器	盖	つまみ 一突片	—	0.01	0.01調整, 天井:~瓶-5.5°, 瓶:~瓶上端-5.5°, 瓶:~5.5°	外表面熱	39
圆数 登錄 番号	登録 番号	調査区	出土地	層位	種別	器種	部材	法量cm ³	重量(g)	特徴-備考	写真 回数	
5	N-011	N区	SD26	3層	金銀製品	小形鍍銀品	瓦	1.8	0.25	(3.9)	—	39
7	N-021	N区	SD26	1層	金銀製品	鍍銀	柱(2.2)	—	0.39	洪武通宝(明・1368年被鑄)	39	
8	N-022	N区	SD26	2層	金銀製品	鍍銀	柱(2.2)	—	0.11	洪武通宝(明・1368年被鑄)?	39	
圆数 登錄 番号	登録 番号	調査区	出土地	層位	種別	器種	部材	法量cm ³	重量(g)	石材	備考	写真 回数
6	K4-003	N区	SD26	2層	石製品	石刀	刃	(5.0)	(3.2)	(7.8)	1817.87 安山岩 欠損品、斜削刃(上刃)、芯棒孔(径2cm)、供給口(径2cm)	39

第20図 SD26溝跡出土遺物



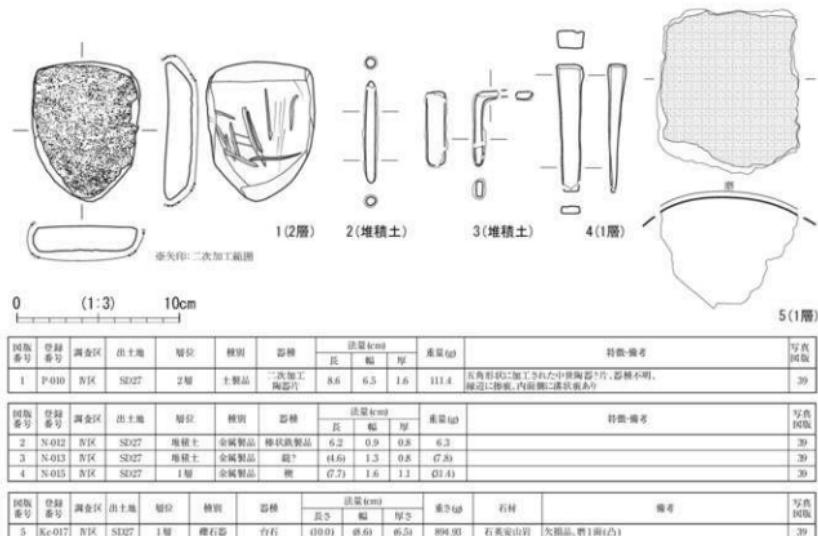
第21図 SD27溝跡出土遺物(1)

圆数 登錄 番号	登録 番号	調査区	出土地	層位	種別	器種	部材	法量cm ³	外面調整	内面調整	備考	写真 回数	
1	E-052	N区	SD27	堆積土上層	土器	束	縫	—	—	6.7	6.77調整, 瓶:透子3.9° 縫:背面浅文	外表面熱, 軸付	39
2	E-053	N区	SD27	堆積土	土器	束	縫	—	—	0.01	0.01調整, 瓶:透子3.9° 縫:輪心4.5°→5.5°	外表面熱, 軸付	39

後者は中型品と推定される。第22図-1は、二次加工が施された器種不明の陶器破片で、胎土には海綿骨針を含む。すべての側面に擦痕が認められ、内外面共に五角形状を呈する。また、内面側には幅2mm程の溝状痕が認められる。台石(同図-5)は凸面に磨痕が広く残存し、その他は欠損している。石材は石英安山岩である。このほか、中國龍泉窯産の碗体部破片、詳細不明な骨片が、それぞれ堆積土から少量出土している。龍泉窯産の碗破片については、IV区遺構外から出土した2個体の碗(第168図-2・3)のいずれかと同一個体の可能性がある。

SD30 溝跡(第19図)

IV区中央部南側、G～I-8グリッドに位置する。Pit248を切り、SD27、Pit246に切られる。また、本溝跡の3～



第22図 SD27溝跡出土遺物(2)

4m北にはSD26、1m南にはSD32が並走するように位置する。

検出された規模は、長さ18m、上端幅60～98cm、下端幅21～33cm、検出面からの深さは最大67cmを測り、N・74°～83°・Eの方向に直線的に延び、北東側は擾乱によって失われ、南西側は調査区外にかかる。断面形状はU字状を呈する。堆積土は2層に分層され、いずれも黄褐色シルトブロックやマンガン粒を含む。堆積土中より土器片が出土しているが、掲載した遺物はない。

SD32 溝跡(第19-23図)

IV区中央部南側、H-I-8グリッドに位置する。SI69、SD31を切り、SE3に切られる。また、本遺構の北1mにはSD30、北2mにはSD27、北7mにはSD26が並走するように位置する。

検出された規模は、長さ5.6m、上端幅65～150cm、下端幅20～120cm、検出面からの深さ22cmを測り、N・74°・Eの方向へ直線的に延び、溝の両側は擾乱と重複構造によって失われているほか、遺構の南側半分は調査区外にかかり、最下部は底面に至っていない。

本遺構からの出土遺物として、堆積土上層から出土した土師器環1点を掲載した(第23図)。口縁部と体部の境界に段を持ち、底部は丸底で、体部から口縁部は直線的に外傾する器形を呈する。体部～底部の調整は、外面がヘラケズリ後に部分的なヘラミガキ、内面はヘラナデ後にヘラミガキが施され、黒色処理される。



団版 番号	登録 番号	調査区	出土地	層位	種別	器種	断面	法量6cm			外面調整	内面調整	備考	写真 回数
								11層	10層	器高				
1	C-185	吉区	SD32	堆積土上層	土師器	環	口縁一休	(D.4)	—	(D.5)	11層：3.27cm、 10層：4.94cm、器高：5.18cm	11層：3.27cm、 10層：4.94cm、器高：5.18cm	内外面微熱	40

第23図 SD 32溝跡出土遺物

(3) 井戸跡(第24～29図)

II区から1基、IV区から2基、計3基の井戸跡が検出された。年代を特定できる遺物の出土が認められないものの、遺構の重複関係をみる限りでは、今次調査において検出された当該期の遺構群の中でも最も新しい段階に属するものと考えられる。

SE1 井戸跡(第24・25図)

II区北端部、E・F-1グリッドに位置し、S114を切る。北半部と西側の一部は調査区外に延びる。検出した規模は、上端径172×135cm下端径119×104cm、検出面からの深さ201cmを測る。平面形状は不整円形を呈すると推測され、断面形状は底面に丸みを持ち、わずかに開口する不整な円筒形を呈し、東西の壁面には廃絶前の自然崩落跡と思われる凹凸が認められる。井戸枠等は検出されず、素掘りの井戸と考えられる。

堆積土は黒褐色シルトを主体とする11層に分層された。2～5層は黄褐色土ブロック、9～11層は灰色土ブロックを含む。また、6層および8層以下にはグライ化が認められる。

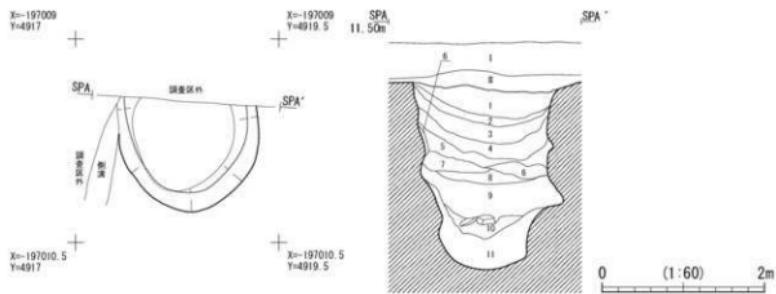
本遺構からの出土遺物として、木製品類、石製品を各1点掲載した(図25)。1は下端面にのみ加工痕が認められる芯持ちのクリまたはコナラ属で、上位は炭化により破損している。2は割れた蝶片を素材とした二次加工のある蝶片である。a面は自然面が広く残存し、上端部および左側縁部は折れている。a・b面の縁辺に二次加工が施され、a面中央には刃物の刃先が垂直に当てられたものと考えられる傷が認められる。石材は石英安山岩質凝灰岩である。

SE2 井戸跡(第26～28図)

IV区中央部、H-8グリッドに位置し、SD26を切る。検出した規模は、上端径235×203cm、下端径110×90cm、検出面からの深さ324cmを測り、平面形状は不整円形、断面形状はわずかに開口する円筒形を呈する。井戸枠等は検出されず、素掘りの井戸と考えられる。

堆積土は黒色ないしオリーブ黒色粘土を主体とする11層に分層された。4層以下は黒色ないしオリーブ黒色を基調とする粘土層で、グライ化が認められる。

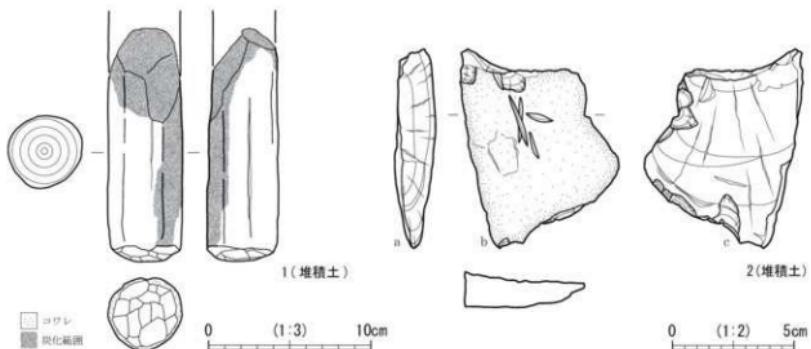
本遺構からの出土遺物として、平瓦、木製品類、石製品、骨角器を各1点掲載した(第27・28図)。第27図-1は大部分を欠損する平瓦破片で、凸凹両面の痕跡から、桶巻き作りにて製作されたものと考えられる。凹面の側縁はヘラケズリにて整形される。同図-2は僅かに外傾する側縁の形状から、桶底と考えられる。a～c全面に加工痕が観察される。樹種はスギ、木取りは柾目である。また、実測図は示していないが同一層から樹皮を素材とした繊り紐が出土している(写真図版40-6)。第28図-1は面取り加工により柱状に仕上げられた砥石で、f面にのみ自然面が残存する。a～d面に使用による擦痕が認められ、f面には刃物の刃先が垂直に当てられたものと考えられる傷が



SE1 #戸跡 鋼鉄帯

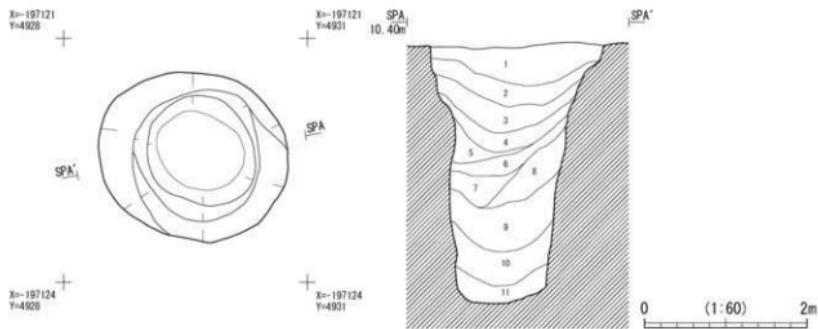
層積名	調査区	グリッド	平面形	復原(cm)		層位	土色		土性	備考	重積
				長軸	幅軸		1	2			
SE1	IIK	E-F1	不整円形 172×(335)	301	10YR2/2 10YR3/2 10YR3/1 10YR3/1 10YR3/2 5Y4/1 2.5Y3/2 10Y3/1 5Y3/1 5Y3/1	1	10YR2/2	黒褐色	シルト	SE1#を切る。 10YR5-3に黒褐色土ブロックを含む。 10YR3-3に黒褐色土を含む。 10YR3-3に黒褐色土ブロックを含む。 10YR3-3に黒褐色土ブロックを含む。 10YR3-3に黒褐色土ブロックを含む。 10YR3-3に黒褐色土ブロックを含む。 10YR3-3に黒褐色土ブロックを含む。 10YR3-3に黒褐色土ブロックを含む。 10YR3-3に黒褐色土ブロックを含む。	SE1#を切る。 10YR5-3に黒褐色土ブロックを含む。 10YR3-3に黒褐色土を含む。 10YR3-3に黒褐色土ブロックを含む。 10YR3-3に黒褐色土ブロックを含む。 10YR3-3に黒褐色土ブロックを含む。 10YR3-3に黒褐色土ブロックを含む。 10YR3-3に黒褐色土ブロックを含む。 10YR3-3に黒褐色土ブロックを含む。 10YR3-3に黒褐色土ブロックを含む。
						2	10YR3/2	黒褐色	シルト		
						3	10YR3/1	黒褐色	シルト		
						4	10YR3/1	黒褐色	シルト		
						5	10YR3/2	黒褐色	シルト		
						6	5Y4/1	灰褐色	シルト	グライ化。	SE1#を切る。
						7	2.5Y3/2	黒褐色	砂質シルト	下部に焼成鉢残片あり。	
						8	10Y3/1	灰褐色	-	グライ化。	
						9	5Y3/1	オリーブ褐色	-	10Y5-1灰褐色土ブロックを含む。グライ化。	
						10	5Y3/1	オリーブ褐色	-	10Y5-1灰褐色土ブロックを含む。グライ化。	
						11	5Y3/1	オリーブ褐色	-	互層状に10Y5-1灰褐色土を含む。グライ化。	

第24図 SE1井戸跡



図版 番号	登録 番号	調査区	出土地	層位	種別	器種	全長 mm	最大幅 mm	最大厚 mm	特徴	樹種	木取り	備考	写真 回数
1	L-001	IIK	SE1	角槓土 本製品類	加工材	(34.4)	4.6	4.4	下端面に加工痕、一部炭化	クリ/orコナラ属	芯材	なし		40
2	Kd404	IIK	SE1	堆積土 石製品 のあらわし片	石製品	二次加工	8.2	6.5	1.7	31.40	石英安山岩質 凝灰岩	h面+e面加工、複数面に二次加工あり、刀物面あり		40

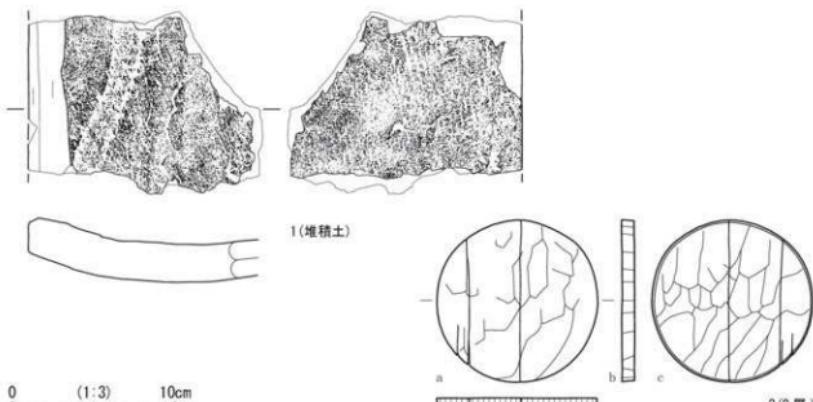
第25図 SE1井戸跡出土遺物



SE2井戸跡 断面図

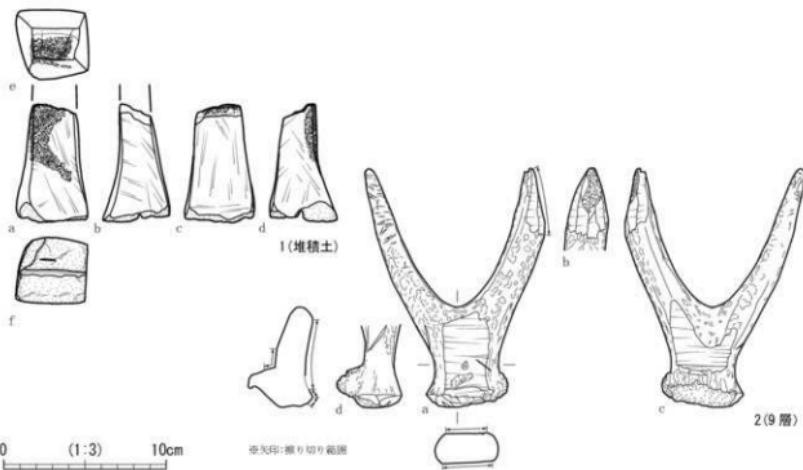
遺構名	調査区	グリッド	平面图	規模(cm)		層位	土色	土性	備考	重複	
				長幅×短幅	深さ						
SE2	B区	H-8	不整形	235×203	334	1	10YR2/3	暗褐色	シルト質粘土	10YR5.6 黄褐色シルトブロック・炭化物鉱・燒土粒・マンガニン鉱・オーライト質粘土ブロック・炭化物鉱・マンガン鉱・焼土粒を含む。	SD3を切る。
						2	10YR2/3	黒褐色	粘土質シルト	10YR5.4(2.5) 黄褐色粘土ブロック・炭化物鉱・マンガニン鉱・焼土粒を含む。グライ化。	
						3	2.5Y3/1	黒褐色	シルト質粘土	2.5Y4/1 稀褐色土質シルトを含む。グライ化。	
						4	5Y3/1	オリーブ黒色	粘土	7.5GY4/1 稀褐色土質シルトを含む。グライ化。	
						5	7.5Y2/1	黒色	粘土	7.5GY4/1 稀褐色土質シルトを含む。グライ化。	
						6	5Y2/2	オリーブ黒色	粘土	7.5GY4/1 稀褐色土質シルトを含む。グライ化。	
						7	5G3/1	暗オリーブ黒色	粘土	8層目: 2.5G5/1 オリーブ黒色粘土を含む。グライ化。	
						8	7.5Y3/1	オリーブ黒色	粘土	2.5GY3/1 オリーブ黒色粘土を含む。グライ化。	
						9	10Y2/1	黒色	粘土	7.5GY4/1 稀褐色土質シルトを含む。グライ化。	
						10	7.5Y2/1	黒色	粘土	7.5GY4/1 稀褐色土質シルトを含む。グライ化。	
						11	10GY4/1	暗緑灰色	粘土	8層目: 5G3/1 暗緑灰色粘土を含む。グライ化。	

第26図 SE2井戸跡

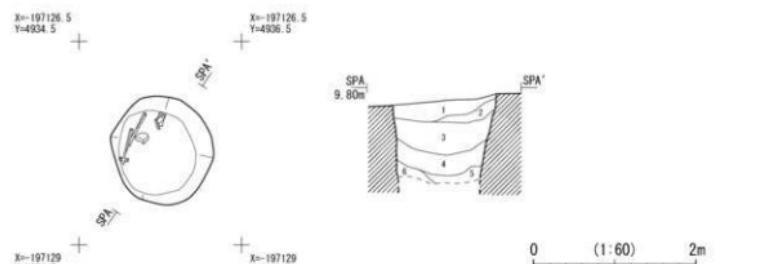


第27図 SE2井戸跡出土遺物(1)

国版 番号	登録 番号	調査区	出土地	層位	種別	形状	基盤	法量(cm)			凸面調整	凹面調整	備考	写真 回数
								長	幅	厚				
1	G-001	N区	SE2	堆積土	瓦	平瓦	(11.2)	(4.5)	(2.3)	磚材均分→分厚	布目板、横骨板、側面均分	40		
2	L-002	N区	SE2	9層	本製品断	他	9.9	9.9	0.8	全面加工	スギ	柱目	40	



第28図 SE2井戸跡出土遺物(2)



遺構名	調査区	グリッド	平面形	範囲(cm)		層位	土色	土性	備考	重箱
				長軸	短軸					
SE3	B区	H-8	不整形	130×130	(E24)	1	10YR3/3	暗褐色	シルト	SD31-32を含む。
						2	10YR3/1	黒褐色	シルト	
						3	10YR3/1	黒褐色	粘土	
						4	2.5Y4/1	黃褐色	粘土	
						5	5Y3/1	オリーブ黑色	粘土	SD31-32を含む。
						6	5Y3/1	オリーブ黑色	粘土	

第29図 SE3井戸跡

認められる。また、a-d-e面の一部には使用後に被熱したものと推測される黒変が認められる。石材は石英安山岩質凝灰岩である。同図-2は加工が施された右鹿角である。角座および角幹は擦り切りにより加工され、a面の角座と角幹の擦り切り痕は、一部海綿体にまで達している。角座の形状はa面が浅く窪み、c面がほぼ直角となる。角幹は縦長の面が複数形成され、先端は鋭角に尖る。また、a面の第1枝には、刃物のような工具によるものと推測される短い加工痕が認められる。

SE3 井戸跡(第29図)

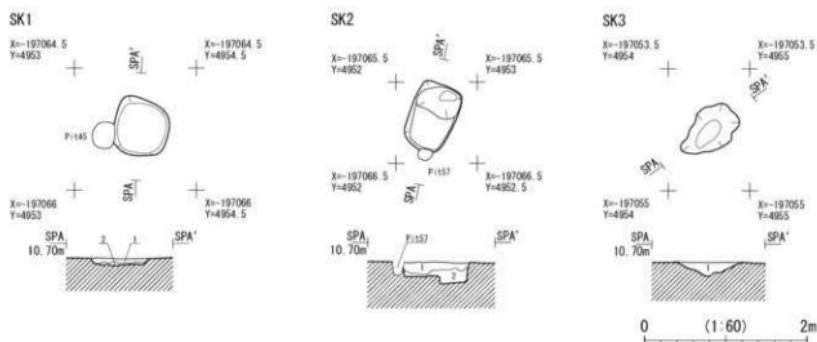
IV区南端部、H-8グリッドに位置し、SD31・32を切る。壁面崩落等を考慮して精査は上半部に留め、完掘には至っていない。規模は上端径130cm、検出面からの深さは調査した部分で124cmを測る。平面形は不整円形を呈し、断面形状はわずかに開口する円筒形を呈するものと推測される。精査した部分から井戸枠等は検出していない。

精査した部分の堆積土は、黒褐色ないしオリーブ黒色粘土を主体とする6層に分層された。いずれも炭化物および酸化鉄を含む。5・6層中より木片や礫等が出土したが、掲載した遺物はない。

(4) 土坑(第30図)

I区南側、H-4、I-3グリッドから3基検出された。このうち、SK1・2は約70cmの距離に近接する。いずれも性格を特定できるような構造や出土遺物は認められない。周囲からは同時期の所産と考えられる掘立柱建物跡や溝跡、多数のピットが位置するが、これらとの関連性についても不明である。

規模は長軸70～85cm×短軸50～70cm前後、検出面からの深さは10～50cm前後と様々である。平面形はSK1・2が楕丸方形、SK3が不整形を呈する。堆積土はいずれも黒褐色シルトを主体とし、炭化物を含む。また、いずれの土坑からも遺物は出土していない。これら3基の平断面図および観察表については、第30図にまとめて示した。

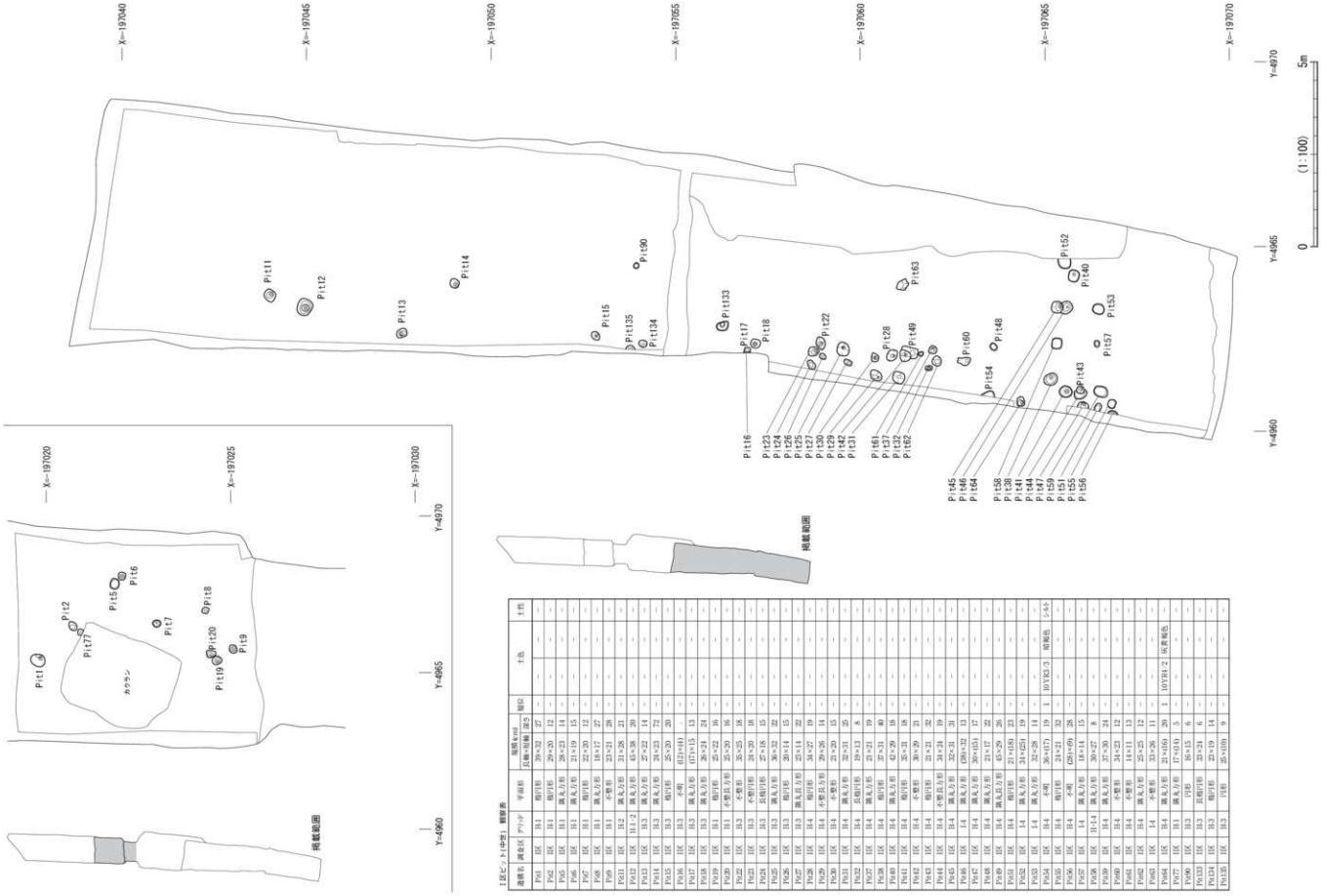


土坑(中世) 観察表

遺構名	調査区	グリッド	平面形	断面(4cm)			層位	土色	土性	備考	直従
				長軸	短軸	深さ					
SK1	II区	I-4	楕丸方形	68×67	11	1 10YR2/2 2 10YR2/2	1	10YR2/2 黒褐色	シルト	炭化物を少量、斑状にマンガン、酸化鉄を少量含む。 上部に酸化鉄集積層あり。	P145に切りらる。
							2	10YR2/2 黒褐色	シルト		
SK2	II区	H-4	楕丸方形	85×55	48	1 10YR2/3 2 10YR2/2	1	10YR2/3 暗褐色	シルト	マンガン粒、斑状に酸化鉄を少量含む。	P157に切りらる。
							2	10YR2/2 黒褐色	粘土質シルト	酸化物鉄を少量含む。	
SK3	II区	I-3	不整形	79×49	19	1 10YR2/2	1	10YR2/2 黒褐色	シルト	10YR4/3に黄褐色シルト、微量の炭化物鉄を含む。	なし

第30図 土坑(中世)

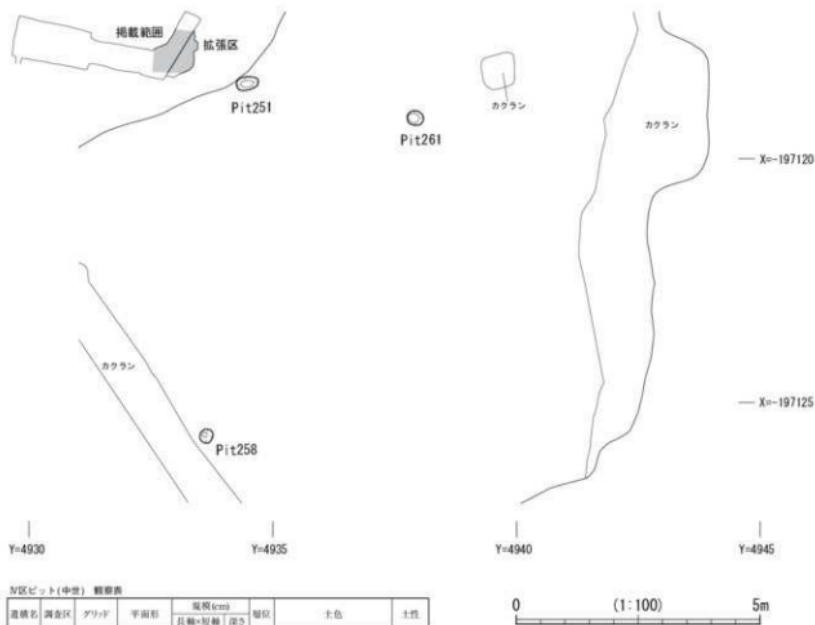
第31図 I区ヒツト(中世)



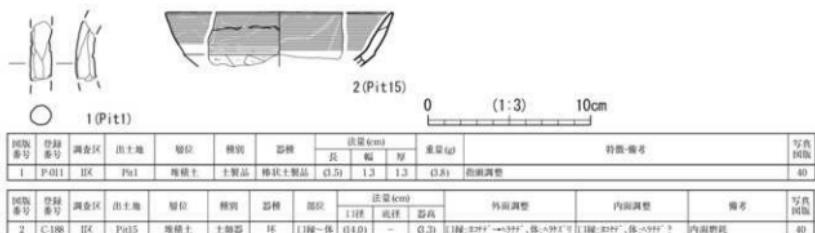
(5) ピット(第31～33図)

I区から59基、IV区から3基、計62基のピットが検出された。これらピット群は、検出面や他遺構との重複関係から、今次調査において検出された当該期の遺構群の中でも最も新しい段階に属するものと考えられる。なお、各ピットの諸属性については、観察表にまとめて示した。

I区においては半数の30基に柱痕跡が認められたことから掘立柱建物跡や柱列の存在も想定されたが、明確に



第32図 IV区ピット(中世)



第33図 ピット(中世)出土遺物

組めるようなものの特定には至らなかった。しかしながら、I区から検出されたピット群は南北に長い調査区の西半部の中でもSB3が構築されている南側に分布が集中すること、I区の約15m西側に設定された第2次調査に伴う確認調査4・6トレンチ(第2・10図)からは他の遺構を切る状況で複数のピットが検出されていることを併せると、調査区西側には多くのピット、或いは掘立柱建物跡や柱列等が存在する可能性が高いものと考えられる。IV区から検出したものについては、いずれも柱痕跡が確認されず、不明な点が多い。

出土遺物として、Pit1堆積土から出土した棒状土製品(第33図-1)、Pit15堆積土から出土した土師器壺(同図-2)を各1点掲載した。土師器壺は口縁部と体部の境界に段を持ち、口縁部が内湾する器形を呈し、口縁部上半の器厚が薄くなる。外面口縁部下端はヘラナデにて整形される。

第3節 古代～中世の遺構と遺物(第34～46図)

本節では、基本層序第IV層上面で検出した遺構群のうち、堅穴住居跡などの古代下面検出遺構を切るものや、明確に古代に帰属しない遺構および遺構内出土遺物について記載する。検出された遺構は、溝跡16条、土坑4基、ピット183基である。これらの遺構が検出されていることから、当該期において何らかの人的活動が存在したこととは明らかであるものの、調査区が狭長であることや遺構の性格を特定できる出土遺物も認められないことから、それが何に起因するものなのかは判然としない。

以下、当該期に帰属すると考えられる遺構と遺構内出土遺物について遺構毎に記載する。

(1) 溝跡(第37～39図)

I区から7条、II区から2条、IV区から7条、計16条の溝跡が検出された。これらの規模は幅・深さ共に様々で、殆どが調査区外に延びるものや搅乱の影響を受けており、全体が検出されたものは少ない。軸方向は、南北方向に延びるもの、東西方向に延びるもの、北東～南西方向に延びるのに3大別され、各調査区で2～4条が並走する傾向が窺われるものの、それらの関連性については不明である。また、溝跡同士の重複関係や当該期の所産と考えられるピットを切るものと切られるものが認められることから、ピットを介在して少なくとも二時期に細分されるものの、それらの規模や方向等に大きな特徴は見出し難い。

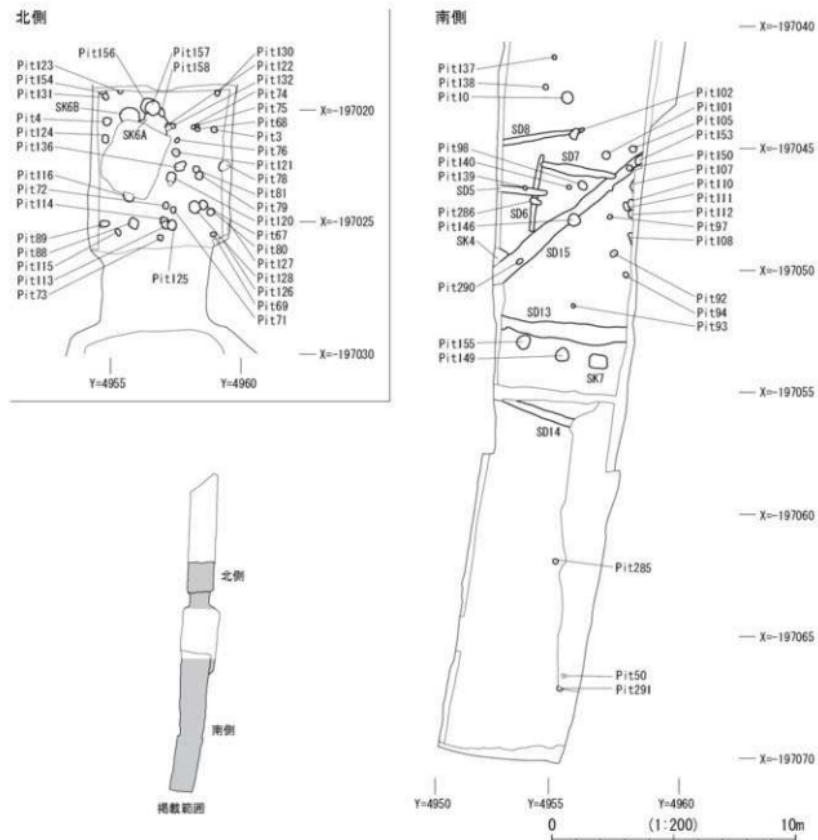
本項では主な溝跡について個別に記載し、その他については諸属性を観察表にまとめて示した。なお、IV区検出のSD20A～Cおよび古代の溝跡としたSD20Dの枝番号については、整理作業の過程で便宜的に付したものであり、遺構としての関連性を示すものではない。また、いずれの溝跡についても、掲載した遺物はない。

SD6 溝跡(第37図)

I区南側、H-3グリッドに位置し、SD5・7に切られる。検出された規模は、長さ3.13m、上端幅20cm前後、下端幅10cm前後、検出面からの深さは7cmを測り、N・7°・Eの方向に直線的に延びる。断面形状は逆台形を呈する。遺物は出土していない。

SD13 溝跡(第37図)

I区南半部、H-I・3グリッドに位置し、SI4・5・11、SB1、Pit283を切る。検出された規模は長さ5.12m、上端幅39～78cm、下端幅23～45cm、検出面からの深さ5～19cmを測り、N・85°・Wの方向に直線的に延びて両側は調査区外にかかる。断面形状は逆台形を呈する。堆積土は暗褐色シルトを主体とする2層に分層された。遺物は出土していない。



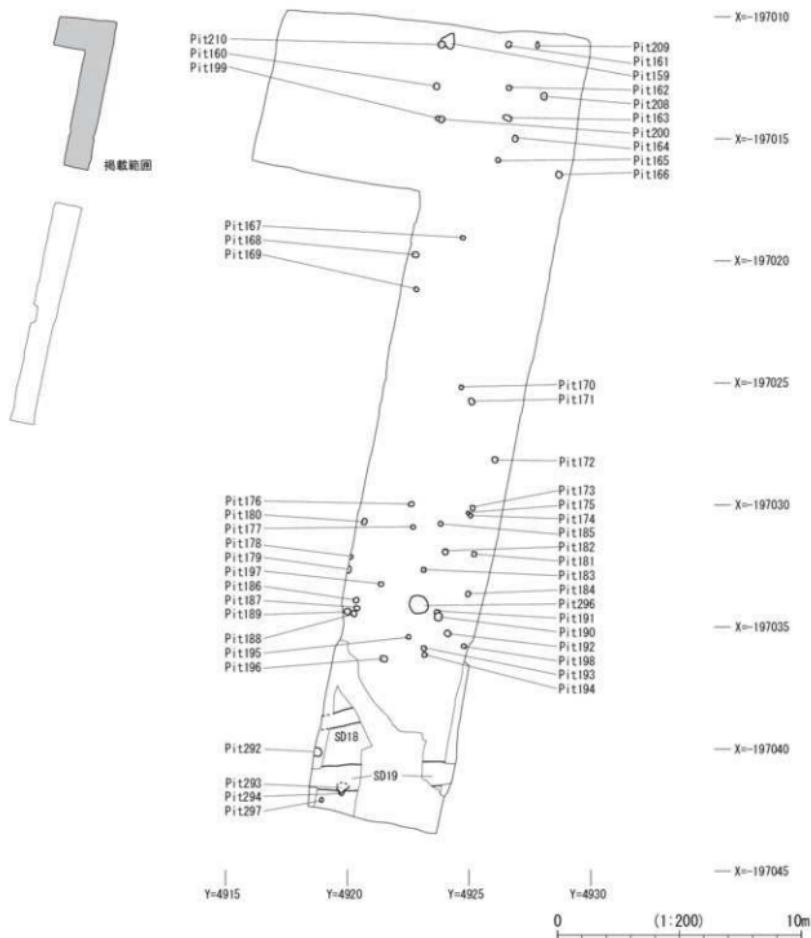
第34図 I区遺構配置図(古代～中世)

SD15 溝跡(第37図)

I区中央、H・3、I・2・3グリッドに位置する。SI5、SB1、SK5、Pit142～145を切り、SD7、Pit146・150・153・290に切られる。検出された規模は長さ8.0m、上端幅35～76cm、下端幅10～27cm、検出面からの深さ15～52cmを測り、N・52°・Eの方向に直線的に延びて両側は調査区外にかかる。断面形状はU字状を呈する。堆積土は黒褐色ないし暗褐色シルトを主体とする3層に分層された。1・2層は黄褐色シルトブロックを含む。また、底面には酸化鉄の集積層が確認された。遺物は出土していない。

SD18 溝跡(第38図)

II区北半部南端、F・3グリッドに位置する。他遺構との重複は認められない。約1.5m南には、ほぼ同一方向に

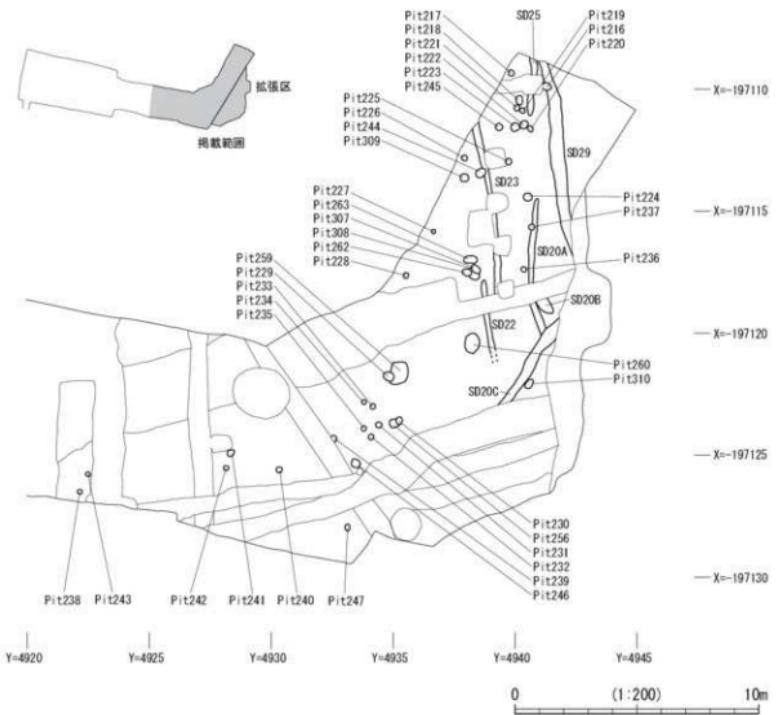


第35図 II区遺構配置図(古代～中世)

延びるSD19が位置する。検出された規模は、長さ124cm、上端幅約60cm、下端幅約40cm、検出面からの深さは最大21cmを測る。N-75°-Eの方向に直線的に延び、東側末端は擾乱によって失われ、西側は調査区外にかかる。断面形状はU字状を呈する。堆積土は黒褐色シルトを主体とする2層に分層された。遺物は出土していない。

SD19 溝跡(第38図)

II区北半部南端、F-3グリッドに位置する。SI26・27、Pit292を切る。約1.5m北には、ほぼ同一方向に延びる

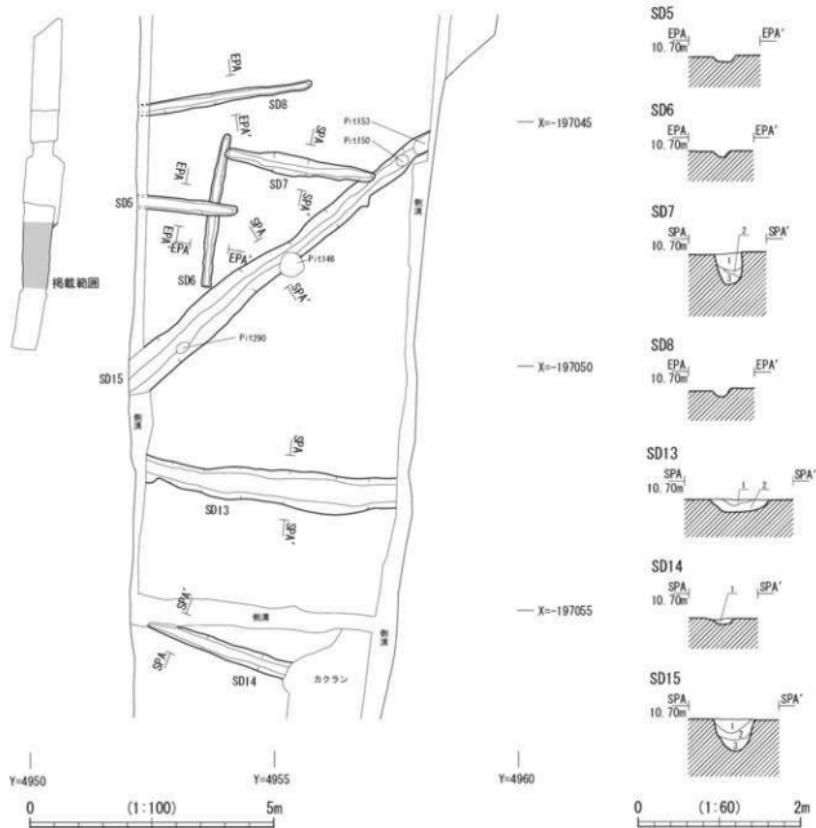


第36図 IV区遺構配置図(古代～中世)

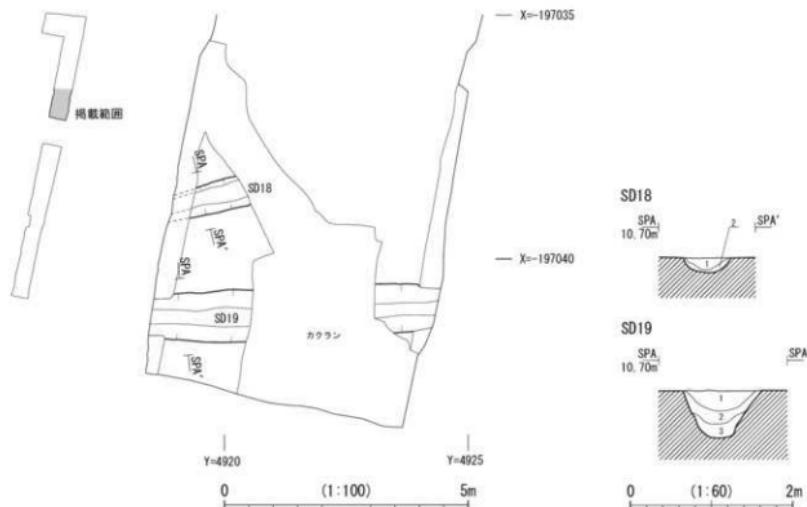
SD18が位置する。本溝跡は、今次調査で検出された当該期の溝跡の中でも、比較的大規模なものと推測される。検出された規模は、長さ5.76m、上端幅74～107cm、下端幅25～40cm、検出面からの深さは最大69cmを測り、N・88°・Eの方向に直線的に延び、東西両側は調査区外にかかる。断面形状は逆台形を呈する。堆積土は黒褐色シルトを主体とする3層に分層された。遺物は出土していない。

SD20A 溝跡(第39図)

IV区東側、H-7・8グリッドに位置する。SD20C・26、Pit237に切られ、東側にはSD20Bが隣接するように位置する。検出された規模は検出長5.48m、上端幅16～32cm、下端幅8～14cm、深さは最大12cmを測る。SD26に切られる箇所を境に鈍角に屈曲し、北側がN・4°・E、南側がN・20°・Wの方向にそれぞれ直線的に延び、南側末端はSD20Cに切られる。断面形状は逆台形を呈する。遺物は出土していない。



第37図 I区溝跡(古代～中世)



II区溝跡(古代～中世) 簡略図

遺構名	調査区	グリッド	方向	規模(cm)			層位	土色	土性	備考	重複
				検出長	上端幅	下端幅					
SD18	II区	F3	N 75° E	(324)	60~64	36~39	21	1 10YR2/2 2 10YR2/2	黒褐色 シルト	10YR4-6褐色シルトを含む。	SD26-27, Pit292を切る。
SD19	II区	F3	N 88° E	(576)	74~107	25~40	69	1 10YR3/1 2 10YR2/2 3 10YR2/2	黒褐色 シルト シルト	グライ化。 10YR4-6褐色シルトを含む。	

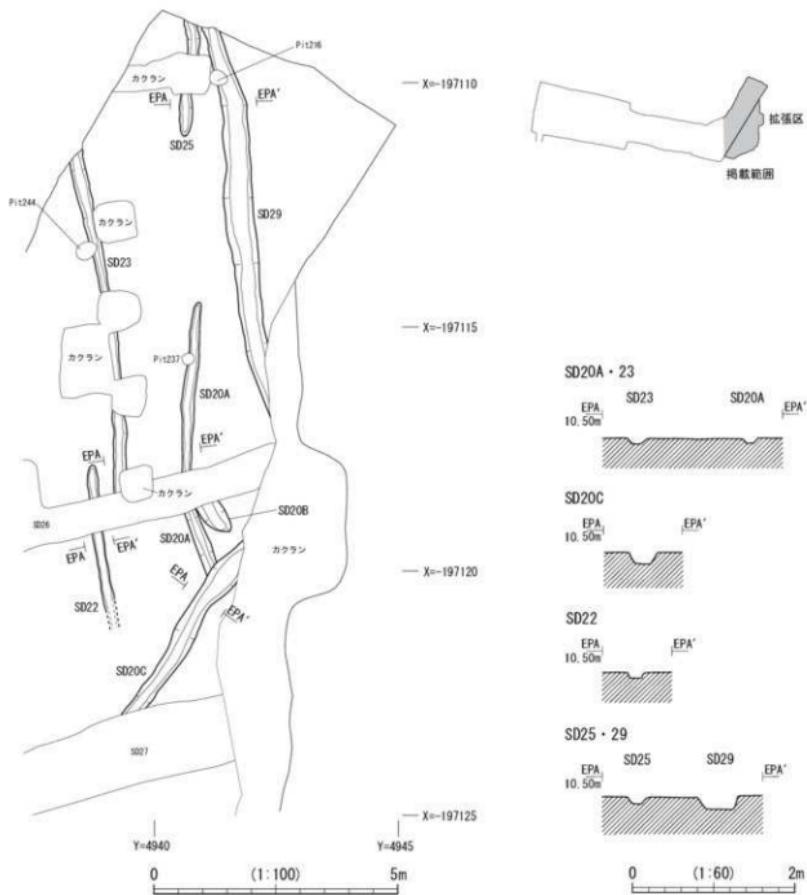
第38図 II区溝跡(古代～中世)

SD23 溝跡(第39図)

IV区東側、H-I-7グリッドに位置する。SD21・24・28を切り、SD26に切られる。また、約30cm西にはSD22、1m東にはSD20A、約2.5m東にはSD25・29が、それぞれほぼ同一方向に延びる。検出された規模は、長さ7.00m、上端幅18~30cm、下端幅8~20cm、検出面からの深さは最大14cmを測る。平面形状は緩やかな弧状を呈し、北半部はN-13°-Wの方向に、南半部はほぼ南北方向に延びる。北側は調査区外にかかり、南側末端はSD26に切られる。断面形状は逆台形を呈する。遺物は出土していない。

SD29 溝跡(第39図)

IV区東側、H-I-7グリッドに位置する。SD28を切り、Pit216に切られる。また、西側にはSD25が近接し、南半部の約1m西にはSD20Aがほぼ同一方向に延びる。検出された規模は、長さ8.0m、上端幅30~60cm、下端幅13~37cm、深さは最大23cmを測り、N-5~20°-Wの方向に緩く蛇行する。南側は搅乱によって失われ、北側は調査区外にかかる。断面形状は逆台形を呈する。堆積土中より土師器片が少量出土しているが、掲載した遺物は無い。



遺構名	調査区	グリッド	方向	規模(cm)				層位	土色	土性	備考	重複
				横出長	上端幅	下端幅	深さ					
SD20A	N区	H-7-8	N4°-E N20°-W (548)	16 - 32	8 - 14	12	-	-	-	-	スレベーションのみ。 Pit227に切る。	SD20C-26, Pit227に切 る。
SD20B	N区	H-17-8	N30°-W (70)	45 - 47	20 - 22	10	-	-	-	-	断面同じ。	SD20Bに切られる。
SD20C	N区	H-18	N30° - 48° E (419)	36 - 57	13 - 36	11	-	-	-	-	スレベーションのみ。	SD20Aを切る。
SD22	N区	H-7-8	N7°-W (003)	18 - 25	10 - 16	7	-	-	-	-	スレベーションのみ。	SD20に切られる。
SD23	N区	H-7	N4°-0 - 13°-W (000)	18 - 30	8 - 20	4 - 14	-	-	-	-	スレベーションのみ。	SD21-24を切る。 SD20に切られる。
SD25	N区	H-7	N4°-E (227)	21 - 27	10 - 13	15	-	-	-	-	スレベーションのみ。	SD28を切る。
SD29	N区	H-17	N-5 - 20°-W (800)	30 - 60	13 - 37	23	-	-	-	-	スレベーションのみ。	Pit216に切 る。

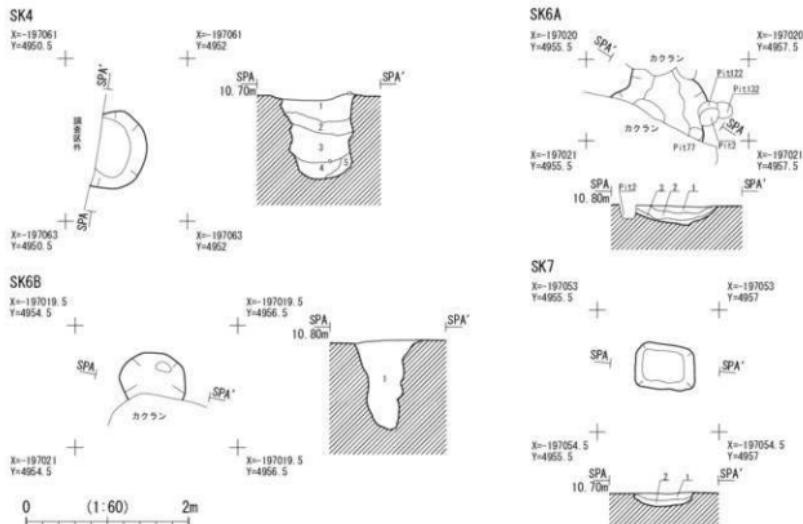
第39図 IV区溝跡(古代～中世)

(2) 土坑(第40・41図)

I区北側から2基、南側から2基、計4基の土坑が検出された。平面および断面形状・規模共に様々で、SK6Bを除く3基の堆積土は、いずれも黄褐色シルトブロックを含む黒褐色ないし暗褐色シルトを主体とする。SK6Bは堆積土が浅黄橙色粘土の単層である。

なお、近接して位置するSK6A・6Bのアルファベットは整理作業の過程で便宜的に付したものであり、遺構としての関連性を示すものではない。

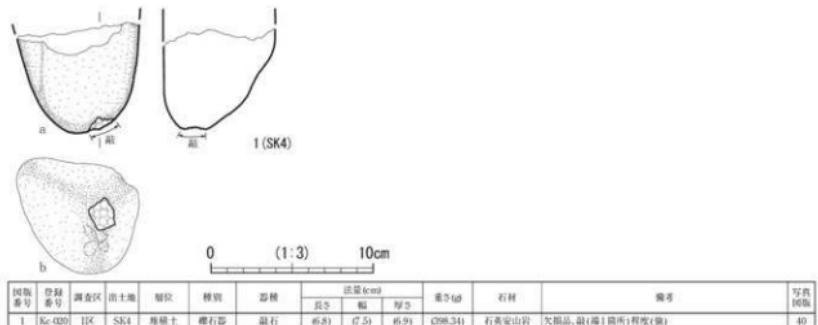
出土遺物として、SK4堆積土から出土した敲石1点を掲載した(第41図)。端部が残存するのみで大部分を欠損するが、b面中央には角の形状を変える程の強い敲打痕が認められる。石材は石英安山岩である。



土坑(古代～中世) 概要表

遺構名	測量区	グリッド	平面形	規模(概算)		層位	土色	土性	備考	重版
				長軸×短軸	深さ					
SK4	IIK	I-4	不規則形	95×69	90	1	10YR3-3	暗褐色	シルト	SDを認める。
						2	10YR2-3	黒褐色	シルト	
						3	10YR3-3	暗褐色	シルト	
						4	10YR3-2	黒褐色	粘土質シルト	
						5	10YR2-2	黒褐色	シルト質粘土	
SK6A	IIK	II-1	不整形	116×62	36	1	10YR3-2	黒褐色	シルト	Pit156-157-158に認られる。
						2	10YR3-3	暗褐色	粘土質シルト	
						3	10YR3-4	暗褐色	シルト質粘土	
SK6B	IIK	II-1	円形	76×60	115	1	2.5Y7-3	浅黄色	粘土	SD11-12を認む。
						1	10YR3-2	黒褐色	シルト	
SK7	IIK	I-3	頭丸方形	72×35	18	2	10YR3-3	暗褐色	粘土質シルト	
						1	10YR3-2	黒褐色	シルト	

第40図 土坑(古代～中世)



第41図 土坑(古代～中世)出土遺物

(3) ピット(第42～46図)

I区から69基、II区から50基、IV区から48基、VI区から16基、計183基のピットが検出された。柱痕跡が認められたものは、I区では22基、II区では11基、IV区では6基を数え、なかにはPit149(I区南半部中央)のように単体の柱穴として捉え難いものも含まれる。

柱痕跡の有無を問わずに各調査区全体での位置関係をみると、I区では中央部北側、II区では北半部北側および南側、IV区では東半部北側にある程度のまとまりが看取され、IV区においては当該箇所に柱痕跡を持つものが集中する状況が認められる。これらの中には掘立柱建物跡や柱列として明確に組めるものは確認されなかったものの、II区北端部に位置するPit160・162・163・166・199もしくは200・210については、ほぼ南北方向に軸を持つ建物跡として組める可能性が高い。

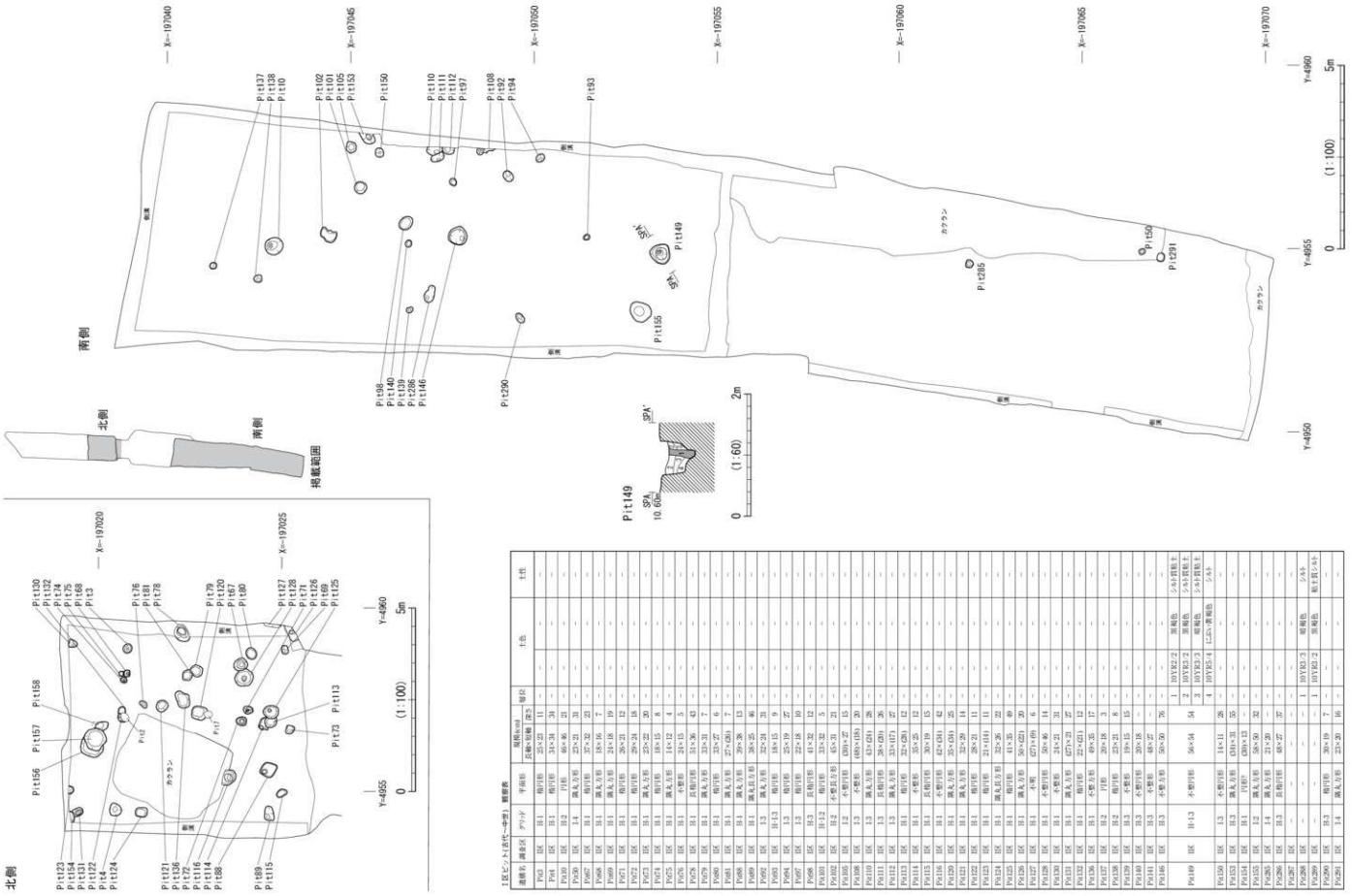
平面形状は円形や隅丸方形を基調とするものが大部分で、これに不整形なものが少数加わる。規模は上端径20～30cm、検出面からの深さ20cm前後を測るピットが多く見受けられる。

また、各調査区はいずれも狭長なものであるが、後世の重複造構や擾乱等の影響が大きいこと、確認調査においても当該期の所産と考えられるピットが検出されていること、また本遺跡の南西に隣接する長町駅東遺跡における第1～4次調査(仙台市教育委員会2007・2008a・2009a)では合計面積約12,000m²の範囲内からほぼ同時期の所産と考えられるピット群が3,250基程検出されていることを併せると、各調査区内に多数のピット、或いは掘立柱建物跡や柱列が存在したものと考えられ、調査区外においても同様の可能性が指摘される。

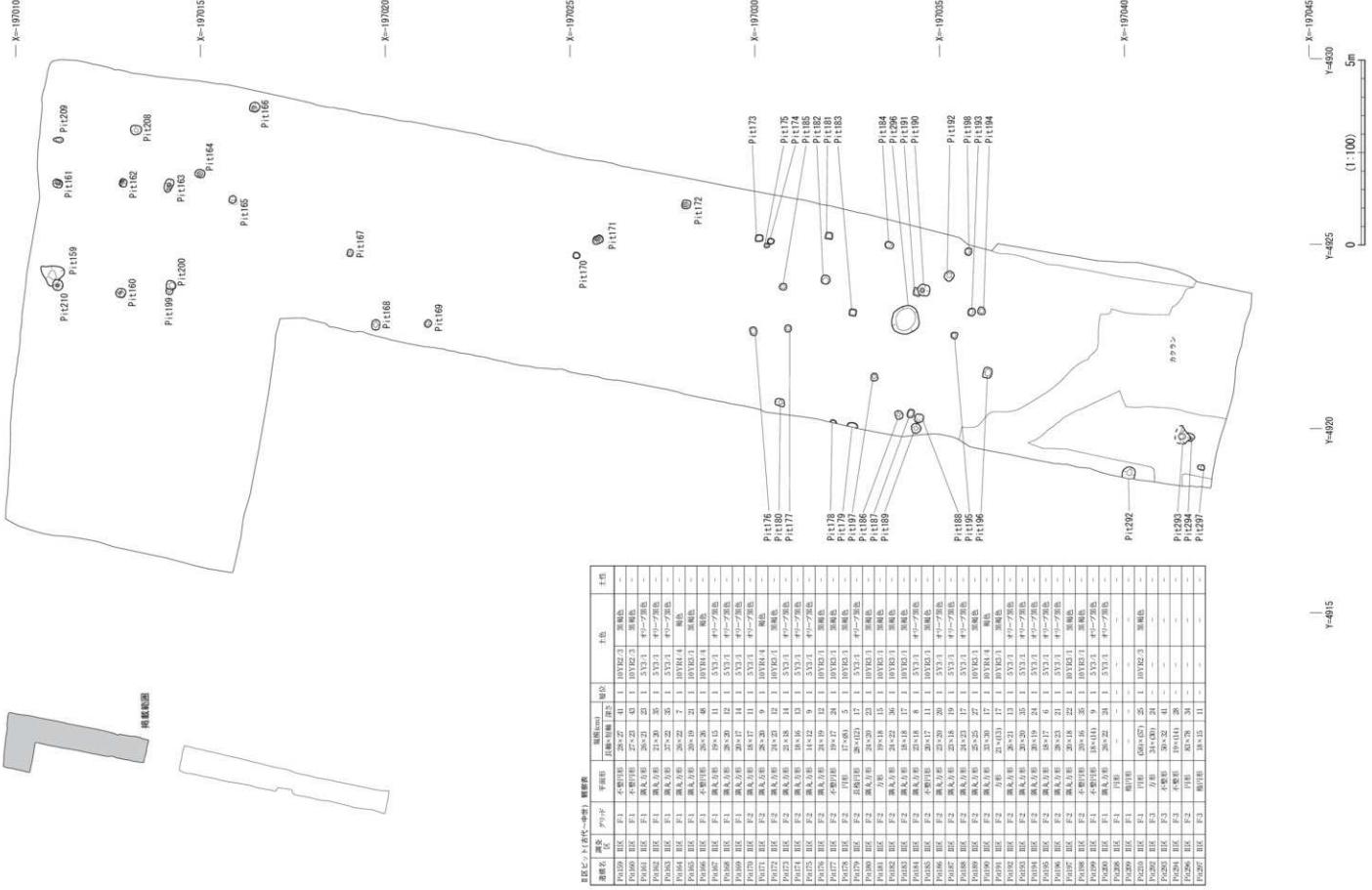
出土遺物として、Pit193堆積土から出土した須恵器壺1点を掲載した(第42図)。器形は外面の口縁部と体部の境界に段を持ち、口縁部は短く直線的に外傾する。口唇部は僅かに外面側に向かって低くなる面を持つ。



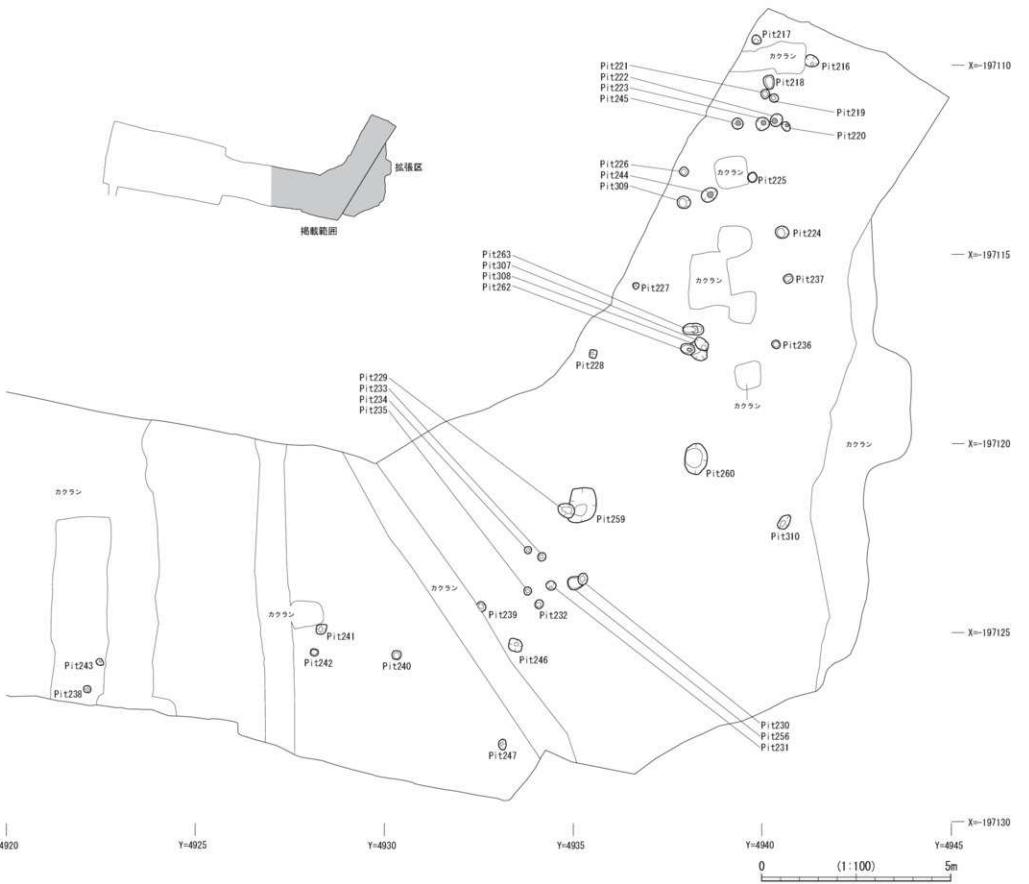
第42図 ピット(古代～中世)出土遺物



第43図 I区ピット(古代～中世)

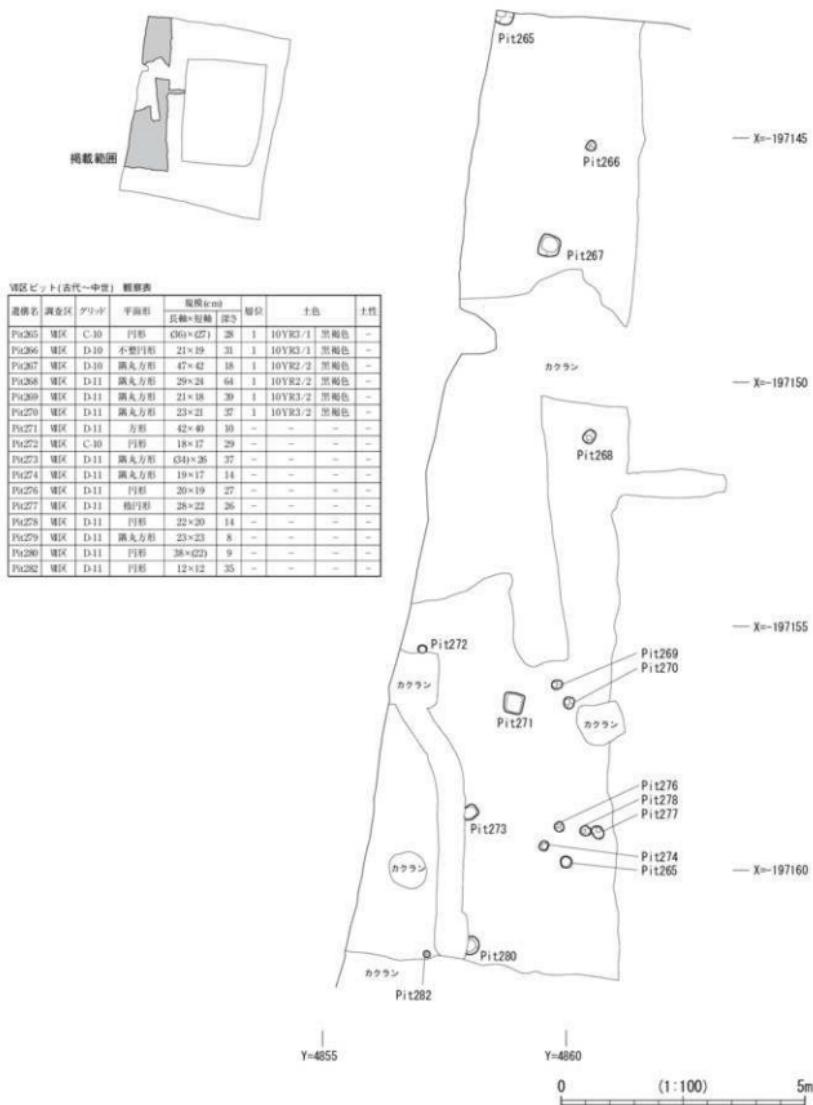


第44図 II区ピット(古代～中世)



第45図 IV区ピット(古代～中世)

IV区ピット(古代～中世) 調査表							
遺構名	調査区分	アリード	平面形	規格(cm)	基盤	土色	土性
Pit206	W区	H7	楕円形	37×29	-	1	10YR8-1 黒褐色
Pit217	W区	H7	楕円形	25×24	14	1	10YR8-2 黑褐色
Pit218	W区	H7	楕円形	37×27	7	1	10YR8-2 黑褐色
Pit219	W区	H7	円形	23×21	10	1	10YR8-2 黑褐色
Pit220	W区	H7	楕円形	26×20	-	1	10YR8-2 黑褐色
Pit221	W区	H7	楕円形	25×23	9	1	10YR8-2 黑褐色
Pit222	W区	H7	楕円形	34×30	-	1	10YR8-2 黑褐色
Pit223	W区	H7	楕円形	35×34	-	1	10YR8-2 黑褐色
Pit224	W区	H7	円形	35×32	19	1	10YR8-2 黑褐色
Pit225	W区	H7	円形	27×24	5	1	10YR8-2 黑褐色
Pit226	W区	H7	楕丸方形容	24×22	-	1	10YR8-2 黑褐色
Pit227	W区	H7	不整円形	17×16	39	1	10YR8-2 黑褐色
Pit228	W区	H7	楕丸方形容	21×19	35	1	10YR8-2 黑褐色
Pit229	W区	H8	楕円形	45×36	19	1	10YR8-2 黑褐色
Pit230	W区	H8	楕円形	32×28	25	1	10YR8-2 黑褐色
Pit231	W区	H8	円形	26×24	5	1	10YR8-2 黑褐色
Pit232	W区	H8	円形	23×21	18	1	10YR8-2 黑褐色
Pit233	W区	H8	円形	22×21	33	1	10YR8-2 黑褐色
Pit234	W区	H8	円形	18×18	23	1	10YR8-2 黑褐色
Pit235	W区	H8	円形	21×19	11	1	10YR8-2 黑褐色
Pit236	W区	H8	円形	22×20	47	1	10YR8-2 黑褐色
Pit237	W区	H8	円形	23×20	2	1	10YR8-2 黑褐色
Pit238	W区	G8	楕丸方形容	18×18	14	1	10YR8-2 黑褐色
Pit239	W区	H8	円形	25×27	11	1	10YR8-2 黑褐色
Pit240	W区	H8	楕丸方形容	23×24	18	1	10YR8-2 黑褐色
Pit241	W区	H8	円形	26×25	28	1	10YR8-2 黑褐色
Pit242	W区	H8	円形	21×19	9	1	10YR8-2 黑褐色
Pit243	W区	H8	不整円形	18×17	16	1	10YR8-2 黑褐色
Pit244	W区	H8	楕円形	49×36	-	1	10YR8-2 黑褐色
Pit245	W区	H8	楕円形	27×25	2	1	10YR8-2 黑褐色
Pit246	W区	H8	楕丸方形容	34×32	29	-	-
Pit247	W区	H8	不整円形	28×20	36	-	-
Pit248	W区	H8	円形	-	-	1	10YR8-2 黑褐色
Pit249	W区	H8	円形	-	-	1	10YR8-2 黑褐色
Pit250	W区	H8	円形	-	-	1	10YR8-2 黑褐色
Pit251	W区	H8	円形	-	-	1	10YR8-2 黑褐色
Pit252	W区	H8	円形	-	-	1	10YR8-2 黑褐色
Pit253	W区	H8	円形	-	-	1	10YR8-2 黑褐色
Pit254	W区	H8	円形	-	-	1	10YR8-2 黑褐色
Pit255	W区	H8	円形	-	-	1	10YR8-2 黑褐色
Pit256	W区	H8	楕円形	49×34	17	1	10YR8-2 黑褐色
Pit257	W区	H8	円形	-	-	1	10YR8-2 黑褐色
Pit258	W区	H8	楕丸方形容	38×30	15	1	10YR8-2 黑褐色
Pit259	W区	H8	楕丸方形容	81×56	26	1	10YR8-2 黑褐色
Pit260	W区	H7	楕円形	38×27	30	1	10YR8-2 黑褐色
Pit261	W区	H7	円形	54×31	27	1	10YR8-2 黑褐色
Pit262	W区	H7	円形	49×34	1	1	10YR8-2 黑褐色
Pit263	W区	H7	楕円形	35×32	43	-	-
Pit264	W区	H7	楕円形	43×36	24	-	-
Pit265	W区	H7	円形	41×28	-	-	-
Pit266	W区	H7	楕丸方形容	55×38	48	-	-



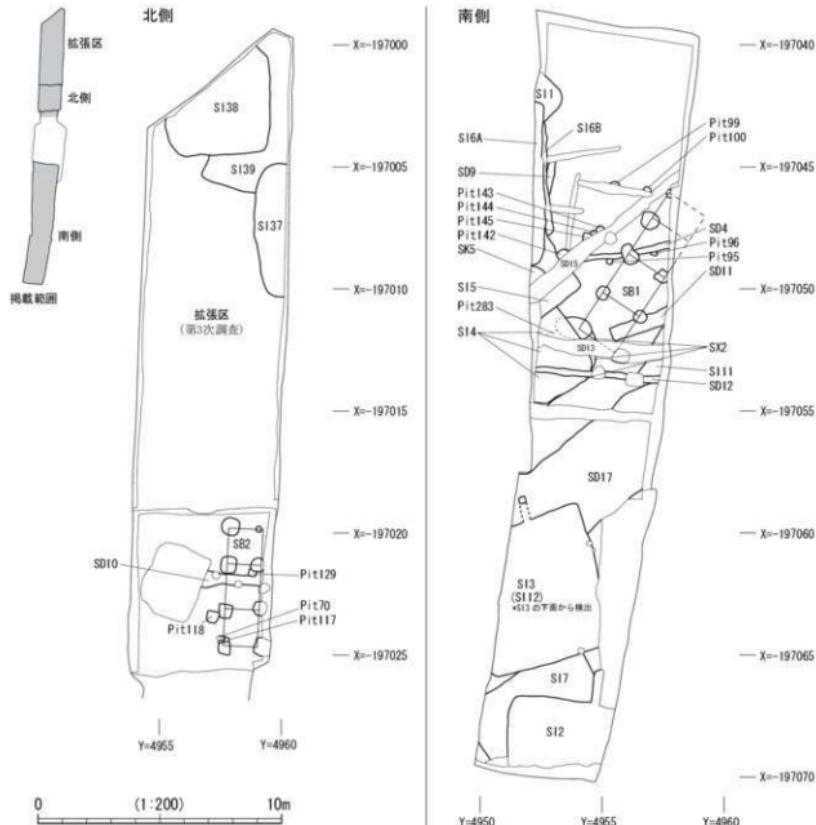
第46図 VII区ピット(古代～中世)

第4節 古代の遺構と遺物(第47~169図)

本節では、基本層IV層上面で検出された遺構のうち、遺構の性格や重複関係、遺物の年代等から明確に古代に帰属すると考えられたものについて記載する。検出された遺構は、堅穴住居跡38軒(堅穴遺構3基を含む)、掘立柱建物跡3棟、溝跡26条、区画溝跡2条、土坑5基、ピット46基、性格不明遺構2基である。

特筆される事項として、IV区から検出されたSD31は郡山II期官衙外郭大溝から50m西に位置し、その位置関係や規模から郡山II期官衙外溝に相当すると考えられ、また郡山II期官衙外溝としては最初の検出例になる。

また、I区とII区からは堅穴住居跡が多数検出されており、I区は郡山II期官衙外郭大溝と外溝(本書所収SD31)との間に位置し、II区は外溝の西側に近接する。これらの堅穴住居跡や掘立柱建物跡の軸方位等には官衙の影響を感じさせるものがあり、本遺跡北東部(II期官衙外溝(SD31)北西域)における、I期官衙が造営される前段階からII期官衙造営期の土地利用変遷を検討する上で重要な資料といえる。

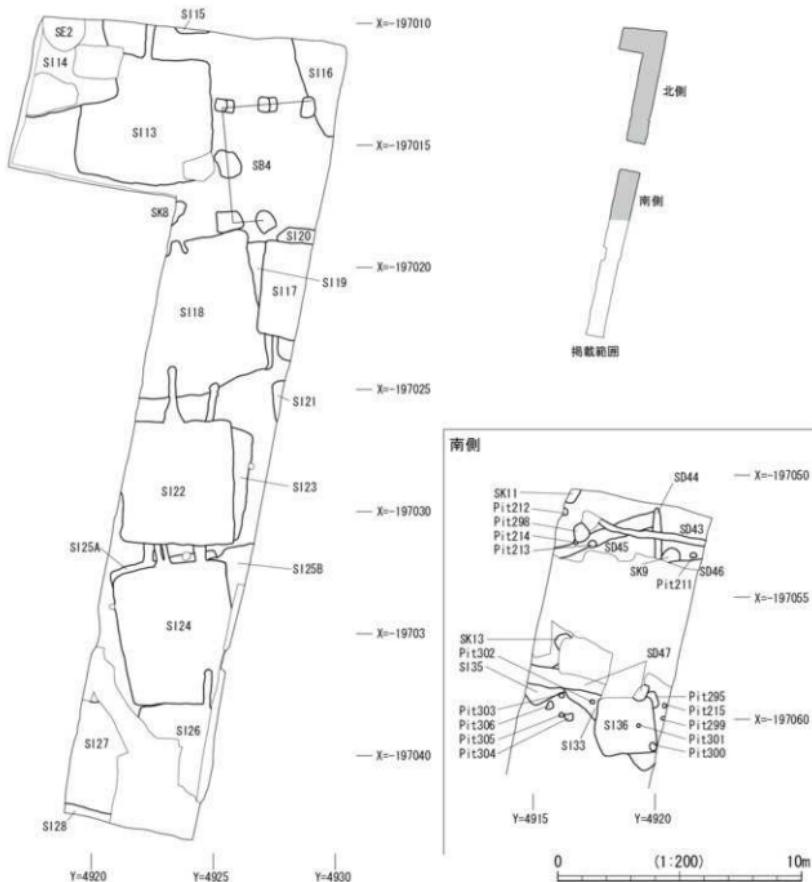


第47図 I区遺構配置図(古代)

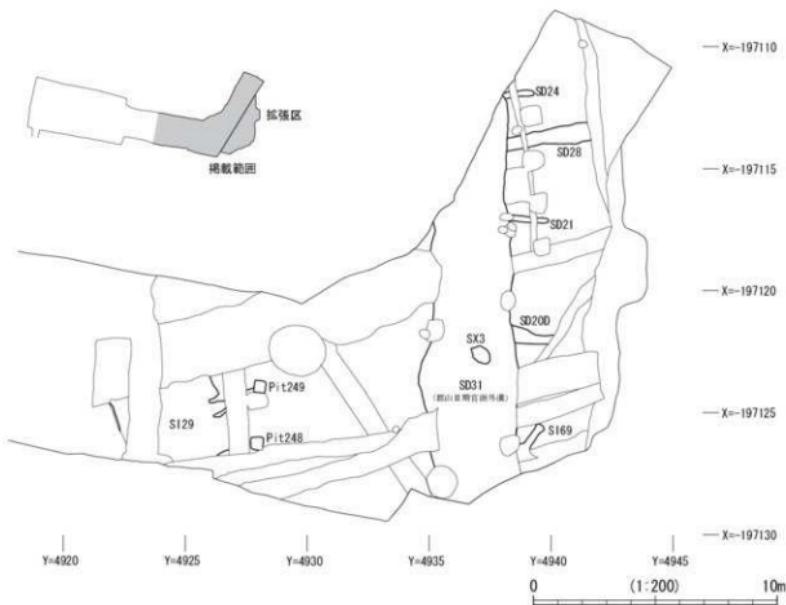
遺物は7世紀半頃から8世紀前半の所産と考えられる土師器および須恵器を主体とし、遺構内の共伴関係等から同時期の所産と考えられる土製品や金属製品、石器・石製品等が出土した。土器をはじめとする遺物の年代観や特徴は、本遺跡の東側に隣接し、多賀城以前の初期陸奥国府と考えられる郡山遺跡(仙台市教委2005ほか)、同じく本遺跡の南西に隣接し、溝や材木列で区画された大規模集落跡である長町駅東遺跡(同2007ほか)のそれとはほぼ合致するものである。

以下、各遺構や出土遺物について、その種別毎に記載する。なお、遺構堆積土からは少数ではあるが、弥生時代以前に帰属すると考えられる遺物が出土している。これらについては、本章第5節にてまとめて記載している。

北側



第48図 II区遺構配置図(古代)



第49図 IV区遺構配置図(古代)

(1) 壺穴住居跡(第51~134図)

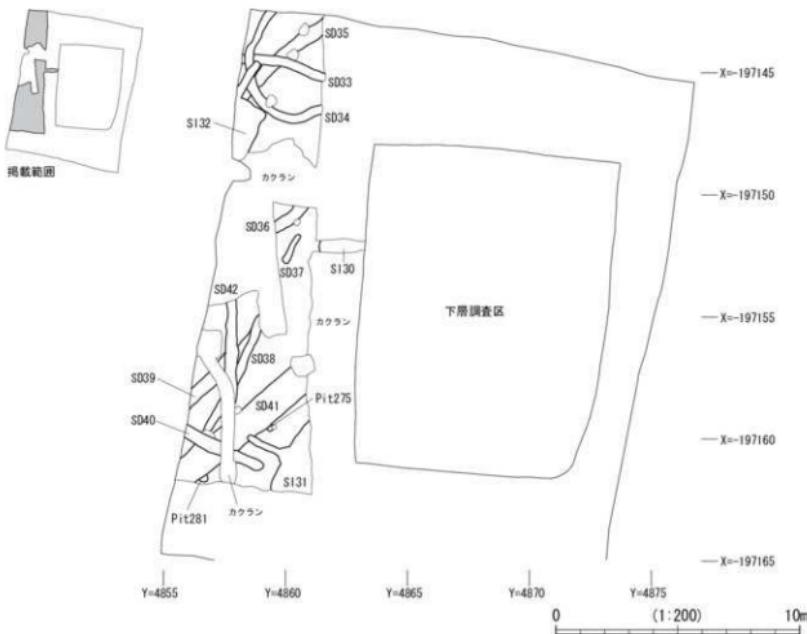
今次調査では、総数38軒(建て替えされたものや壺穴造構3基を含む)の壺穴住居跡が検出された。I区南半部およびII区北半部に分布が集中し、重複関係からは最大4期、遺跡全体では建て替えも含めると9期にわたる変遷が認められた。

I区およびII区は調査区が狭長であることや搅乱の影響などから、壺穴住居跡の全体が検出されたものは少ないので、平面形状が判るものについては方形ないし隅丸方形を呈するものが大半を占め、これに隅丸長方形のものが少数認められる。上部構造は4本の主柱穴を持つものが大半を占めるほか、壁柱穴を持つものが1軒検出された。

カマドは今次調査で検出された壺穴住居跡の約4割に相当する15軒から計17基が検出された。北壁の中央部(中央部と推定されるものを含む)に設けられるものが殆どで、東壁に設けられるものと西壁に設けられるものほか、1軒に3基(内2基は造り替え前後)設けられたものが各1例検出された。

袖部は壺穴住居跡構築時に掘り残された地山を直接使用しているものが1基検出されたほか、總て盛土によって構築される。また、袖部には砾石器や土師器が芯材として使用されているものが存在し、それらの中には両袖の高さを意図的に揃えられたと考えられるものが認められる。燃焼部は壁面から張り出すものが1基、奥壁周辺のみ張り出すものが1基認められ、その他は全て壁面の内側に構築されている。煙道部は、底面が平坦もしくは煙出し部に向かって緩やかに下るものが殆どで、煙出し部はピット状に落ち込むものが大半を占める。

カマド以外の付属施設については、柱穴や周溝のほか、間仕切り溝と考えられるものや、カマドに関連すると考えられるピット・土坑等が認められる。また、掘り方や貼床を持たないものが多いのも、今次調査において検出さ



第50図 VII区遺構配置図(古代)

れた竪穴住居跡の特徴といえる。

以下、今次調査で検出された竪穴住居跡について個別に記載する。なお、文・図中において、床面から検出した土坑・ピットには、それぞれ「SK」・「P」の略称を付した。これらの略称は調査段階で付したものと踏ましているが、土坑とピットの區別に明確な基準ではなく、比較的規模の大きいものを土坑、柱痕跡を有するものや小穴状のものをピットとしている。また、重複関係にある遺構については原則として古代の遺構のみを記載したが、一部に後世の遺構についても記載したものがある。

SI1 竪穴住居跡(第51図)

[位置・確認] I区南半部北側、H-2グリッドに位置する。東側コーナー周辺のみ約1/4が検出された。西側の大部分は調査区外にかかる。

[重複] SI6Aに切られる。

[規模・形態] 検出された範囲の規模は、南北160cm、東西140cmを測る。平面形状は隅丸方形を呈するものと考えられる。

[方向] 東壁基準でN-45°-Wである。

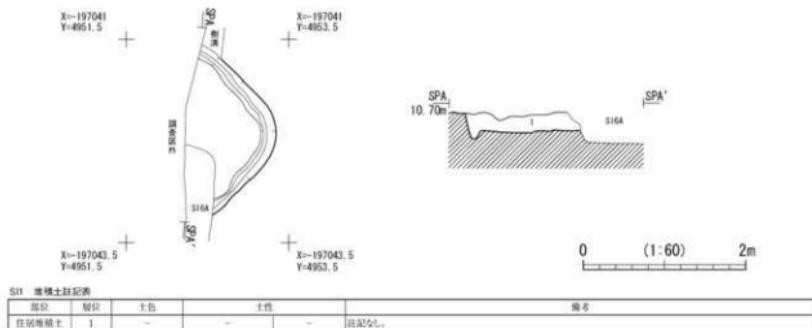
[堆積土] 堆積土は単層であるが、色調や土性等、詳細は不明である。

[壁面] 検出された範囲の壁面はいずれも直線的に外傾して立ち上がる。残存する壁高は最大22cmを測る。

[床面]わずかに起伏がみられるものの、概ね平坦である。掘り方を持たず、基本層IV層を床面としている。

[周溝]検出された範囲においては、壁面に沿って全周する。規模は幅8~22cm、深さ3~5cmを測り、断面形状はU字状を呈する。

[出土遺物]遺物は出土していない。



第51図 SI1 穫穴住居跡

SI2 穫穴住居跡(第52~55図)

[位置・確認] I区南端部、H-I-4グリッドに位置する。北西部約1/4が検出された。

[重複]SI7を切る。また、南側約1/2と東側約1/2は搅乱により失われている。

[規模・形態]検出された範囲の規模は、南北300cm、東西425cmを測る。平面形状は隅丸方形を呈するものと推測される。

[方向]カマド煙道部基準でN-6°-Eである。

[堆積土]26層に分層された。1~4層は住居堆積土である。暗褐色シルトを主体とし、すべて黄褐色シルト系のブロックを混入する。5~25層はカマド関連層位で、8·9層はカマド天井部崩落土、14~18層は煙道部天井崩落土、22~25層はカマド袖部構築土である。26層は周溝内堆積土である。

[壁面]検出された範囲の壁面は概ね直線的に外傾して立ち上がり、一部に上半が内湾する箇所がみられる。残存する壁高は北壁30cm、西壁25cmを測る。

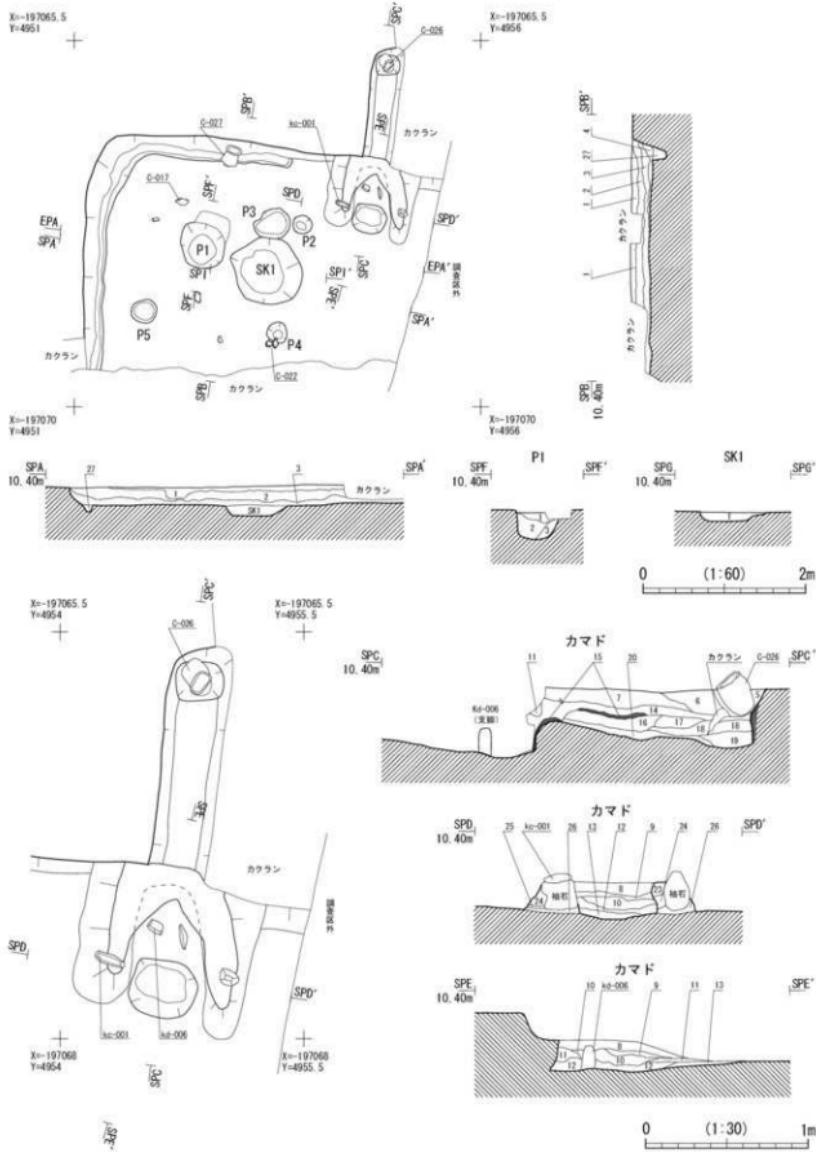
[床面]ほぼ平坦である。掘り方を持たず、基本層IV層を床面としている。

[柱穴]5基検出された。いずれの柱穴からも柱痕跡は確認されなかったものの、位置や規模からみてP1が主柱穴に相当すると考えられる。

[周溝]検出された範囲においては、カマド周辺を除いて壁面に沿って全周する。規模は幅23~43cm、深さ15~18cmを測り、断面形状は逆台形を呈する。

[カマド]北壁に位置し、壁面には直交して付設される。燃焼部から奥壁にかけての天井部が一部残存する状態で検出された。

袖部は西側が長さ78cm、幅30cm、東側が長さ90cm、幅20~32cmを測り、壁面には直交して直線的に伸びる。また、カマド両袖部には砾石器と自然礫が芯材として使用され、東側袖部では長さ25cm程の楕円礫1点が直立した状態で、また西側袖部では約20cm四方の直立した板状礫に扁平な棒状の敲石(第55図-4)が積み上げられた



第52図 SI2堅穴住居跡

状況で検出された。これら芯材に用いられた両袖の礫上面は、ほぼ同一の標高値となることから、本竪穴住居跡のカマド構築に際し、両袖部上面の高さが同一になるように調整されたものと考えられる。石材は、いずれも石英安山岩質凝灰岩である。

燃焼部は幅40cm前後、奥行き80~90cm、奥壁高は約20cmを測る。底面は中央部が皿状に窪み、奥壁方向に緩やかに下る。奥壁は直に立ち上がり、上半部が外反する。また、燃焼部の奥壁側からは、自然礫素材の支脚2点が東西方向に並び、共に直立した状態で出土した。このうち、西側の支脚(第55図-3)は角柱状の礫を素材として上部が台形状に面取りされたもので風化が著しく、東側の支脚は加工の痕跡が認めらない扁平な楕円形の自然礫で被熱が著しい。これら二点の上面はほぼ同一の標高値を示すとなることから、支脚の付設についても両袖の芯材と同様に、西側の支脚に加工を施することで両支脚の上面が同じ高さになるよう調整されたものと考えられる。なお、この2点の石材は、いずれも石英安山岩質凝灰岩である。

煙道部は長さ140cm、幅35~40cm、深さ40~60cmを測る。底面は煙出し部に向かって緩やかな起伏を持ちながら下り、煙出し部には煙道部底面からの深さ約10cmを測るピット状の落ち込みが認められる。煙道部には厚さ5cm程の炭化物が層状に堆積している。煙出し部からは、口縁部上端を欠損する略完形の土師器壺(第54図-5)が埋設されたような状態で出土した。

[その他の施設]土坑が1基検出された。上端幅は80cm前後、深さ7cmを測り、断面形状は皿状を呈する浅いものである。

[出土遺物]本竪穴住居跡からは、多くの遺物が出土した。それらのうち、土師器壺4点・盤2点・高壺1点・壺8点、須恵器蓋2点、鉄鐵1点、礫石器1点、石製品2点を掲載した(第53~55図)。

土師器壺(第53図-1~4)のうち、1は壺としたが、明確な後や段を持たずに内湾する器形や、内外面共にヘラミガキ調整後に黒色処理される整形の特徴からみて、壺の可能性がある。これを除く3点はそれぞれ異なる器形を呈し、床面直上から出土した同図-2は外面口縁部と体部の境界に段を持ち、口縁部は直線的に外傾して上端が短く外反する。内面は非黒色処理である。2層から出土した同図-3は底部中央が上げ底状で、体部との境界に明確な段を持たずに湾曲して立ち上がり、直線的に外傾する口縁部へといたる。煙道堆積土から出土した同図-4は、外面口縁部と体部の境界に段を持ち、内面は外面の段のやや上位に明瞭な稜を持つ。堆積土下層ないし床面直上から出土した土師器盤2点(同図-5・6)は、外面調整や内面黒色処理の有無、器高の違いこそあるものの、器形については土師器壺(同図-2・4)と、それそれ同様の特徴が認められる。床面直上から出土した土師器高壺(同図-7)は内湾する壺口縁部外面の下位に段を持ち、脚部は外反してほぼ真横を向く壺端部へといたる器形を呈する。外面壺体部から脚部上半にかけてはヘラケズリ、脚部下半はハケメの後に粗いヘラミガキが施され、壺部内面のみ黒色処理される。

8点掲載した土師器壺(第54図-1~8)については、口縁部・胴部共に多様な器形を呈する。口縁部形態については、外面胴部との境界に段を持たないもの(第54図-1・2)と段を持つもの(同図-3~6)に大別され、前者はさらに、外反するもの(同図-1)と短く内湾するもの(同図-2)に細別される。後者についてはいずれも外反し、上端が強く屈曲するもの(同図-3)、中程に括れを持つもの(同図-4)、ラッパ状に強く外反し、口唇部がほぼ真横を向くもの(同図-5)に細分される。胴部の膨らみについては、上位に持つもの(同図-5)、中央部に持つと推定されるもの(同図-1・2)、下位に持つもの(同図-6)が認められる。また、床面から出土した同図-7は丸底状の平底を呈する。堆積土1層から出土した同図-8の器形については不明な点が多いものの、これを除く7点は、すべて器形が異なる。また、同図-7の粘土紐上面には放射状の刻みが認められた。これは粘土紐を積み上げる際に上下の粘土紐の接着をより強固にするために施されたものと考えられる。

須恵器蓋(同図-9・10)はいずれもカエリを有するもので、回転ヘラケズリが施される天井部には、つまみが付くものと推定される。床面から出土した前者的器形は、天井部中央がわずかに窪み、内湾して口縁部へといたるのに

S12 堆積土柱記録

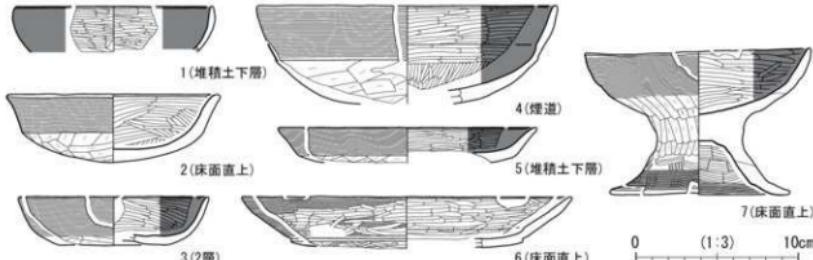
部数	層位	土色	土性	備考
往路堆積土	1	10YR3-3	暗褐色	シルト 10YR6-6明黄褐色シルトブロック・炭化物粒・燒土粒・マンガン鉱を含む。
	2	10YR4-2	II-IV-5黃褐色	シルト 10YR6-4II-5-5黃褐色シルトブロックを多量含む。
	3	10YR3-3	暗褐色	シルト 10YR6-2灰黃褐色シルトブロックを含む。
	4	10YR2-3	黒褐色	シルト 10YR6-2灰黃褐色シルトブロックを含む。
カマド	5	10YR3-2	黒褐色	シルト 燒土粒を含む。
	6	10YR3-3	暗褐色	シルト 10YR6-3灰褐色シルトブロックを含む。
	7	10YR4-3	暗褐色	シルト 燒土粒・マンガン鉱を含む。
	8	10YR4-2	灰黃褐色	シルト 10YR6-2に亜-黄褐色ブロック・燒土粒を含む。(灰井宿場土)
	9	5YR4-4	II-IV-5-5褐色	- 炭化物粒を含む。(灰井宿場土)
	10	7.5YR4-4	褐色	- 灰褐・炭化物粒・燒土ブロックを多量含む。
	11	7.5YR3-2	黒褐色	- 灰褐・炭化物粒を量・香料を含む。
	12	5YR4-3	II-IV-5-5褐色	- 燒土・炭化物粒を含む。
	13	7.5YR3-2	黒褐色	- 燒土・炭化物粒・燒土粒を多量含む。
	14	10YR4-3	褐色	シルト 10YR6-3に亜-黄褐色ブロック・炭化物粒・燒土粒を含む。(燒道宿場土)
	15	7.5YR3-2	黒褐色	シルト 燒土ブロックを含む。(燒道宿場土)
	16	10YR3-3	黒褐色	シルト 10YR6-3に亜-黄褐色ブロック・7.5YR4-1褐色シルトブロック・炭化物粒・燒土粒を含む。(燒道宿場土)
	17	10YR4-3	褐色	シルト 10YR6-3に亜-黄褐色ブロック・炭化物粒を含む。(燒道宿場土)
カマド附	18	10YR5-3	II-IV-5-5褐色	シルト 燒土・炭化物粒を含む。
	19	7.5YR2-2	黒褐色	シルト 燒土ブロックを含む。
	20	7.5YR3-1	黒褐色	シルト 炭化物粒。
	21	5YR2-2	黒褐色	シルト 炭化物粒を含む。
用溝	22	10YR5-6	黃褐色	シルト 炭化物粒・燒土粒を含む。
	23	10YR3-2	黒褐色	シルト 炭化物粒・燒土粒を含む。
	24	10YR3-3	黒褐色	シルト 炭化物粒を多量・燒土粒を含む。
	25	10YR4-3	II-IV-5-5褐色	シルト 炭化物粒・燒土粒を含む。
用溝	26	10YR3-2	黒褐色	- 10YR4-3海灰色ブロック・炭化物・燒土粒を含む。

S12 施設堆積土柱記録

部数	層位	土色	土性	備考
SK1	-	-	-	記記なし。
P1	1	10YR3-2	暗褐色	シルト 10YR6-3に亜-黄褐色ブロック・炭化物を含む。
	2	10YR2-3	黒褐色	シルト 炭化物粒を含む。
	3	10YR2-3	黒褐色	シルト 10YR4-3に亜-黄褐色ブロックを多量含む。
P2	1	10YR4-3	II-IV-5-5褐色	シルト質粘土・燒土・炭化物粒を含む。
P3	1	10YR4-3	II-IV-5-5褐色	シルト質粘土・燒土・炭化物粒を多量含む。
P4	1	10YR4-3	II-IV-5-5褐色	シルト質粘土・燒土・炭化物粒を多量含む。
P5	1	10YR4-3	II-IV-5-5褐色	シルト質粘土・燒土・炭化物粒を含む。

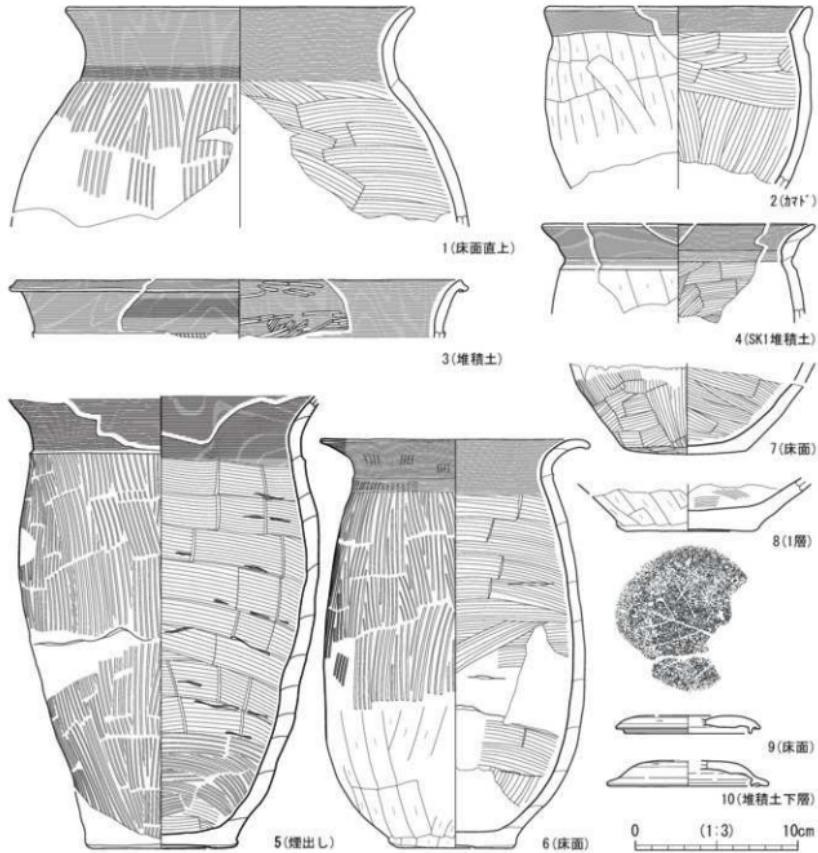
S2 施設輪廓面記録

遺構名	平面形	規模(cm)	深さ(cm)	備考	遺構名	平面形	規模(cm)	深さ(cm)	備考
SK1	平面形	83×79	7		P1	不整形	45×47	3	
P1	湖丸方形	54×54	41		P4	円形	26×26	8	
P2	不整形	23×22	12		P5	円形	31×28	5	



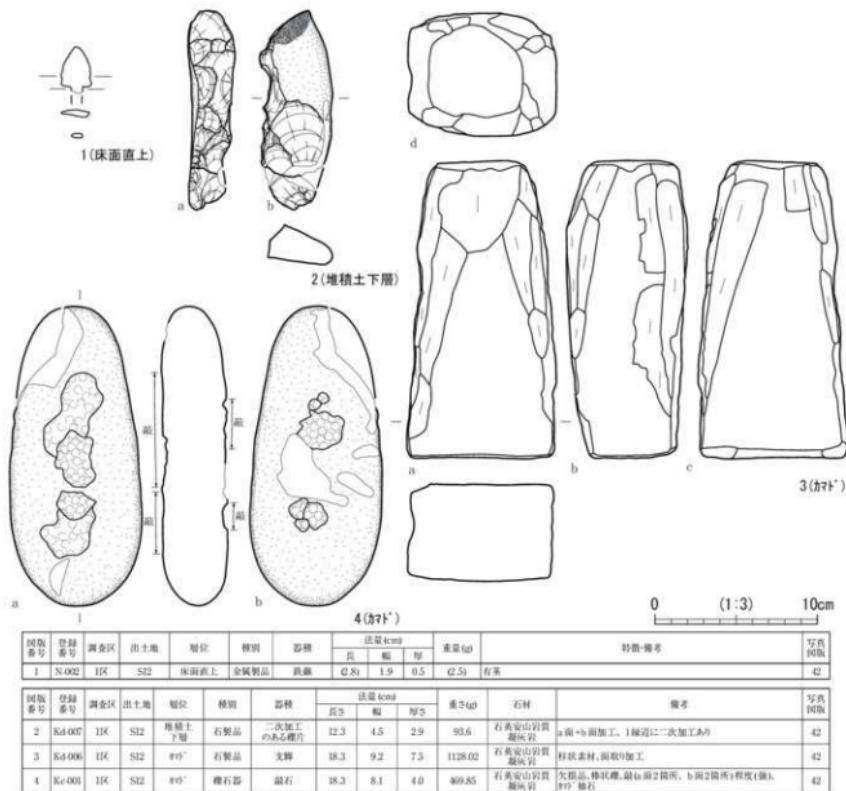
図版番号	登録番号	調査区	出土地	層位	種別	基積	部位	法規(cm)			外側調整	内側調整	備考	写真図版	
								上層	底層	部曲					
1	C021	IIC	S2	堆積土下層	土層部	环	11層-1底	(0.22)	-	(0.8)	0.918'±	0.918'±	内外面黑色処理・焼土	41	
2	C019	IIC	S2	床面直上	土層部	环	11層-底	(確定)	13.0	-	4.2	0.918'±	0.918'±		41
3	C020	IIC	S2	2層	土層部	环	11層-底	(1.18)	-	3.0	0.918'±	0.918'±	内面黑色処理	41	
4	C016	IIC	S2	燒道	土層部	环	11層-底	(0.84)	-	(0.0)	0.918'±	0.918'±	内面黑色処理	41	
5	C018	IIC	S2	堆積土下層	土層部	壁	11層-底	(0.60)	-	(0.2)	0.918'±	0.918'±	内面黑色処理	41	
6	C017	IIC	S2	床面直上	土層部	壁	11層-底	(0.40)	-	(0.2)	0.918'±	0.918'±	外側山脚部焼付着	41	
7	C022	IIC	S2	床面直上	土層部	高环	11層-1底	(確定)	13.8	11.1	9.0	0.918'±	0.918'±	内外面黑色処理	41

第53図 S12堅穴住居出土遺物(1)



回収番号	登録番号	調査区	出土地	部位	種別	器形	部狀	法量(cm)			外周調整	内周調整	備考	写真枚数
								(1)径	(2)底径	(3)高				
1	C-025	IIK	S22	床面直上	土縫器	甕	口縫一側	(21.2)	-	(3.5)	口縫-3.2径、側-5.8径	口縫-3.2径、側-5.8径	外周整拭	41
2	C-024	IIK	S22	アフ	土縫器	甕	口縫一側	(16.2)	-	(1.2)	口縫-3.2径、側-5.8径	口縫-3.2径、側-5.8径	外周整拭	41
3	C-028	IIK	S22	堆積土	土縫器	甕	口縫一側	(27.4)	-	(3.6)	口縫-3.2径-3.2底径、側-5.8径	口縫-3.2径-3.2底径、側-5.8径	外周整拭	41
4	C-023	IIK	S22	SK1堆積土	土縫器	甕	口縫一側	(16.7)	-	(6.1)	口縫-3.2径、側-5.8径	口縫-3.2径、側-5.8径	外周整拭	41
5	C-026	IIK	S22	煙出し	土縫器	甕	口縫一底	-	9.0	(28.0)	口縫-3.2径-3.2底径、側-5.8径 底-5.8径-雨漏粘土貼付 →5.8径	口縫-3.2径-3.2底径、側-5.8径-5.8底径 →5.8径	雨漏された状態で出土	41
6	C-027	IIK	S22	床面	土縫器	甕	口縫一底 (確定形)	16.4	7.4	25.3	口縫-3.2径-3.2底径、側-5.8径 底-5.8径-雨漏粘土貼付 →5.8径	口縫-3.2径、 側-5.8径-5.8底径	外周側部下半被拭	41
7	C-029	IIK	S22	床面	土縫器	甕	側-縫 底	-	7.4	(5.1)	5.8径	5.8径	粘土被拭合間に縫孔、 内面側部底付着。	42
8	C-030	IIK	S22	1層	土縫器	甕	側-縫 底	-	8.5	(3.3)	側-5.8径-5.8底径 底-木葉灰-雨漏粘土貼付	5.8径 底-木葉灰-雨漏粘土貼付	外周被拭、 内面被拭	42
9	E-015	IIK	S22	床面	頭壺器	壺	天井 一丁縫	(9.0)	-	(1.1)	壺口調整、天井-頭壺-5.8径	壺口調整	42	
10	E-016	IIK	S22	堆積土下層	頭壺器	壺	天井 一丁縫	(9.0)	-	(1.6)	壺口調整、天井-頭壺-5.8径	壺口調整-5.8径	42	

第54図 S12堅穴住居出土遺物(2)



第55図 SI2堅穴住居跡出土遺物(3)

対し、床面上から出土した後者は、平坦な天井部と口唇部の境界が括れ、口唇部はほぼ真横を向く器形を呈する。

第55図-1は有茎式の鉄鑿である。基部は平坦で、刃部は二等辺三角形状を呈する。

3点掲載した石器類(第55図2~4)の石材は、いずれも石英安山岩質凝灰岩である。二次加工が施された礫片(同図-2)は、削れた礫片を素材とし、折れ面であるa面に粗い二次加工が連続的に施されている。これらの二次加工は成形削離と考えられることから、棒状の石製品の製作途上と推測される。b面上端部はわずかに被熱し黒変している。同図-3・4は、共にカマド構築材である。前者は角柱状の礫を素材とし、上端部および側縁の角が削られ台形状に仕上げられた支脚である。風化が著しくローリングしているため、被熱痕跡が判然としない。後者は棒状礫を素材とし、上端部がわずかに欠損している礫石で、a・b両面に中央の平坦面に敲打痕が確認される。礫石として使用された後はカマド袖部の芯材に転用されたものである。このほか、堆積土中から骨片が少量出土しているが、分析等を実施しておらず、詳細は不明である。

SI3 穫穴住居跡(第56~59図)

[位置・確認] I区南半部南側、H-I-3・4グリッドに位置する。西側約1/4は、調査区外にかかる。

[重複] SI7・12、SD17A・Bを切り、SB3、SK4に切られる。また、南東部は搅乱により失われている。なお、本竪穴住居跡はSI12と同軸・同規模・同位置に構築されており、このSI12が埋没してから本竪穴住居跡が構築されるまでの間には、少なくとも区画溝の性格が考えられるSD17Bが掘り込まれてから掘り直されたSD17Aが埋没するまでの時間幅が存在することが重複関係から明らかである。本竪穴住居跡はSI12と同軸・同規模・同位置に構築されているといえ、このような状況からみて1軒の建て替えとは考え難い。いずれにしても三者の関係については不明な点が多く、なお検討の余地を残す。

[規模・形態] 検出された範囲の規模は、南北600cm、東西502cmを測る。平面形状は隅丸方形を呈するものと推測される。

[方向] カマド煙道部基準でN-10°-Wである。なお、南壁基準ではN-74°-Eとなり、同一地点の下面で検出されたSI12の南壁基準方向と同軸となる。

[堆積土] 21層に分層された。1~5層は暗褐色土ないし黒褐色シルトを主体とする住居堆積土で、5層はにぶい黄褐色土ブロックを含む。6~16層はカマド関連層位、8層は天井部崩落土である。17~20層はカマド袖部構築土、21層は周溝内堆積土である。

[壁面] 検出された範囲の壁面は外傾して立ち上がり、残存する壁高は北および南壁で8cm、西壁で3cmを測る。

[床面] ほぼ平坦である。掘り方を持たず、基本層IV層を床面としている。

[柱穴] 4基検出され、P3・4には柱痕跡が認められた。位置や規模からP1~3が主柱穴に相当し、P4は補助的な柱穴と考えられる。柱間寸法はP1・P3が約330cm、P1・P2が約320cmを測る。

[周溝] 検出された範囲においては、カマド周辺と北東コーナーを除く壁面に沿って全周する。南西コーナーでは壁面の約20cm内側を周るほか、南壁中央からやや東側には段が認められる。規模は幅15~35cm、深さ10~20cmを測り、断面形状は逆台形を呈する。

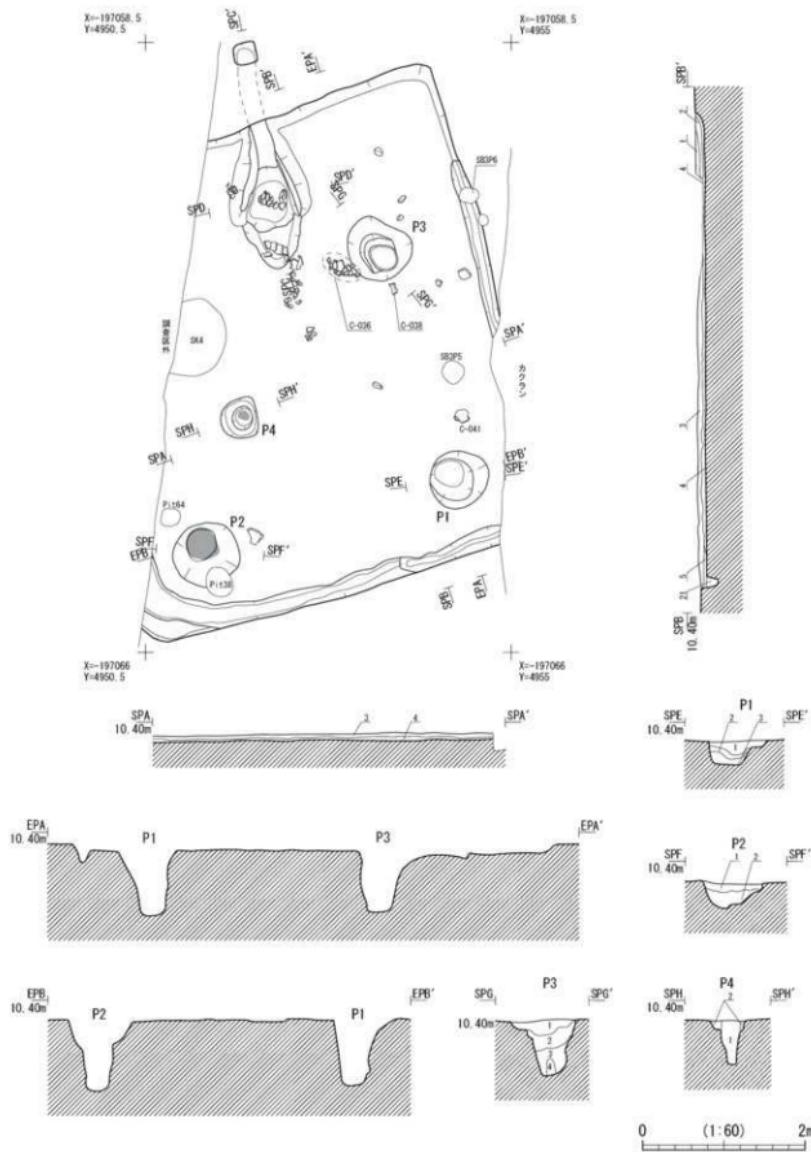
[カマド] 北壁中央部に位置し、壁面に対しやや東に傾いて付設される。袖部は両袖とも長さ120cm前後、幅25cm前後を測り、北壁から「ハ」字状に延びる。

燃焼部は幅60cm、奥行き125cmを測り、底面は皿状に窪む。また、燃焼部の中央付近からは、支脚と考えられる長さ20~25cm、幅10~15cm、厚さ5~10cm程の扁平な楕円形状の自然礫2点が東西方向に並び、西側は直立した状態で、東側はカマド前庭部側にやや傾いた状態で出土した。2点の自然礫はいずれも加工の痕跡は認められず、また被熱の痕跡が顕著である。石材はいずれも石英安山岩質凝灰岩である。

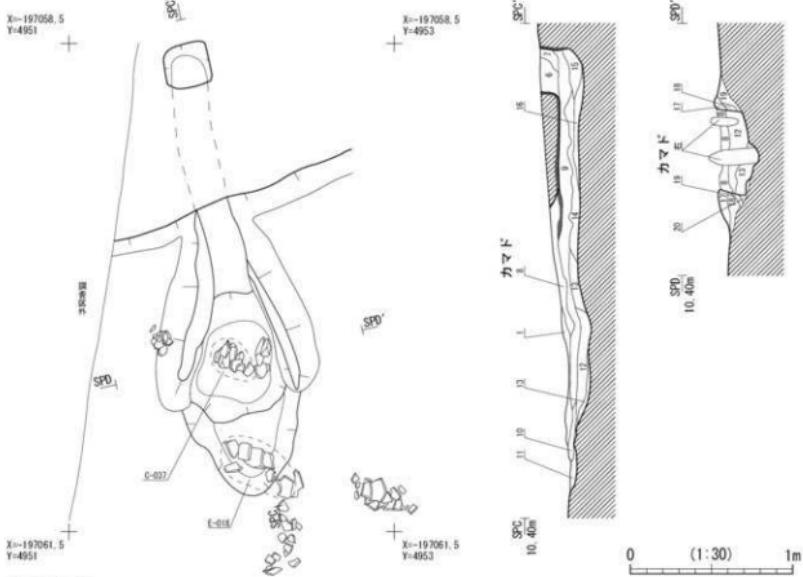
煙道部は天井部が崩落しておらず、良好な残存状態で検出された。規模は長さ96cm、幅20~25cm、底面から天井までの高さ20~25cmを測る。煙道部底面は概ね平坦で、煙道天井部には被熱によるものと考えられる地山の変色が認められる。煙出し部は煙道部底面からわずかに窪み、煙出し部壁面にも被熱によるものと考えられる地山の変色が認められた。

[出土遺物] 床面から堆積土下層を中心として、多くの遺物が出土した。なかでもカマド前庭部周辺からの出土が多い。それらのうち、土師器壺3点・高壺1点・鉢1点・甕5点・瓶1点、須恵器甕2点、土製紡錘車、礫石器、石製品各1点を掲載した(第58・59図)。

堆積土から出土した土師器壺(第58図-1)の器形はいわゆる北武藏型に似た特徴を有するもので、扁平な丸底から内湾する体部へと立ち上がり、直立気味の短い口縁部へといたる。色調は外面とともに橙色を呈し、器厚は5~8mmと厚く、胎土には径1mm程の小礫や石英のはか海綿骨針を多く含む。同図-3は床面から出土した平底の土師器壺で、底部と体部の境界に括れを持ち、内湾気味に口縁部へと開く器形を呈し、体部から口縁部に向かって次



第56図 SI3堅穴住居跡(1)



SI3 埼土記表				備考
層位	層位	土色	土性	
住居構築土	1	10YR3-3	暗褐色	シルト 堆土粒を少含む。
	2	10YR3-2	黒褐色	シルト
	3	10YR3-3	暗褐色	シルト
	4	10YR3-2	黒褐色	シルト 10YR5-4に近い黄褐色土ブロックを含む。
	5	10YR3-1	黒褐色	シルト 炭化物粒を含む。
窓マド	6	10YR4-2	灰褐色	シルト
	7	10YR3-3	暗褐色	シルト
	8	5YR3-2	暗赤褐色	シルト 炭化物・焼土ブロックを含む。(窓マド天井崩落土)
	9	10YR3-2	黒褐色	シルト 7.5YR2-3黒褐色土ブロック・焼土ブロックを含む。
	10	5YR3-2	暗赤褐色	シルト 炭化物粒を含む。
	11	10YR3-2	黒褐色	シルト 炭化物粒を含む。
	12	10YR5-2	灰褐色	シルト 炭化物粒・焼土ブロックを含む。
	13	5YR3-2	暗赤褐色	シルト 堆土。
	14	5YR3-1	黒褐色	シルト 炭化物粒・焼土ブロックを含む。
	15	5YR3-1	黒褐色	シルト 10YR3-2黒褐色シルトを調査し、堆土を含む。
	16	10YR3-3	暗褐色	シルト 堆土を含む。
	17	10YR3-4	暗褐色	シルト 10YR5-6青褐色シルト粒を含む。
	18	10YR4-4	褐色	シルト 10YR5-6青褐色シルトブロック・炭化物粒・焼土ブロックを含む。
	19	10YR4-3	10YR-黄褐色	シルト 炭化物粒・焼土ブロックを含む。
	20	10YR3-4	暗褐色	炭化物・焼土ブロックを含む。
同構	21	10YR3-1	黒褐色	シルト 炭化物粒を含む。

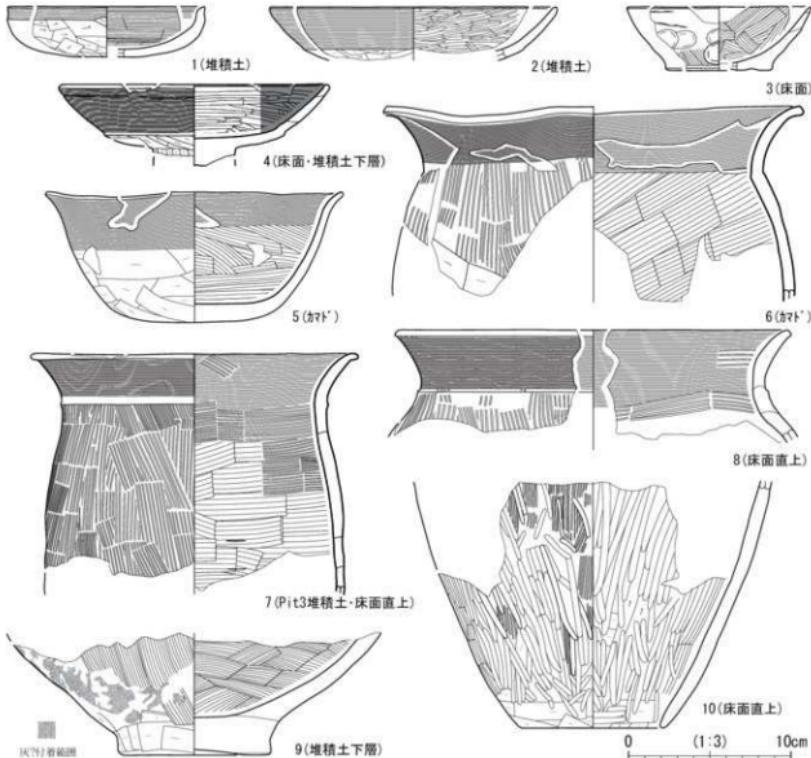
SI3 施設埋土記表				備考
層位	層位	土色	土性	
P1	1	10YR2-3	黒褐色	シルト 炭化物粒を含む。
	2	10YR4-4	褐色	シルト 10YR2-3黒褐色シルトブロックを含む。
	3	10YR4-3	10YR-黄褐色	シルト 測定: 10YR4-4褐色シルトを含む。
P2	1	10YR3-2	黒褐色	シルト 10YR5-4(5)-5 黄褐色シルトブロックを含む。
	2	10YR2-3	黒褐色	シルト 炭化物粒・焼土粒を含む。
P3	1	10YR2-2	黒褐色	シルト 炭化物粒を含む。
	2	10YR5-4	10YR-黄褐色	シルト 10YR2-2黒褐色シルトブロック・炭化物粒を含む。
	3	10YR3-2	黒褐色	シルト 10YR5-4(5)-5 黄褐色シルトブロック・炭化物粒を含む。
	4	10YR3-1	黒褐色	シルト (柱軸跡)
P4	1	10YR3-2	黒褐色	シルト 炭化物粒を含む。
	2	10YR3-2	黒褐色	シルト 10YR5-4(5)-5 黄褐色シルトブロック・測定: 10YR4-4褐色シルトを含む。

第57図 SI3堅穴住居跡(2)

SI3 施設被覆層

遺構名	平面形	規模(cm)	深さ(cm)	備考
P1	円形	71×68	80	
P2	円形	82×75	86	

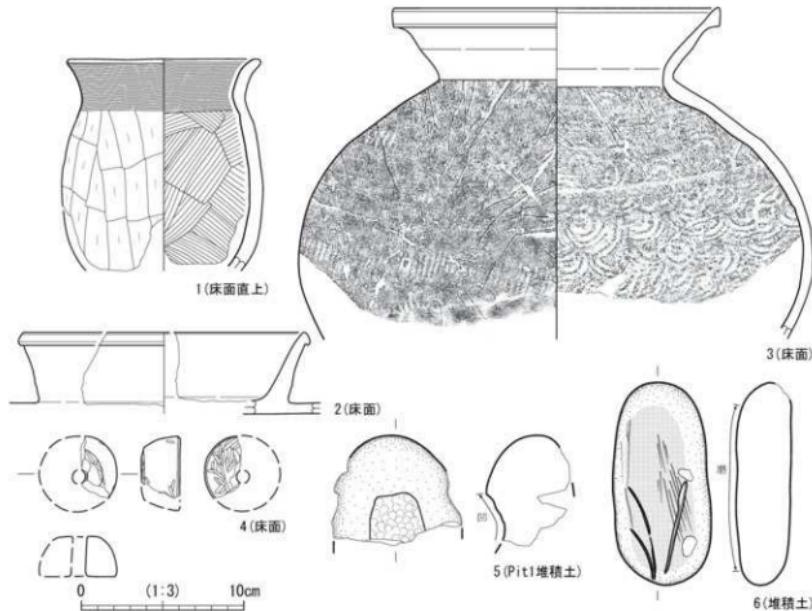
遺構名	平面形	規模(cm)	深さ(cm)	備考
P3	不規則形	80×74	77	
P4	湖丸形	49×45	65	



灰青色着墨圖

國編 番号	登録 番号	調査区	出土地	層位	性別	器種	部狀	法面 cm	外面調整	内面調整	備考	写真 国版
1	C-031	HK	S33	堆積土	土加器	环	口縁～底	(12.2)	—	(3.1)	【環：33°，底～底，～95°】 【環：33°，底～底，～95°】	42
2	C-033	HK	S33	堆積土	土加器	环	口縁～底	(7.8)	—	(3.1)	【環：33°，底～底，～95°】 【底】	42
3	C-034	HK	S33	床面	土加器	环	口縁～底	(11.2)	(6.6)	3.9	【環：33°，底～底，～95°】 【底】	42
4	C-032	HK	S33	床面 堆積土下層	土加器	高环	口縁～脚上端	(6.4)	—	(5.0)	【環：33°，底～底，～95°】 【脚上端～脚上端，～95°】	42
5	C-035	HK	S33	井?	土加器	井	口縁～底	(8.2)	—	8.0	【環：33°，底～底，～95°】 【井】	42
6	C-037	HK	S33	井?	土加器	井	口縁～脚	(25.4)	—	(12.0)	【井：33°～45°，脚～脚】 【井：33°～45°，脚～脚】	42
7	C-036	HK	P33堆積土 床面直上	土加器	井	口縁～脚	(20.0)	—	(14.8)	【井：33°～45°～45°，脚～脚】 【井上手～脚上手，～45°】	43	
8	C-038	HK	S33	床面直上	土加器	井	口縁～脚	(24.0)	—	(7.3)	【井：33°～45°，脚～脚】 【井】	43
9	C-041	HK	S33	堆積土下層	土加器	井	口縁～底	—	9.4	(7.5)	【井：33°，脚下端～95°】 【井】	43
10	C-040	HK	S33	床面直上	土加器	瓶	脚～底	—	(8.6)	(5.1)	【井：33°～45°】 【井：33°～45°～45°】	43

第58図 SI3堅穴住居出土遺物(1)



図版 番号	登録 番号	調査区	出土地	層位	種別	器種	部位	法量(cm)			外側調整	内側調整	備考	写真 図版
								口径	底径	厚さ				
1	C-029	HK	SD3	床面直上	土師器	甕	口縁一部	(11.8)	—	(13.0)	口縁一部付、脚ハラナ付	口縁一部付、脚ハラナ付	外側磨耗	43
2	E-017	HK	SD3	床面	土師器	甕	口縁一部	(17.0)	—	(17.0)	口縁一部付、内側自然輪付、肩青海波文→ハラナ付	口縁一部付、内側自然輪付、肩青海波文→ハラナ付	内側自然輪付、肩青海波文→ハラナ付	43
3	E-018	HK	SD3	床面	土師器	甕	口縁一部	(39.0)	—	(55.4)	口縁一部付、内側調整、脚平行斜付、肩青海波文→ハラナ付	口縁一部付、内側調整、脚平行斜付、肩青海波文→ハラナ付	内側底部自然輪付	43
図版 番号	登録 番号	調査区	出土地	層位	種別	器種	部位	法量(cm)			特徴・参考	備考	写真 図版	
								長さ	幅	厚さ				
4	P-003	HK	SD3	床面	土質品	鉢形串	口縁一部	(12.2)	2.4	(18.1)	口縁一部付、推定直径4.8cm、推定孔径0.9cm	—	—	43
図版 番号	登録 番号	調査区	出土地	層位	種別	器種	部位	法量(cm)			石材	備考	写真 図版	
								長さ	幅	厚さ				
5	Kc-002	HK	SD3	堆積土	陶石器	四石	表面	(6.0)	(1.9)	(10.7)	石英安山岩質 無鉱目	欠損品、凹面(平)深さ(深)	—	43
6	Kd-008	HK	SD3	堆積土	石質品	砾石	表面	32.4	5.3	3.4	石英安山岩質 無鉱目	円錐形、凸面(凸)、万物根あり	—	43

第59図 SI3堅穴住居跡出土遺物(2)

第4器厚が薄くなり、口縁部は厚さ2mmを測る。内面はハラナで整形される。床面および堆積土下層から出土した破片が接合した土師器高杯(同図-4)の脚部上端は、折損したような状況が認められる。残存部分の観察から、脚部の透かしは3窓と推定され、また壊部との接合部には、柄状の溝が放射状に残存する。土師器鉢(同図-4)は底部が平底状の丸底で、内湾する体部から上端が外反する口縁部へといたる器形を呈するもので、口縁部から体部上半の器厚は、底部の約1/2程に薄くなる。5点掲載した土師器甕(第58図-6～9、第59図-1)のうち、第59図-1を除く4点は、外側の頭部と胴部の境界に段もしくは棱を持つ。また、口縁部に最大径を持つものは第58図-6のみで、ほかは胴部中～下位に最大径を持つものと推定される。第58図-9は外側脚部下位に灰と目される付着物が認められる。本堅穴住居跡に切られるSD17A(本節(4)参照)の底面直上から同一個体の胴部破片が出土しており(第147図-5)、SD17Aが機能していた頃の所産と考えられるものである。

単孔の土師器瓶(第58図-10)は一次整形としてハケメおよびヘラケズリが施された後に幅太の工具により、ほぼ全面に粗いヘラミガキが施される。床面直上からの出土ではあるものの、本堅穴住居跡直下に位置するSI12床面直上から出土した破片と接合関係が認められることから、本堅穴住居跡構築以前の所産と考えられる。

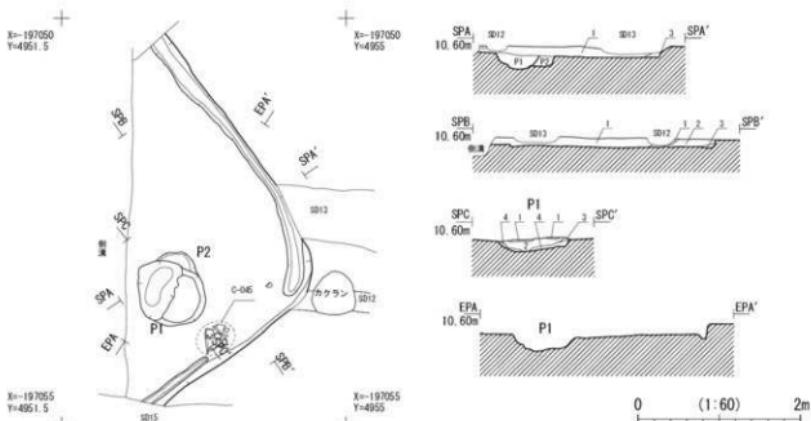
須恵器壺(第59図-2・3)は、いずれも床面からの出土で、口縁部に頸が付く。2は内外面口縁部および外面肩部に自然釉の付着が認められる。肩部はほぼ水平に張り、また内面の頸部と肩部の境界は内側に張り出す。このような器形の特徴からは何らかの脚部である可能性も想定されるが、破片資料であるため判然としない。なお、I区とII区の遺構外から同一個体破片が出土している(第166図-7、第168図-8)。

土製錘鉢車(第59図-4)は3/4程を欠損する。部分的にヘラミガキの痕跡が観察され、中央部の孔は1cm程と推定される。断面形状は、側面にわずかな丸みを帯びる台形を呈する。

礫石器および石製品(第59図-5・6)は、共に片面に加工の痕跡が観察される。石材は、いずれも石英安山岩質凝灰岩である。

SI4 堅穴住居跡(第60・61図)

[位置・確認] I区南半部中央、H-3グリッドに位置する。東側コーナー周辺約1/4が検出された。西側の大部分は



SI4 掘削地盤記表

部位	層位	土色	土性	参考
住居堆積土	1	10YR3/3	暗褐色	シルト 測定: 10YR4-1 暗灰色土を含む。
	2	10YR3/2	黒褐色	シルト 測定: 10YR4-1 暗褐色土を含む。
	3	10YR3/2	黒褐色	シルト 測定: 10YR5-3; 黒褐色土ブロックを含む。

SI4 施設堆積地盤記表

部位	層位	土色	土性	参考
P1	1	10YR3/3	暗褐色	シルト 炭化物・焼土粒を含む。
	2	10YR3/2	黒褐色	シルト 2.5% ± 黒褐色シルトブロック・炭化物・焼土を含む。
	3	10YR3/2	黒褐色	シルト 炭化物・焼土粒を含む。
	4	7.5Y3/2	黒褐色	シルト 炭化物・焼土ブロックを含む。
P2	-	-	-	目視なし。

SI5 施設觀測表

造形名	平面形	規模(cm)	深さ(cm)	参考
P1	円形	71×68	80	
P2	円形	82×75	86	

第60図 SI4 堅穴住居跡

調査区外にかかる。

[重複]SB1、Pit283、SX2を切り、SI5、SD12・13・15に切られる。

[規模・形態]検出された範囲の規模は南北360cm、東西290cmを測る。平面形状は隅丸方形を呈するものと推測される。

[方向]東壁基準でN-35°-Wである。

[堆積土]3層に分層された。暗褐色土ないし黒褐色シルトを主体とし、1・2層は褐灰色土を斑状に、3層はにぶい黄褐色土ブロックを含む。

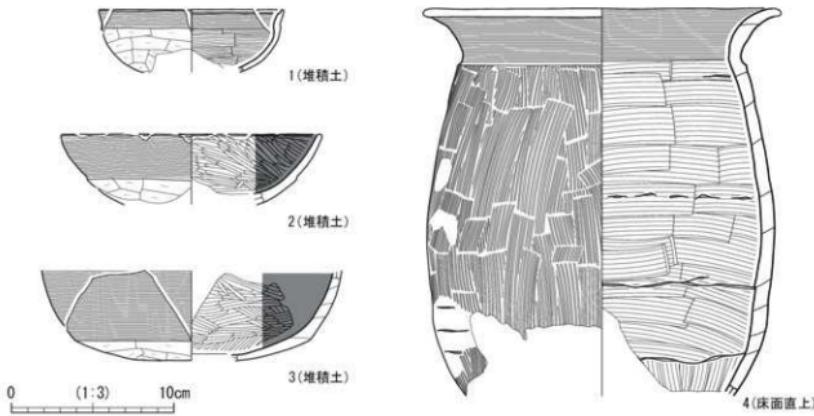
[壁面]検出された範囲の壁面は、直線的にわずかに外傾して立ち上がり、東壁上半は一部外反する箇所がみられる。残存する壁高は、東壁12cm、南壁10cmを測る。

[床面]ほぼ平坦である。掘り方を持たず、基本層IV層を床面としている。

[柱穴]2基が検出された。いずれも柱痕跡は認められず、柱穴であるか否かは不明である。P1は上端径92×76cm、深さ20cmを測り、平面形状は楕円形、断面形状は不整な逆台形を呈する土坑状のもので、堆積土には炭化物・焼土を含む。

[周溝]検出された範囲においては、南壁西側と東壁に沿って周り、東コーナーの南側は1m程途切れる。規模は幅8~24cm、深さ5cm前後を測り、断面形状はU字状を呈する。

[出土遺物]土師器壺3点・甕1点を掲載した(第61図)。1~3は、いずれも堆積土からの出土である。このうち、1はいわゆる北武藏型に似た特徴を有するもので、器形は口縁部の器厚が体部以下に比べてやや厚く、器形は外面が口縁部と体部の境界に僅かな段を持ち、体部から底部は半球形で口縁部は直線的に短く外傾する。内面は口縁部上端に沈線状の段を持ち、また口縁部と体部の境界は、わずかに窪む。調整は外外面とも口縁部にヨコナデ、体部から底部にかけては外面がヘラケズリ、内面はヘラナデが施される。色調は橙色を呈し、胎土には海綿骨針のはか、



第61図 SI4 穴竪住居跡出土遺物

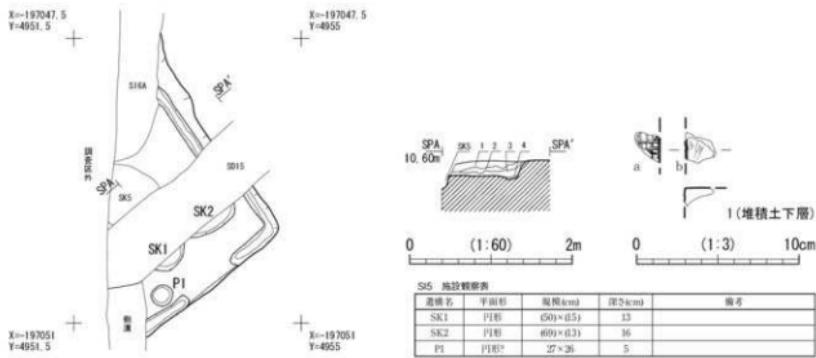
径1mm程の小塵や石英を含む。2・3はいわゆる在地系の特徴を有するもので、器形は共に丸底で口縁部は内湾し、2は外面の口縁部と体部の境界に段を、3は稜を持つ。共に内面は全面にヘラミガキが施され、黒色処理される。4は、押し潰されたような状態で南壁際の床面直上から出土した(第60図)。口縁部に最大径を持ち、胴部中位に膨らみを持ち、外面の頸部と胴部の境界に段を持つ。口縁部はラッパ状に強く外反し、口唇部はほぼ真横を向く。外面胴部はハケメにて整形され、下位の剥離面には粘土紐上面に刻みを伴う輪積み痕が観察された。このことから、粘土紐の輪積み成形後、ハケメ調整の前段階に粘土が上塗りされたものと考えられるが、それが部分的なもののか器面全体におよぶものなのかについては判然としない。

S15 壁穴住居跡(第62図)

[位置・確認] I区南半部中央、H-3グリッドに位置する。東側コーナー周辺約1/3が検出された。西側の大部分は調査区外にかかる。

[重複] SI4・6Bを切り、SI6A、SD15、SK5に切られる。このうち、SI6AとSI6Bは、ほぼ同一地点且つ同一軸に構築されたものである。本壁穴住居跡はSI6AおよびSI6Bのやや南に軸をえて構築されているものの、このような重複および位置関係からは、SI6B→SI5(本壁穴住居跡)→SI6Aという建て替えの変遷が想定される。とはいっても、この3軸はいずれも大部分が調査区外に延びるため、建て替えの有無も含めた重複関係については判然としない。

[規模・形態] 検出された範囲の規模は、南北289cm、東西230cmを測る。平面形状は方形ないし隅丸方形を呈するものと推測される。



S15 地盤堆積土記録表

部位	層位	土色	土性	備考
住居施築土	1 10YR3-1	黒褐色	シルト	
	2 10YR2-2	黒褐色	シルト	測定に10YR4-3において黒褐色シルトを含む。
	3 10YR2-2	黒褐色	シルト	10YR4-3において黒褐色シルトブロック・炭化物を含む。
回復	4 2.5Y3-2	黒褐色	シルト	10YR4-3において黒褐色シルトブロックを含む。

S15 地盤堆積土記録表

部位	層位	土色	土性	法量(cm)			石材	備考	写真 図版
				長さ	幅	厚さ			
SK1	1 10YR3-1	黒褐色	シルト	10YR5-4に5m・黒褐色シルトブロック・炭化物を含む。					
SK2	1 10YR3-1	黒褐色	シルト	10YR5-4に5m・黒褐色シルトブロックを含む。					
PI	1 10YR2-2	黒褐色	シルト	炭化物を微量含む。					

図版 番号	登録 番号	調査区	出土場	層位	種別	器種	法量(cm)	石材	備考	写真 図版
1	Kd009	IIR	S15	堆積土下層	石製品	砾石	(1.6)	(2.1)	(1.6)	(2.85)

第62図 S15壁穴住居跡・出土遺物

[方向] 東壁基準でN-35°-Wである。

[堆積土] 4層に分層された。1～3層は黒褐色シルトを主体とする住居堆積土、4層は周溝内堆積土である。2～4層は、いずれにもぶい黄褐色シルトブロックを含む。

[壁面] 検出された範囲の壁面は概ね直線的にやや外傾して立ち上がるが、わずかに外反する箇所が一部にみられる。

残存する壁高は20～25cmを測る。

[床面] ほぼ平坦である。掘り方を持たず、基本層IV層を床面としている。

[柱穴] 1基検出した。上端径30cm、深さ5cm程を測る浅いもので、柱痕跡は認められない。柱穴であるか否かは不明である。

[周溝] 検出された範囲においては東壁と南壁に沿って周り、南壁では70cm程途切れる。規模は幅13～19cm、深さは東壁が10cm、南壁が3～8cmを測り、断面形状は逆台形を呈する。

[その他の施設] 土坑が2基検出された。後世の遭構に切られ、南側の一部が残存するのみである。いずれも検出された部分の深さは15cm前後を測り、堆積土は黒褐色シルトを主体とする。

[出土遺物] 堆積土中より土師器片等が出土しているが、掲載したのは堆積土下層から出土した砥石1点のみである(第62図)。a・b面に平坦な砥面が形成され、a面には砥石整形時の加工の痕跡が、b面には擦痕が認められる。大半を欠損しているものの、形状は柱状ないし板状と推測される。石材は石英安山岩質凝灰岩である。

SI6A 積穴住居跡(第63-64図)

[位置・確認] I区南半部北側、H-2・3グリッドに位置する。東壁際のみが検出され、西側大部分は調査区外にかかる。調査段階では1軒の竪穴住居跡としていたが、整理段階において調査区壁面の土層断面を検討した結果、SI5を介在する竪穴住居跡2軒の存在が確認されたことから、便宜的にSI5を切るものを6A、SI5に切られるものを6Bとして区別した。また、本竪穴住居跡には検出された範囲からカマドや柱穴、周溝などの施設が検出されてないものの、直下にSI6Bが構築されていることや、SI5およびSI6Bとの重複関係からは、二度にわたる建て替えが考えられたため、竪穴住居跡として記載する。

[重複] SI1・5・6B、SK5を切る。本竪穴住居跡とSI5およびSI6Bの関係については、SI5の項を参照されたい。

[規模・形態] 検出された部分の規模は、南北662cm、東西53cmを測る。平面形状は不明である。

[方向] 東壁基準でN-1°-Eである。

[壁面] 検出された部分の壁面は概ね直線的に外傾して立ち上がり、北側の一部には括れがみられる。調査区壁面にて観察される壁高は最大55cmを測る。

[床面] 北側にわずかな起伏が認められる。

[出土遺物] 土師器壺・高杯を各1点掲載した(第64図)。堆積土からの出土した1は内外面共に段や稜を持たずに入曲する器形を呈する。2は、壺部・脚部共に上方に向かって直線的に外傾し、境界はヘラケズリ調整により強く屈曲する器形を呈する。床面出土として掲載したが、上記のような本竪穴住居跡とSI6Bの関係性から、本来は前述するSI6Bに伴う可能性がある。

SI6B 積穴住居跡(第63図)

[位置・確認] I区南半部北側、H-2・3グリッドに位置し、東壁際のみが検出された。西側の大部分は調査区外にかかる。本竪穴住居跡の遭構番号にBのアルファベットが付された経緯や本遭構を竪穴住居跡とした経緯については、SI6Aの項を参照されたい。

[重複] SD9を切り、SI5・6A、SD5・8に切られる。本竪穴住居跡とSI5およびSI6Aの関係性については、SI5の

項を参照されたい。

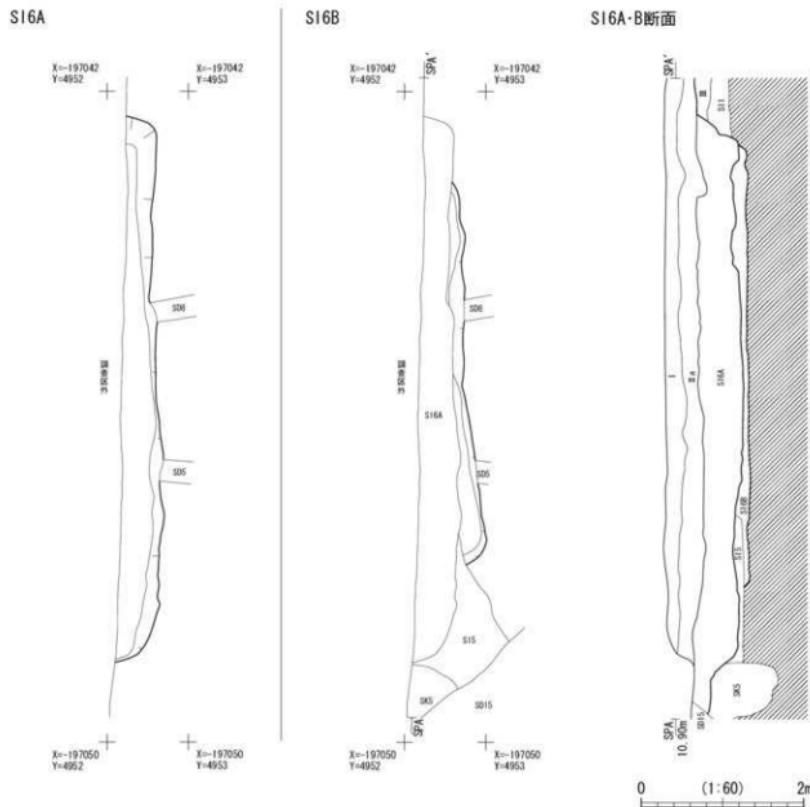
[規模・形態]検出された範囲の規模は南北618cm、東西74cmを測る。平面形状は不明である。

[方向] 東壁基準でN-4°-Eである。

[壁面]検出された範囲の壁面は直線的に外傾して立ち上がり、調査区壁面にて観察される壁高は、最大23cmを測る。

[床面] ほぼ平坦である。

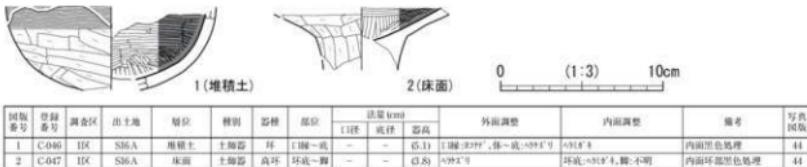
[出土遺物]SI6とした調査段階においては、堆積土中から第64図に掲載した土器片が出土しているが、整理段階において本堅穴住居跡に帰属するものとして明確に区別されるものは認められなかった。



S16 A 進積土註記表				備考
部位	題位	土色	土性	
S86A	-	-	-	詳記なし。

S16B 増殖土封記表				備考
部数	袋数	土色	土性	
SMBB	-	-	-	混記なし

第63図 SI6A・6B豎穴住居跡



第64図 SI6A堅穴住居跡出土遺物

SI7 堅穴住居跡(第65-66図)

[位置・確認] I区南端部、H-1-4グリッドに位置する。北側1/2程を検出した。北西コーナーは調査区外にかかる。

[重複] SI2・3に切られる。

[規模・形態] 検出された範囲の規模は、南北266cm、東西554cmを測り、平面形状は方形ないし隅丸方形を呈するものと推測される。

[方向] 西壁基準でN-29°-Wである。

[堆積土] 10層に分層された。1～7層はカマド関連層位、8層は周溝内堆積土、9・10層は掘り方堆積土である。

[壁面] 検出された範囲の壁面はやや外反して立ち上がり、残存する壁高は最大5cmを測る。

[床面] 9層上面を床面とし、検出された部分においては概ね平坦である。

[柱穴] 2基検出された。柱痕跡が認められたのはP1のみであるが、位置や規模からみて、P1・P2共に主柱穴に相当すると考えられる。両柱穴の柱間寸法は、約350cmを測る。

[周溝] 検出された範囲においては、カマド周辺と東壁南半を除く壁面に沿ってほぼ全周し、西壁には10cm程途切れる箇所がみられる。規模は幅13～22cm、深さは概ね5cmを測り、断面形状は逆台形を呈する。

[カマド] 北壁中央部からやや東寄りに構築され、検出されたのは燃焼部の一部のみである。残存する規模は幅110cm、奥行き150cm、深さ10cm程を測り、底面は皿状に浅く窪む。

[掘り方] 深さ5cm程を測り、底面形状は概ね平坦である。

[出土遺物] 土師器環2点・瓶1点、土製支脚1点を掲載した(第66図)。床面から出土した1には、SI12堆積土から出土した破片と遺構間の接合関係が認められた。器形は底部が平底状の丸底で屈曲して体部へと立ち上がり、体部から口縁部は直線的に外傾する。内面は非黒色処理である。床面直上から出土した2は丸底で外面口縁部と体部の境界に段を持つ。口縁部は内湾気味に外傾し、上端は短く外反する器形を呈する。外面底部のほぼ中央には、逆「ト」字状の刻書が施される。3は床面直上から出土した単孔の土師器瓶で、ヘラケズリの後に幅太の工具で数単位のまとまりを持つ粗いヘラミガキが孔周辺を除いて全面に施される。土製支脚(4)は中実の円筒形を呈するもので、下端部の括れと底面のわずかな窪みは指頭調整による。堆積土上層から出土したもので、本堅穴住居跡に伴うものではない。

SI11 堅穴住居跡(第67図)

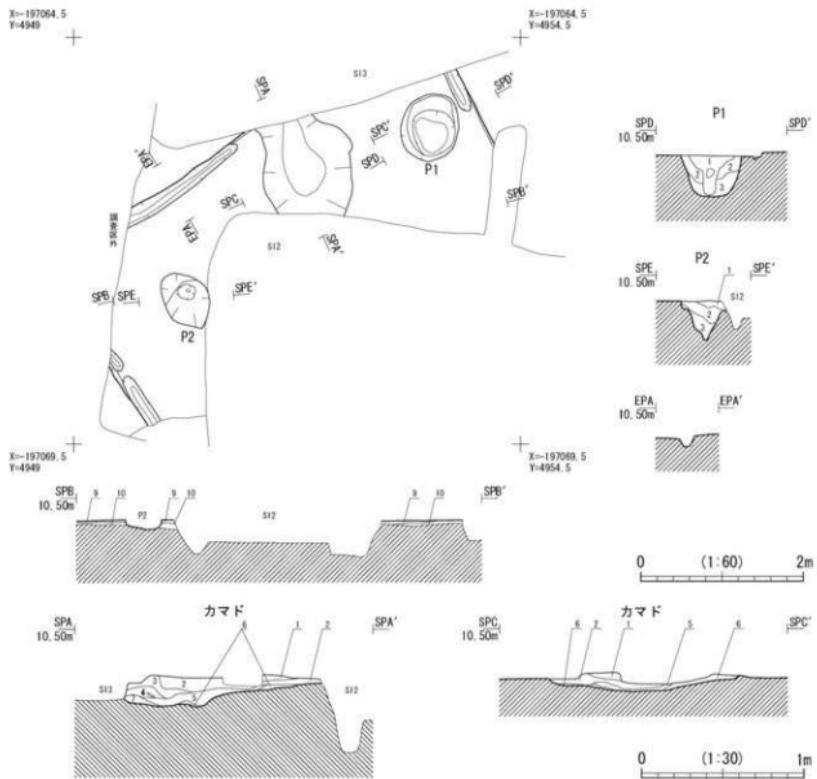
[位置・確認] I区南半部中央、I-3グリッドに位置する。西壁際の一部のみが検出された。東側の大部分は調査区外にかかる。

[重複] SD3・12・13、SK7に切られる。

[規模・形態] 検出された範囲の規模は、南北215cm、東西80cmを測る。平面形状は不明である。

[方向] 西壁基準でN-26°-Eである。

[堆積土] 黒褐色シルトの單層である。



S17 堆積土柱記表				参考
部位	層位	土色	土性	
カマド	1	10YR3-3	暗褐色	シルト 炭化物粒・焼土ブロックを含む。
	2	7.5YR3-2	暗褐色	シルト マンガノ鉄を含む。
	3	10YR4-3	にじ・黄褐色	シルト 10YR5-4 黄褐色ブロックとマンガノ鉄を含む。
	4	10YR3-4	暗褐色	シルト 炭化物粒・焼土鉄・マンガノ鉄を含む。
	5	7.5YR4-3	褐色	粘土質シルト 10YR5-4 黄褐色ブロックとマンガノ鉄を含む。
	6	10YR5-6	黄褐色	シルト 炭化物粒・マンガノ鉄を含む。
	7	10YR3-6	暗褐色	粘土 焼土鉄を含む。
鉄漬	8	10YR5-6	黄褐色	シルト 炭化物粒・焼土鉄を含む。
塗り方	9	10YR4-3	にじ・黄褐色	シルト 炭化物粒・焼土鉄を含む。
	10	10YR5-6	黄褐色	シルト マンガノ鉄を含む。

S17 施設堆積土柱記表				参考
部位	層位	土色	土性	
P1	1	10YR3-3	暗褐色	シルト 10YR5-6 黄褐色ブロック・炭化物粒・焼土鉄を含む。
	2	10YR4-3	にじ・黄褐色	粘土質シルト 炭化物粒を含む。
	3	10YR3-4	暗褐色	シルト 10YR5-6 黄褐色ブロック・炭化物粒を含む。
P2	1	10YR3-3	暗褐色	シルト 炭化物粒・マンガノ鉄を含む。
	2	10YR4-3	にじ・黄褐色	粘土質シルト 10YR5-6 にじ・黄褐色ブロック・炭化物粒・マンガノ鉄を含む。
	3	10YR5-3	にじ・黄褐色	粘土質シルト 10YR5-6 にじ・黄褐色ブロック・炭化物粒・マンガノ鉄を含む。

97 施設剖面表	面積名	平面形	規模(km ²)	深さ(cm)	概考	面積名	平面形	規模(km ²)	深さ(cm)	概考
P1	円内形	83×71	36			P2	角内形	77×55	57	

第65図 S17 穴穴住居跡